

## 二十四の瞳（壺井栄）

### 一 小石先生

十年をひと昔むかしというならば、この物語の発端はつたんは今からふた昔半もまえのことになる。世の中のできごととはいえば、選挙せんきょの規則きぎくがあらたまって、普通選挙法ふつうせんきょほうというのが生まれ、二月にその第一回の選挙がおこなわれた、二か月後のことになる。昭和三年四月四日、農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海せとないかいべりの一寒村へ、若い女の先生が赴任ふにんしてきた。

百戸あまりの小さなその村は、入り江の海を湖みずうみのような形にみせる役をしている細長い岬みさきの、そのとつばなにあつたので、対岸の町や村へゆくには小舟で渡わたったり、うねうねとまがりながらつづく岬の山道をてくてく歩いたりせねばならない。交通がすぐくふべんなので、小学校の生徒は四年までが村の分教場にゆき、五年になってはじめて、片道五キロの本村の小学校へかようのである。手作りのわらぞうりは一日できた。それがみんなはじめであった。毎朝、新しいぞうりをおろすのは、うれしかったにちがいない。じぶんのぞうりをじぶんの手で作るのも、五年生になってからの仕事である。日曜日に、だれかの家へ集まってぞうりを作るのはたのしかった。小さな子どもらは、うらやましそうにそれをながめて、しらすしらすのうちに、ぞうり作りをおぼえてゆく。小さい子どもたちにとって、五年生になるということは、ひとり立ちを意味するほどのことであつた。しかし、分教場

もたのしかった。

分教場の先生は二人で、うんと年よりの男先生と、子どものように若い女先生がくるのにきまつていた。それはまるで、そういう規則があるかのように、大昔からそうだった。職員室しやくいんしつのとなりの宿直室しゆくちやくしつに男先生は住みつき、女先生は遠い道をかよつてくるのも、男先生が三、四年を受けもち、女先生が一、二年と全部の唱歌しやうかと四年女生の裁縫さいほうを教える、それも昔からのきまりであつた。生徒たちは先生を呼ぶのに名をいわず、男先生、女先生といつた。年よりの男先生が恩給おんきゆうをたのしみに腰こしをすえているのと反対に、女先生のほうは、一年かせいぜい二年すると転任てんにんした。なんでも、校長になれない男先生の教師としての最後のつとめと、新米しんまいの女先生が苦勞くわうのしはじめを、この岬みさきの村の分教場でつとめるのだという噂うわさもあるが、うそかほんとかはわからない。だが、だいたいほんとうのようでもある。

そうして、昭和三年の四月四日にもどろう。その朝、岬の村の五年生以上の生徒たちは、本校まで五キロの道をいそいそと歩いていった。みんな、それぞれ一つずつ進級しんきゅうしたことが心はずませ、足もとも軽かつたのだ。かばんの中は新しい教科書にかわっているし、今日きょうから新しい教室で、新しい先生に教えてもらうたのしみは、いつも通る道までが新らしく感じられた。それというのも、今日は、新しく分教場へ赴任ふにんしてくる女先生に、この道で出あうということもあつた。

「こんどのおなご先生、どんなヤツじやろな」

わざとぞんざいに、ヤツよばわりをするのは、高等科――

今の新制中学生にあたる男の子どもたちだ。

「こんどのもまた、女学校出え出えの卵じゃいよったぞ」

「そんなら、また半人前先生か」

「どうせ、岬はいつでも半人前じゃないか」

「貧乏村なら、半人前でもしようがない」

正規の師範出ではなく、女学校出の準教員（今では助教というのだろうか）のことを、口のわるい大人たちが、半人前などというのをまねて、じぶんたちも、もう大人になったようなつもりでいつているのだが、たいして悪気はなかった。しかし、今日はじめてこの道を歩くことになった五年生たちは、目をぱちくりさせながら、今日仲間入りをしたばかりの遠慮さで、きいている。だが、前方から近づいてくる人の姿をみとめると、まさきに歓声をあげたのは五年生だった。

「わあ、おなご先生エ」

それは、ついこないだまで教えてもらっていた小林先生である。いつもはさっさとすれちがいがらおじぎを返すだけの小林先生も、今日は立ちどまって、なつかしそうにみんなの顔をかわるがわる見まわした。

「今日で、ほんとにおわかれね。もうこの道で、みんなに出あうことはないわね。よく勉強してね」

そのしんみりした口調に涙ぐんだ女の子もいた。この小林先生だけは、これまでの女先生の例をやぶって、まえの先生が病気でやめたあと、三年半も岬の村を動かなかった先生であった。だから、ここで出あった生徒たちは、いちどは小林先生に教わったことのあるものばかりだ。先生がかわるとい

て分かるのだが、小林先生は、かた破りに十日もまえに生徒に話したのである。三月二十五日の修業式に本校へいった帰り、ちやうど、いま、立っているこのへんで、別れのことばをいい、みんなに、キャラメルの小箱を一箱ずつくれた。だからみんなは、今日この道を新らしい女先生が歩いてくるとばかり思っていたのに、それを迎えるまえに小林先生にあってしまったのである。小林先生も、今日は分教場にいる子どもたちに、別れのあいさつにゆくところなのであろう。

「先生、こんどくる先生は？」

「さあ、もうそろそろ見えるでしょう」

「こんどの先生、どんな先生？」

「しらんのよ、まだ」

「また女学校出え出え？」

「さあ、ほんとにしらんの。でもみんな、性わるしたら、だめよ」

そういつて小林先生は笑った。先生もはじめの一年は途中の道でひどく困らされて、生徒の前もかまわず泣いたこともあった。泣かした生徒はもうここにはいないけれど、ここにいる子の兄や姉である。若いのと、なれないのとで、岬へくるといっている女先生が、一度は泣かされるのを、本校通いの子どもらは伝説として知っていた。四年もいた小林先生のとなので、子どもたちの好奇心はわくわくしていた。小林先生と別れてからも、みんなはまた、こんどくる先生の姿を前方に期待しながら、作戦をこらした。

「芋女オって、どなるか」

「芋女でなかったら、どうする」

「芋女に、きまつとると思うがな」

口ぐちに芋女芋女といっているのは、この地方がさつま芋の本場であり、その芋畑のまん中にある女学校なので、こないたずらな呼びかたも生まれたわけだ。小林先生もその芋女出身だった。子どもたちは、こんどくる女先生をも芋女出ときめて、もうくるか、もう見えるかと、道がまがるたびに前方を見わたしたが、彼らの期待する芋女出え出えの若い先生の姿にはついにあわず、本村の広い県道に出てしまった。と同時に、もうおなご先生のことなどかなぐり捨てて、小走りになった。いつも見るくせになっている県道ぞいの宿屋の玄関の大時計が、いつもより十分ほどすすんでいたからだ。時計がすすんだのではなく、小林先生と立ち話をしたただけおそくなったのだ。背中や脇の下で筆箱を鳴らしながら、ほこりを立ててみんなは走りつづけた。

そうして、その日の帰り道、ふたたび女先生のことを思いだしたのは県道から、岬のほうへわかれた山道にさしかかっただけである。しかもまた、向こうから小林先生が歩いてくるのだ。長い袂の着物をきた小林先生は、その袂をひらひらさせながら、みょうに両手を動かしている。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

女の子はみんな走りだした。先生の笑顔がだんだんはつきりと近づいてくると、先生の両手が見えない綱をひっぱっていることがわかって、みんな笑った。先生はまるで、ほんとうに綱でもひきよせているように、両手をかわるがわる動かし、とうとう立ちどまってみんなをひきよせてしまった。

「先生、こんどのおなご先生、きた？」

「きたわ。どうして？」

「まだ学校にいるん？」

「ああ、そのこと。舟できたのよ、今日は」

「ふうん。それでまた、舟で去んだん？」

「そう、わたしにもいっしょに舟で帰ろうとすすめてくれたけど、先生、もーぺんあんたら顔みたかったから、やめた」

「わア」

女の子たちがよろこんで歓声をあげるのを、男の子はにやにやして見ている。やがてひとりだけがたずねた。

「こんどの先生、どんな先生ぞな？」

「いい先生らしい。かわいらしい」

小林先生はふつと思いだしたような笑顔をした。

「芋女？」

「ちがう、ちがう。えらい先生よ、こんどの先生」

「でも、新米じゃろ」

小林先生はきゆうにおこったような顔をして、

「あんたら、じぶんで教えてもらう先生でもないのに、どうしてそんなこというの。はじめっから新米でない先生で、ないのよ。またわたしのときみたいに、泣かすつもりでしょう」

そのけんまくに、心の中を見すかされたと思つて目をそらすものもあつた。小林先生が分教場にかよいだしたころの生徒は、わざと一列横隊になつておじぎをしたり、芋女とさけんんだり、穴があくほど見つめたり、にやにや笑いをしたりと、いろんな方法で新米の先生をいやがらせたものだった。しかし、三年半のうちにはもうどんなことをしても先生のほ

うで困らなくなり、かえって先生が手出しをしてふざけたりした。五キロの道のりでは、なにかなくてはやりきれなかったのだろう。ころをみて、またひとりの生徒がたずねた。

「こんどの先生、何いう名前？」

「大石先生。でもからだは、ちっちゃあい人。小林でもわたしはのっぽだけど、ほんとに、ちっちゃあい人よ。わたしの肩ぐらい」

「わあ！」

まるで喜ぶようなその笑い声をきくと、小林先生はまたきつとなつて、

「だけど、わたしらより、ずっとずっとえらい先生よ。わたしのように半人前ではないのよ」

「ふうん。そいで先生、舟でかようんかな？」

ここが大問題だというようにきくのへ、先生のほうも、ここだなという顔をして、

「舟は今日だけよ。明日からみんな会えるわ。でも、こんどの先生は泣かんよ。わたし、ちゃんといつといたもの。本校の生徒と行き戻りに出あうけど、もしもいたずらしたら、猿が遊んでると思つときなさい。もしもなんかいつてなぶつたら、鳥が鳴いたと思つときなさいって」

「わあ」

「わあ」

みんないっせいに笑った。いっしょに笑って、それで別れて帰ってゆく、小林先生のうしろ姿が、つぎの曲がり角に消えさるまで、生徒たちは口ぐちに叫んだ。

「せんせえ」

「さよならあ」

「嫁さーん」

「さよならあ」

小林先生はお嫁にゆくためにやめたのを、みんなはもう知っていたのだ。先生が最後にふりかえって手をふって、それで見えなくなると、さすがにみんなの胸には、へんな、もの悲しさがのこり、一日のつかれも出てきて、もっそりと歩いた。帰ると、村は大さわぎだった。

「こんどのおなご先生は、洋服きとるど」

「こんどのおなご先生は、芋女とちがうど」

「こんどのおなご先生は、こんまい人じゃど」

そしてつぎの日である。芋女出でない、小さな先生にたいして、どきどきするような作戦がこらされた。

こそこそ、こそこそ

こそこそ、こそこそ

道みちささやきながら歩いてゆく彼らは、いきなりどきもぬかれたのである。場所もわるかった。見通しのきかぬ曲がり角の近くで、この道にめずらしい自転車が見えたのだ。自転車はすうっと鳥のように近づいてきたかと思うと、洋服をきた女が、みんなのほうへにこつと笑いかけて、

「おはよう！」

と、風のように行きすぎた。どうしたってそれは女先生にちがいがなかった。歩いてくるとばっかり思っていた女先生は自転車をとばしてきたのだ。自転車にのった女先生ははじめてである。洋服をきた女先生もはじめて見る。はじめての日、おはよう！ とあいさつをした先生もはじめてだ。みんな

な、しばらくはぼかんとしてそのうしろ姿を見おくっていた。全然これは生徒の敗けである。どうもこれは、いつもの新任先生とはだいぶ違うすがちがう。少々のいたずらでは、泣きそうもないと思った。

「ごついな」

「おなごのくせに、自転車にのったりして」

「なまいきじゃな、ちつと」

男の子たちがこんなふうに批評している一方では、女の子はまた女の子らしく、少しちがった見方で、話はずみだしている。

「ほら、モダンガールいうの、あれかもしれんな」

「でも、モダンガールいうのは、男のように髪をここのとこで、さんばつしとることじゃろ」

「そういつて耳のうしろで二本の指を鉏くにしてみせてから、

「あの先生は、ちゃんと髪ゆうとつたもん」

「それでも、洋服きとるもん」

「ひよつとしたら、自転車屋の子かもしれんな。あんなきれいな自転車にのるのは。ぴかぴか光つとつたもん」

「うちらも自転車にのれたらええな。この道をすうつと走り、気色がええじゃろ」

なんとでも自転車では太刀打ちできない。しよい投げをくわされたように、みんながっかりしていることだけはまぢがいなかった。なんとか鼻をあかしてやる方法を考えたいたと、めいめい思っているのだが、なに一つ思いつかないうちに岬の道を出はずれていた。宿屋の玄関の柱時計は今日もまた、みんなの足どりを正直にしめして八分ほどすぎている。

それ、とばかり背中と脇の下の筆入れはいっせいに鳴りだし、ぞうりはほこりを舞いあがらせた。

ところが、ちょうどその同じころ、岬の村でも大さわぎだった。昨日は舟にのってきたとかで、気がつかぬうちにまた舟で帰ったのをきいた村のおかみさんたちは、今日こそ、どんな顔をして道を通るか、その洋服をきているという女先生を見たがっていた。ことに村の入り口の関所とあだ名のあるよろずやおかみさんときたら、岬の村へくるほどの人は、だれよりも先にじぶんが見る権利がある、とでもいうように、朝のおきぬけから通りのほうへ気をくばっていた。だいで永らく雨がなかったので、かわいた表通りに水をまいておくのも、新しい先生を迎えるにはよからうと、ぞうきんバケツをもって出てきたとき、向こうから、さあつと自転車が走ってきたのだ。おやつと思うまもなく、

「おはようございます」

あいそよく頭をさげて通りすぎた女がある。

「おはようございます」

返事をしたとたんに、はつと気がついたが、ちょうど下り坂になった道を自転車はもう走りさっていた。よろずやおかみさんはあわてて、となりの大工さんとこへ走りこみ、井戸ばたでせんたくものをつけているおかみさんに大声でいった。

「ちょっと、ちょっと、いま、洋服きた女が自転車にのって通ったの、あれがおなご先生かいの？」

「白いシャツきて、男みたような黒の上着きとつたかいの」「うん、そうじゃ」

「なんと、自転車でかいの」

昨日入学式に長女の松江をつれて学校へいった大工のおかみさんは、せんたくものを忘れて、あきれた声でいった。よろずやおかみさんは、わが意を得たという顔で、

「ほんに世もかわったのう。おなご先生が自転車にのる。おてんばといわれせんかいな」

口では心配そうにいったが、その顔はもうおてんばときめている目つきをしていた。よろずやの前から学校までは自転車二、三分であろうが、すうっと風をきって走っていった十五分もたたぬうちに、女先生の噂はもう村中にひろまっていた。学校でも生徒たちは大さわぎだった。職員室の入り口のわきに置いた自転車をとりまいて、五十人たらずの生徒は、がやがや、わやわや、まるで雀のけんかだった。そのくせ女先生が話しかけようとして近づくと、やっぱり雀のようにぱあつと散ってしまう。しかたなく職員室にもどると、たったひとりの同僚の男先生は、じつにそっけない顔でだまつている。まるでそれは、話しかけられるのは困りますとでもいつているふうに、机の上の担当箱のかげにうつむきこんで、なにか書類を見ているのだ。授業のうちあわせなどは、きのう小林先生との事務ひきつきですんでいるので、もうことさら用事はないのだが、それにしてもあんまり、そっけなさすぎると、女先生は不平だったらしい。しかし、男先生は男先生で、困っていたのだ。

——こまったな。女学校の師範科を出た正教員のぱりぱりは、芋女出え出えの半人前の先生とは、だいぶようすがちがうぞ。からだこそ小さいが、頭もよいらしい。話があうかな。

昨日、洋服をきてきたので、だいぶハイカラさんだとは思っていたが、自転車にのってくるとは思わなんだ。困ったな。なんで今年にかぎって、こんな上等を岬へよこしたんだらう。校長も、どうかしとる。——

と、こんなことを思っただけを思っていたのだ。この男先生は、百姓の息子が、十年がかりで検定試験をうけ、やっと四、五年前に一人前の先生になったという、努力型の人間だった。いつも下駄ばきで、一枚かんばんの洋服は肩のところはやけて、ようかん色にかわっていた。子どももなく年とった奥さんと二人で、貯金だけをたのしみに、儉約にくらしているような人だから、人のいやがるこのふべんな岬の村へきたのも、つきあいがなくてよいと、じぶんからの希望であつたという変り種だった。靴をはくのは職員会議などで本校へ出むいてゆくときだけ、自転車などは、まださわったこともなかったのだ。しかし、村ではけっこう気にいられて、魚や野菜に不自由はしなかった。村の人と同じように、垢をつけて、村の人と同じものを食べて、村のことばをつかっているこの男先生に、新任の女先生の洋服と自転車はひどく気づまりな思いをさせてしまった。

しかし、女先生はそれを知らない。前任の小林先生から、本校通学の生徒のいたずらについては聞いていたのだが、男先生についてはただ、「へんこつよ、気にしないで」とささやかれただけだった。だが、へんこつよというよりも、まるでいじわるでもされそうな気がして、たった二日目だというのに、うっかりしていると、ためいきが出そうになる。女先生の名は大石久子。湖のような入り江の向こう岸の、大きな一本松

のある村の生まれである。岬の村から見ると一本松は盆栽の木のように小さく見えたが、その一本松のそばにある家ではお母さんがひとり、娘のつとめぶりを案じてくれている。——と思うと、大石先生の小さなからだは思わず胸をはって、大きく息をすいこみ、

「お母さん！」

と、心の底から呼びかけたくなる。ついこのあいだのこと、「岬は遠くて気のどくだけど、一年だけがまんしてください。一年たったら本校へもどしますからな。分教場の苦勞は、さきしといたほうがいいですよ」

亡くなった父親と友だちの校長先生にそういわれて、一年のしんぼうだと思つてやってきた大石先生である。歩いてかようにはあまりに遠いから、下宿をしてはとすすめられたのを、母子いっしょにくらせるのをただ一つのたのしみにして、市の女学校の師範科の二年を離れてくらしていた母親のことを思い、片道八キロを自転車でかよう決心をした大石先生である。自転車は久子としたしかつた自転車屋の娘の手づるで、五か月月賦で手にいれたのだ。着物がないので、母親のセルの着物を黒く染め、へたでもじぶんで縫った。それともしらぬ人びとは、おてんばで自転車にのり、ハイカラぶつて洋服をきていると思つたかもしれぬ。なにしろ昭和三年である。普通選挙がおこなわれても、それをよそごとに思っているへんぴな村のことである。その自転車が新らしく光っていたから、その黒い手縫いのスウツに垢がついていかなかったから、その白いブラウスがまっ白であったから、岬の村の人にはひどくぜいたくに見える、おてんばに見える、よりつきがたい女に

見えたのであろう。しかしそれも、大石先生にはまだなっとくのゆかぬ、赴任二日目である。ことばの通じない外国へでもやってきたような心細さで、一本松のわが家のあたりばかりを見やっていた。

カツ　カツ　カツ　カツ

始業を報じる板木が鳴りひびいて、大石先生はおどろいて我れにかえた。ここでは最高の四年生の級長に昨日えらばれたばかりの男の子が、背のびをして板木をたたいていた。校庭に出ると、今日はじめて親の手をはなれ、ひとりで学校へきた気負いと一種の不安をみせて、一年生のかたまりだけは、独特な、無言のざわめきをみせている。三、四年の組がさつさと教室へはいつていったあと、大石先生はしばらく両手をたたきながら、それにあわせて足ぶみをさせ、うしろむきのまま教室へみちびいた。はじめてじぶんにかえつたようなゆとりが心にわいてきた。席におさまると、出席簿をもつたまま教壇をおり、

「さ、みんな、じぶんの名前をよばれたら、大きな声で返事するんですよ。——岡田磯吉くん！」

背の順にならんだので一番前の席にいたちびの岡田磯吉は、まっさきにじぶんが呼ばれたのも気おくれのしたもどであったが、生まれてはじめてクンといわれたことでもびっくりして、返事がのどにつかえてしまった。

「岡田磯吉くん、いないんですか」

見まわすと、いちばんうしろの席の、ずぬけて大きな男の

子が、びっくりするほど大声で、答えた。

「いる」

「じゃあ、ハイって返事するのよ。岡田磯吉くん」

返事した子の顔を見ながら、その子の席へ近づいてゆくと、二年生がどっと笑いだした。本ものの岡田磯吉は困って突っ立っている。

「ソソキよ、返事せえ」

きょうだいらしく、よくにた顔をした二年生の女の子が、磯吉にむかって、小声でけしかけている。

「みんなソソキっていうの？」

先生にきかれて、みんなは一ようにならずいた。

「そう、そんなら、磯吉のソソキさん」

また、どつと笑うなかで、先生も一しよに笑いだしながら鉛筆を動かして、その呼び名をも出席簿しゅつせきぼに小さくつけこんだ。

「つぎは、竹下竹たけしたたけいちくん」

「ハイ」りこうそうな男の子である。

「そうそう、はつきりと、よくお返事できたわ。——そのつぎは、徳田吉次とくだきちじくん」

徳田吉次がいきをすいこんで、ちょっとまをおいたところを、さつき、岡田磯吉のとき「いる」といった子が、少しい気になった顔つきで、すかさず、

「キツチン」

と、叫さけんだ。みんながまた笑いだしたことで相沢仁太あいざわにたというその子はますますいい気になり、つぎに呼んだ森岡正もりおかただしのときも、「タンコ」とどなった。そして、じぶんの番になると、いっそう大声で、

「ハイ」

先生は笑顔のなかで、少したしなめるように、

「相沢仁太くんは、少しおせっかいね。声も大きすぎるわ。こんどは、よばれた人が、ちゃんと返事してね。——川本松江かわもとまつえさん」

「ハイ」

「あんたのこと、みんなはどういうの？」

「マツちゃん」

「そう、あんたのお父さん、大工だいくさん？」

松江はこつくりをした。

「西口ミサ子にしぐちさん」

「ハイ」

「ミキちゃんていうんでしょ」

彼女もまた、かぶりをふり、小さな声で、

「ミイさん、いうん」

「あら、ミイさんいうの。かわいらしいのね。——つぎは、香川かがわマスノさん」

「ハイ」

思わずふきだしそうになるのをこらえこらえ、先生はおさえたような声で、

「ハイは、すこしおかしいわ。ハイっていいましょね、マスノさん」

すると、おせっかいの仁太がまた口をいれた。

「マアちゃんじゃ」

先生はもうそれを無視むしして、つぎつぎと名前を呼んだ。

「木下富士子きのしたふじこさん」

「ハイ」

「山石早苗さん」

「ハイ」

返事のたびにその子の顔に微笑をおくりながら、

「加部小ツルさん」

急にみんながわいわいさわぎでした。何ごとかとおどろいた先生も、口ぐちにいつていることがわかると、香川マスノのヘイよりも、もっとおかしく、若い先生はとうとう笑いだしてしまった。みんなはいつているのだった。カベコツツル、カベコツツル、壁に頭をカベコツツル。

勝気らしい加部小ツルは泣きもせず、しかし赤い顔をしてうつむいていた。そのさわぎもやっとおさまって、おしまいの片桐コトエの出席をとったときにはもう、四十五分の授業時間はたつてしまっていた。加部小ツルがチリリンヤ（腰にリンをつけて、用足しをする便利屋）の娘であり、木下富士子（が旧家の子どもであり、ヘイと返事をした香川マスノが町の料理屋の娘であり、ソソキの岡田磯吉の家が豆腐屋で、タンコの森岡正が網元の息子と、先生の心のメモにはその日のうちに書きこまれた。それぞれの家は豆腐屋とよばれ、米屋とよばれ、網屋とよばれてはいても、そのどの家もめいめいの商売だけでは暮しがたらず、百姓もしていれば、片手間には漁師もやっている、そういう状態は大石先生の村と同じである。だれもかれも寸暇をおしんで働かねば暮しのたたぬ村、だが、だれもかれも働くことをいとわぬ人たちであることは、その顔を見ればわかる。

この、今日はじめて一つの数から教えこまれようとしてい

る小さな子どもが、学校から帰ればすぐに子守りになり、麦搗きを手つだわされ、網曳きにゆくとこのだ。働くことしか目的がないようなこの寒村の子どもたちと、どのようにしてつながってゆくかを思うとき、一本松をながめて涙ぐんだ感傷は、恥ずかしさでしか考えられない。今日はじめて教壇に立った大石先生の心に、今日はじめて集団生活につながった十二人の一年生の瞳は、それぞれの個性にかがやいてことさら印象ぶかくうつつたのである。

この瞳を、どうしてにごしてよいものか！

その日、ペタルをふんで八キロの道を一本松の村へと帰ってゆく大石先生のはつらつとした姿は、朝よりもいっそうおてんばらしく、村人の目にうつつた。

「さよなら」

「さよなら」

「さよなら」

出あう人みんなにあいさつをしながら走ったが、返事をかえず人はすくなかった。時たまあつても、だまっつうなずくだけである。そのはずで、村ではもう大石先生批判の声があがつていたので。

——みんなのあだ名まで帳面につけこんだそうな。

——西口屋のミイさんのことを、かわいらしいというたそ

うな。  
——もう、はやのこめから、ひいきしよる。西口屋じゃ、なんぞ持っていてお上手したんかもしれん。

なんにも知らぬ大石先生は、小柄なからだをかるやかにのせて、村はずれの坂道にさしかかると、少し前こごみになっ

て足に力をくわえ、このはりきった思いを一刻も早く母に語ろうと、ペダルをふみつづけた。歩けばたいして感じないほどのゆるやかな坂道は、往きにはころよくすべりこんだのだが、そのころよさが帰りには重い荷物となる。そんなことさえ、帰りでよかったとありがたがるほどすなおな気持ちであった。

やがて平坦な道にさしかかると、朝がた出あった生徒の一同も帰ってきた。

——大石 小石

——大石 小石

幾人もいくにんの声のたばが、自転車の速度につれ大きく聞こえてくる。なんのことか、はじめは分からなかった先生も、それがじぶんのことと分かると思わず声を出して笑った。それがあだ名になったと、さとしたからだ。わざと、リリリリとベルを鳴らし、すれちがいながら、高い声でいった。

「さよならア」

わあっと喚声かんせいがあがり、また、大石小石！ と呼びかける声が遠のいてゆく。

おなご先生のほかに、小石先生という名がその日生まれたのである。からだからだが小つぶなからでもあるだろう。新らしい自転車ゆうひに夕陽がまぶしくうつり、きらきらさせながら小石先生の姿は岬みさきの道を走っていった。

## 二 魔法の橋

とつばなまで四キロの細長い岬のまん中あたりにも小さな

部落ぶらくがある。入り海にそった白い道は、この小部落にさしかかるとともに、しぜんそとらみに岬を横ぎって、やがて外海そとらみぞいに、海を見おろしながら小石先生の学校のある岬村へのびている。この外海ぞいの道にさしかかる前後に、本校へかよう生徒たちと出あうのが、毎日のきまりのようになっていて、もしも、少しでも場所がちがうと、どちらかがあわてねばならぬ。

「わあ、小石先生きたぞう」

急に足ばやになるのはたいい生徒のほうだが、たまには先生のほうでも、入り海ぞいの道で行く手に生徒の姿を見つけ、あわててペダルに力を入れることもある。そんなとき、生徒のほうの、よろこぶまいことか。顔をまっかにして走る先生にむかって、はやしたてた。

「やあい、先生のくせに、おくれたぞオ」

「月給、ひくぞオ」

そして、わざと自転車の前に法度はつとする子どもさえあった。そんなことがたびかさなると、その日家へ帰ったときの先生は、お母さんにこぼした。

「子どものくせに、月給ひくぞオだって。勘定かんじょうだかいのよ。いやんなる」

お母さんは笑いながら、

「そんなこと、おまえ、気にする馬鹿ばかがあるかいな。でもまあ、一年のしんぼうじゃ。しんぼう、しんぼう」

だが、そういってなくさめられるほど、苦痛は感じていなかった。なれてくると、朝はやく自転車をとばす八キロの道のりはあんがいたのしく、岬みさきを横よこぎるころにはスピードが出

てきて、いつのまにか競争きょうそうをしていた。それがまた生徒の心へひびかぬはずがなく、負けずに足が早くなつた。シーソーゲームのように押しつ押しされつ、一学期も終つたある日、用事で本校へ出むいていった男先生はみょうなことをきいてかえつた。この一学期間、岬の生徒は一度もちこくしないといふのだ。片道五キロを歩いてかよう苦勞くろうはだれにもわかつていることで、昔から、岬の子どものちこくだけは大目に見られていたのだが、逆に一度もちこくがなくなると、これは当然ほめられねばならぬ。もちろん、一大事件としてほめられたのだ。男先生はそれを、じぶんの手柄てがらのように思つてよろこび、

「なんしろ、今年の生徒んなかには、たちのよいのがおるからなあ」

五年生のなかにたったひとり、本校の大ぜいのなかでも群ぐんをぬいてできのよい女の子がいることで、岬みさきからかよつてくる三十人の男女生徒がちこくしなかつたようにいつた。だがそれは、じつは女先生の自転車のためだつたのだ。しかし、女先生だとて、そうとは気がつかなかつた。そして、たびたび、この岬の村の子どもらの勤勉きんべんさに感心し、いたずらぐらいはしんぼうすべきことだと思つた。そう思いながら、心の中ではじぶんの勤勉きんべんさも、ひそかにほめてやつた。

——わたしだつて、途中とちゆうでパンクしたときにちこくしただけだわ。わたしは八キロだもの——などと。そして窓の外に目をやり、じぶんをいつもはげましてくれるお母さんのことを思つた。おだやかな入り海はいかにも夏らしくぎらぎら光つて、母のいる一本松の村は白い夏雲の下にかすんで見えた。

あけっぴろげの窓から、海風が流れこんできて、もうあと二日で夏休みになるよろこびが、からだじゅうにしみこむような気がした。だが、少し悲しいのは、なんとしても気をゆるさぬような村の人たちのことだ。それを男先生にこぼすと、男先生は奥歯おくばのない口を大きくあけて笑ひ、

「そりゃあ無理な注文ちゆうもんじゃ。あんたが、なんぼ熱心に家庭訪問してもですな、洋服と自転車じゃましますワ。ちつとばかりまぶしくて、気がおけるんです。そんな村ですからな」

女先生はびっくりしてしまつた。顔を赤らめ、うつむいて考えこんだ。

——着物きて、歩いてかよえといふのかしら。往復四里（十六キロ）の道を……。

夏休み中にもなんどかそれについて考えたが、決心のつかぬうちに二学期がきた。暦しよめいのうえでは九月といつても、永ながい休みのあとだけに暑さは暑さ以上にこたえ、女先生の小さなからだは少しやせて、顔色もよくなかつた。その朝家を出かけるとき、先生のお母さんはいつたのである。

「なんじゃかんじゃといつても、三分の一は過すぎたでないか。しんぼう、しんぼう。もうちよつとのしんぼう」

手つだつて自転車を出してくれながら、なぐさめてくれた。しかし、先生でもお母さんの前では、ちよつとわがままをいつてみたくなることは、ふつうの人間と同じである。

「あーあ、しんぼ、しんぼか」

腹でも立てているように、さあつと自転車をとばした。しばらくぶりに風をきつて走るころよさが身にしみるようだ

ったが、今日からまた、自転車でかようことを思うと気が重くなつた。休み中などか話がでて、岬で部屋でも借りようかといつてもみたが、けっきょくは自転車をつづけることになつたのである。自転車も、朝はよいけれど、焼けつくような、暑熱のてりかえす道を、背中に夕陽をうけてもどつてくるときにつらさは、ときに呼吸もとまるかと思うこともある。岬の村は目の前なのに、日がな毎日馬鹿念をいれて、入り海をぐるりとまわつてかようことを考えると、くやしくてならない。しかも自転車は岬の人たちの気にいらないというのだ。

あんちきしよ!

口に出してはいわないが、目の前に横たわる岬をにらまえると、思わず足に力がある。めずらしく波のざわめく入り江の海を右にへだてて、岬に逆行して走りながら、ああ、と思つた。今日は二百十日なのだ。そうと気がつく、なんとなくあらしをふくんだ風が、じゃけんに頬をなぐり、潮っぽい香りをぞんぶんにただよわせている。岬の山のとっぺんがかすかにゆれ動いているようなのは、外海の波の荒さを思わせて、ちよつと不安にもなつた。途中で自転車をおりねばならないかもしれない。しかし、だからといって今おけるわけにはもうゆかないのだと考えながら、いつしか、空想は羽のある鳥のように飛びまわつていた。

……風よ屈げ! アリババのようにわたしが命令をくだすと、風はたちまち力をぬいて、海はうそのように静まりかえる。まるで、いま眠りからさめたばかりの湖のような

静かきです。橋よかかれ! さつとわたしが人さし指を前にのばすと、海の上にはたちまち橋がかかる。りっぱな、虹のようきれいな橋です。わたしだけに見える、そして、わたしだけがとおれる橋なのです。わたしの自転車は、そつとその橋の上にさしかかります。わたしはゆつくりとペダルをふみます。あわてて海におちこむと大へんですから。こうして七色のそり橋をゆつくりと渡りましたが、いつもより四十五分も早く岬の村へつきました。さあ大へんです。わたしの姿を見た村の人たちは、いそいで時計の針を四十五分ほどすすめるし、子どもたちときたら、見るも気のどくなほどあわてふためいて、食べかけの朝飯をのどにつめ、あとはろくに食わずに家をとびだしました。わたしが学校につくと、いま起きたばかりの男先生はおどろいて井戸ばたにかけつけ、手水をつかいはじめ、年とつた奥さんは奥さんで、ねまきも着かえるまがなく七輪をやけにあおぎながら、片手で衿もとを合わせ合わせ、きまりわるそうなていさい笑いをし、そつと目もとや口もとをこすりました。目のわるい奥さんは、朝おきるといつも目やにがたまっているのです……

ここだけはほんとのことなので、思わずくすつと笑つたとき、空想は霧のように消えてしまった。ゆく手から、風にみだされながらいつもの声なきこえたのである。

「小石せんせえ」

ひと月ぶりの声をきくと、ぐつとからだに力がいり、「はい」と答えたものの、風はその声をうしろのほうへもつて

いったようだ。思ったとおり、外海の側は大きく波が立ちさわいでいて、いかにも厄日らしいさまを見せている。

「おそいのね、今日は。四十五分ぐらいおくらせているかもしれないわよ」

それをきくと、なつかしように立ちどまって、何か話しかけそうにした子どもたちは、本気にして走りだした。先生のほうも、風にさからって、いっそう足に力をいれた。ときどき方向のきまらぬような舞い舞い風がふいてきて、何度も自転車をおりねばならなくなったりした。まったく、四十五分ほどおくれそうだ。海への村でも一本松はいつも岬にまもられているかたちで、厄日にもたいしたことはないのにくらべると、細長い岬の村は、外海側の半分がいつも相当の害をうけるらしい。木々の小枝のちぎれてとびちった道を、自転車も難渋しながら進んだ。押して歩くほうが多かったかもしれない。こうして、ほんとうにずいぶんおくられて村にさしかかったのであったが、村中が一目で見えるところまできて、先生は思わず立ちどまって叫んだ。

「あらッ」

村のとつづきの小さな波止場では、波止場のすぐ入り口で漁船がてんぶくして、鯨の背のような船底を見せているし、波止場にはいれなかったのか、道路の上にも幾隻かの船があげられていた。海から打ちあげられた砂利で道はうずまり、とうてい自転車などおれそうもないほど荒れているのだ。まるで、よその村へきたような変りかただった。海べりの家ではどこもみな、屋根がわらをはがされたらしく、屋根の上に人があがっていた。だれひとり先生にあいさつをするゆと

りもないらしいなかを、先生もまた、道に打ちあげられた石をよけながら、自転車を押してやっと学校にたどりついた。門をはいつてゆくと、どっと一年生が走ってきて、とりまいた。そのどの顔にも、生き生きとした目の光があった。それは、昨夜のあらしのおとずれを、よろこんでもいるように元気なのだ。うわずった声の調子で、口ぐちに話しかけようとするのを、少し出しゃばりの香川マスノが、わたしが報告の役だともいうふうには、その声の高さでみんなをおさえ、「せんせ、ソんキのうち、ぺっちゃんこにつぶれたん。蟹をたたきつけたように」

マスノのうすいくちびるから出たことばにおどろき、だんだん大きく目をみひらいた先生は、顔色さえも少しかえて、「まあ、ソんキさん、うちの人たち、けがしなかったの？」  
見まわすと、ソんキの岡田磯吉は、びっくりしたのがまださめないようなうすで、こっくりをした。

「せんせ、わたしのうちは、井戸のはねつるべの棹がまっ二つに折れて、井戸ばたの水がめがわれたん」

やっぱりマスノがそういった。

「大へんだったのね。ほかのうち、どうだったの」

「よろずやの小父さんが、屋根のかこいをしよって、屋根から落ちたん」

「まあ」

「ミイさんここでさえ、雨戸をとばしたんで。なあミイさん」  
気がつくくと、マスノがひとりでしゃべっている。

「ほかの人どうしたの。なんでもなかったの？」

山石早苗と目があうと、内気な早苗はあかい顔をしてこっ

くりした。マスノは先生のスカートをひっぱって、じぶんのほうへ注意をひき、

「せんせせんせ、それよりもまだ大騒動なんよ。米屋の竹一ん家は、ぬすつとにはいられたのに、なあ竹一。米一俵、とられたんなあ」

同意をもとめられて竹一は、うんとうなずき、

「ゆだんしとったんじゃ。こんな雨風の日はだいたいじようぶだと思うたら、今朝なつて見てみたら、ちゃんと納屋の戸があいとつたん。ぬすつとの家まで、米つぶがこぼれとるかもしれないいうて、お父つあんがさがしたけど、こぼれとらなんだん」

「まあ、いろんなことがあったのね。——ちよつとまって、自転車おいてくるから、またあとでね」

いつものとおり職員室のほうへ歩いてゆきながら、ふっと、いつもとちがった明かるさを感じて立ちどまった先生は、そこでまたおどろかされてしまった。井戸の屋根がふつとんで、見おぼえのトタン屋根のあたりが空白になり、そのあたりの空に白い雲がとんでいた。走りまわっていたらしいしろはちまきの男先生が、いつもに似合わずあいそのよい顔で、

「やあ、おなご先生、どうです。ゆうべは、だいぶあばれましたな」

たすきがけの奥さんも出てきて、頭の手ぬぐいをぬぎながら久しぶりのあいさつをし、

「一本松が、折れましたな」

「え、ほんとですか」

先生はとびあがるほどおどろき、じぶんの村のほうに目を

やった。一本松はいつものところにちゃんと立っているが、よくみると少しちがった姿をしている。たいした暴風でもなかったのに、年をへた老松は、枝をはったその幹の一部を風にならされたものらしい。それにしても、入り海をとりかこんだ村むらにとつて、大昔から何かにつけて目じるしにされてきた名物の老松が難にあったのを、地元のじぶんが気づかずにいたのが恥ずかしかつた。しかも今朝がたは、ごうまんにもいい気になって、一本松の下から人さし指一本で魔法の橋をかけ、波をしずめたのだ。村の時計を四十五分も進めさせることで、村中の人を大さわぎさせたのに、きてみればそれどころでない大さわぎなのだ。男先生はあわてて手水をつかっているどころでなく、はだしになって働いている。奥さんは七輪などどつくにすまして、きりりとしたたすきがけで働いているではないか。

ああ、二期第一日は出発からまちがっていた、と女先生はひそかに考えた。家を出るとき、お母さんにたいしてのぶあいそを悔いたのである。三時間目の唱歌のとき、女先生は思いついて、生徒をつれ、災難をうけた家へお見舞いにゆくことにした。いちばん学校に近い西口ミサ子の家へより、見舞いのことばをのべた。なんととっても家がぺっちゃんこになったソんキの家が被害の第一番だとみんながいうので、つぎには荒神様の上にあるソんキの家へむかった。マスノが今朝いった、蟹をたたきつけたようだというのを思いだし、それは大人の口まねだろうと思いついた、へんに実感をともなって想像された。だが家はもう近所の人たちの手だすけであらかた片づいていた。別棟の豆腐納屋のほうが助かったの



ふんふんといちいちうなずいていたマスノの母親は、半分は先生にむかって、

「岬じゃあ船がながされたり、屋根がつぶれたり、ごっそり壁が落ちて家の中が見とおしになった家もあると聞いたもんですからな、びっくりしてきたんですけど、つるべの棹ぐらいでよかった、よかった」

マスノの母親がいつてから、

「マアちゃん、ごっそり壁が落ちたって、だれのうち？」

マスノはかかえていた石を、すてるのをわすれたように、得意の表情になって、

「仁太んとこよ先生。壁が落ちて押入れん中ずぶぬれになってしもたん。見にいったら、中がまる見えじゃった。ばあやんが押入れん中でこないして天井見よった」

顔をしかめてばあやんのまねをしたので、先生は思わず吹きだしたのである。

「押入れが、まあ」

そういったあとで、笑いはこみあげてきて、ころころと声に出してしまった。なぜそんなに先生が笑いだすのか生徒たちにはわからなかったが、マスノはひとり、じぶんが先生をよろこばしたような気になって、きげんのよい顔をした。みんなはいつかよるずやのそばまできていた。よろずやのおかみさんはすごいけんまくを顔に出して走りよってきて、先生の前に立った。肩でいきをしなから、すぐにはものもいえないようだ。きゆうに笑いを消した先生は、すぐおじぎをしなから、

「あら、失礼いたしました。しけで大へんでしたなあ。今日

は石ころ掃除のお手つだいをしていますの」

しかし、おかみさんはまるで聞こえないようなようすで、「おなご先生、あんたいま、なにがおかしいって笑うたんですか？」

「……………」

「人が災難に会ったのが、そんなおかしいんですか。うちのお父さんは屋根から落ちましたが、それもおかしいでしょう。みんごと大した怪我は、しませなんだけど、大怪我でもしたら、なお、おかしいでしょう」

「すみません。そんなつもりはちつとも——」

「いいえ、そんならなんでも人の災難を笑うたんです。おていさいに、道掃除などしてもらいますまい。とにかく、わたしの家の前はほつといてもらいます。——なんじゃ、じぶんの自転車が走れんからやってるんじゃないか、あほくさい。そんなら、じぶんだけでやりやあよい……」

あとのほうはひとり言のようにつぶやきながら、びっくりして二の句もつげないでいる先生をのこして、ぶりぶりしながら引きかえすと、となりの川本大工のおかみさんに、わざとらしい大声で話しかけた。

「あきれた人もあるもんじゃな。ひとの災難を聞いて、けらけら笑う先生があるうか。ひとつ、ねじこんできた」

やがてそれは、また尾ひれがついて村中に伝わってゆくにちがいない。じつと突っ立って、二分間ほど考えこんでいた先生は、心配そうにとりまいている生徒たちに気がつくとき、泣きそうな顔で笑って、しかし声だけは快活に、

「さ、もうやめましょう。小石先生しっぱいの巻だ。浜で、

歌でもうたおうか」

くるるときびすをかえして先に立った。その口もとほ笑っているが、ぽろんと涙をこぼしたのを、子どもたちが見のがすわけはない。

「先生が、泣きよる」

「よろずやのばあやんが、泣かしたんど」

そんなささやきがきこえて、あとはひっそりと、ぞうりの足音だけになった。ふりかえって、泣いてなんかいないよう、と笑ってみせようかと思つたとたん、また涙がこぼれそうになったので、だまつた。このさい笑うのはよくないとも思つた。さつき笑つたのも、よろずやのおかみさんがいうように、人の災難を笑つたというよりも、ほんとうのところは、マスノの身ぶりがおかしく、それにつづいて、押入れの連想は、一学期のある日の、仁太を思いだして笑わせたのであつた。

「天皇陛下はどこにいらつしやいますか？」

ハイ ハイ と手があがつたなかで、めずらしく仁太がさされ、

「はい、仁太くん」

仁太はからだじゅうからしぼり出すような、れいの大声で、

「天皇陛下は、押入れの中におります」

あんまりきばつな答えに、先生は涙を出して笑つた。先生だけでなく、ほかの生徒も笑つたのだ。笑いは教室をゆるがし、学校のそとまでひびいていったほどだった。東京、宮城、などという声もきこえても、仁太はがてんのゆかぬ顔をしていた。

「どうして、押入れに天皇陛下がいるの？」

笑いがやまってからきくと、仁太は少々自信をなくした声で、

「学校の、押入れん中にかくしてあるんじゃないんかいや」  
それでわかつた。仁太がいうのは天皇陛下の写真だったのだ。奉安殿のなかつた学校では、天皇陛下の写真は押入れにかぎをかけてしまつてあつたのだ。

仁太の家の押入れの壁が落ちたことは、それを思いださせたのであつた。若い女先生は、思いだすたびに笑わずにいらなかつたのであるが、そんな言いわけをよろずやのおかみさんに聞いてももらえず、だまつて歩いた。涙がこぼれている今でさえ、その話はおかしい。しかしそのおかしさを、よろずやのおかみさんのことばは、差し引きしてつりをとつたのである。浜にでて歌でもうたわぬことには、先生も生徒も気持のやりばがなかつた。浜におりと先生はずぐ、両手をタクトにして、歌いだした。

はるははよからかわべのあしに

「あわて床屋」である。みんながとりまいて、ついて歌う。

かにが みせだし とこやでござる  
チヨツキン チヨツキン チヨツキンナ

歌っているうちに、みんなの気持は、いつのまにか晴れてきていた。

うさぎやおこるし　かにやはじよかくし  
しかたなくなく　あなへとにげる

おしまいまで歌っているうちに、失敗した蟹かにのあわてぶりが、じぶんたちの仲間ができたようなおもしろさで思いたされ、いつかまた、心から笑っている先生だった。「このみち」だの「ちんちん千鳥」だの、一学期中におぼえた歌をみんな歌い、「お山の大将」でひとやすみになると、生徒たちははてんでに走りまわり、おとなしく先生をとりまいてるのは一年生の五、六人だけだった。手入れなどめったにしない乱れた髪かみの毛けを、うしろでだんごにしている女の子もいるし、いがぐりが耳の上までのびほうだいの男の子もあった。床屋とこやのない村では学校のバリカンがひどく役に立ち、それは男先生のうけもちだった。髪かみの毛けをだんごにしている女の子のほうは、女先生が気をくばって、水銀軟膏すいぎんなんこうをぬりこんでやらねばならない。さっそく、明日あしたはそれをやろうと思ひながら先生は立ちあがり、

「さ、今日はこれでおしまい。帰りましょう」

はたはたとスカートひざの膝ひざをはらい、一足うしろにさがったとたん、きやあつと悲鳴ひめいをあげてたおれた。落とし穴とちやに落ちこんだのだ。いっしょに悲鳴ひめいをあげたもの、げらげら笑いながら近づってくるもの、手をたたいてよろこぶもの、おどろいて声をのんでいるもの、そのさわぎのなかから、先生はなかなか立ちあがろうとしなかった。横なりに、くの字にねたまま、砂かみの上に髪かみの毛けをじかにくつつけている。笑ったもの

も、手をたたいたものも、だまりこんでしまった。異様いようなものを感じたのだ。つぶった両の目から涙なみだが流れているのを見ると、山石早苗やまいしきなえが急に泣きだした。その泣き声にはげまされでもしたように「だいじょうぶ」といいながらやっと半身をおこした先生は、そうつと穴の中の足を動かさず、こわいものにさわるようなようすで、靴くつのボタンをはずし右の足くびにふれたと思うと、そのまままた横になってしまった。もう起きあがろうとはしない。やがて、目をつぶったまま、

「だれか、男先生、よんできて。おなご先生が足の骨折こっせつって、歩はかれんて」

蜂はちの巣すをつついたような大きさわぎになった。大きな子供たちがどたばたかけだしていったあとで、女の子はわあわあ泣きだした。まるで半鐘はんしょうでも鳴りだしたように、村中の人がとびだして、みんなそこへかけつけてきた。まっさきにきた竹一の父親は、うつむいてねている女先生に近づいて、砂の上かみにひざをつき、

「どうしました、先生」

と、のぞきこんだ。しかし、先生は顔をしかめたまま、ものがいえないらしい。子どもたちからきかされて、足のけがだとわかると、少し安心したようすで、

「くじいたんでしよう。どれどれ」

足もとの方にまわり、靴くつをぬがせにかかると、先生は、うっとうし声を出してますます顔をしかめた。靴くつのあとをくつきりつけて、先生の足くびは、二倍もの太さになったかと思うほどはれていた。血ちは出ていなかった。

「冷ひやすと、よかろうがな」

もう大ぜい集まってきている人たちにいうと、徳田吉次のお父つあんが、いそいでよくれた腰の手ぬぐいを潮水にぬらしてきた。

「いたいんですかい、ひどく？」

かけつけた男先生にきかれて、女先生はだまってうなずいた。

「歩けそうにないですかい？」

また、うなずいた。

「一ぺん、立ってみたら？」

だまっている。西口ミサコの家からミサ子の母親が、うんこと卵をねったはり薬を布にのぼしてもってきた。

「骨は、折れとらんと思いますが、早く医者にかかるか、もみりようじしたほうがよろしいで」

「もみ医者なら中町の草加がよかろう。骨つぎもするし」

「草加より、橋本外科のほうが、そりやあよかろう」

口ぐちにいろんなことをいったが、なにをどうするにも岬の村では外科の医者も、もみりようじもなかった。たった一つはつきりしていることは、どうしても先生は歩けないということだった。あれこれ相談のけっか、舟で中町までつれてゆくことになった。漁師の森岡正の家の舟で、加部小ツルのお父さんと竹一の兄がこいでゆくことに話がきまった。男先生はついてゆくことになり、女先生をおんぶして舟にのった。坐らせたり、おぶったり、ねかせたりするたびに、女先生のがまんした口から思わずうなり声が出た。

舟が渚をはなれだすと、わあっと、女の子の泣き声がかたまつてとんできた。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

声をかぎりにさけぶものもいる。小石先生は身動きもできず、目をつぶったまま、だまってその声におくられた。

「せんせえ」

声はしだいに遠ざかり、船は入り海のまん中に出た。朝、魔法の橋をかけた海を、先生は今、痛さをこらえながら、かえつてゆく。

### 三 米五合豆一升

十日すぎても、半月たつても女先生は姿を見せなかった。職員室の外の壁にもたせてある自転車にほりがたまり、子どもたちはそれをとりにまいて、しょんぼりしていた。もう小石先生はこないのではないかと考えるものもあった。本校がよいの生徒にしてもそうだ。先生の自転車がどれほど毎日はげみになっていたか、めいめいが、長い道中どれほど小石先生の姿をまっていたか、小石先生にあわなくなつてから、そう思った。村の人にしても同じだった。だれがどうというのではなく、不当につらくあたっていたことを、ひそかに悔いているようだった。なぜなら、小石先生の評判がきゆうによくつたのだ。

「あの先生ほど、はじめから子どもにうけた先生は、これまになかったらうな」

「早うなおつてもらわんと、こまる。岬の子どもが、先生をちんばにして、てなことになると、こまるもん。あとへ来手

がなかったりすると、なおこまる」

「ちんばになんぞ、ならにやえいがなア。若い身空で、ちんばじゃ、なおつても、かようにこまるじゃろな」

こんなふうになら先生の噂をした。どうしてももういちど岬の学校へきてもらいたい気持ちがふくまれていた。きてもらわないと、ほんとに困るのだ。直接に、もつとも困ったのは男先生だった。小さな村の小学校では、唱歌は一週一度だった。その一時間を、男先生はもてあましたのだ。女先生が休みだしてから、はじめのうちには、ならった歌を合唱させたり、じょうずらしい子どもに独唱させたりした。そうしてひと月ほどはすんだが、いつまでもごまかすわけにもゆかず、そこで男先生はとうとうオルガンのけいこをはじめ、そのために汗を流した。先生は声をあげて歌うのである。

ヒヒヒフミミミ イイイムイ――

ドドドレミミミ ソソソラソ――と発音するところを、年よりの男先生はヒヒヒフミミミ――という。それは昔、男先生が小学校のときにならったものであった。

ミミミミフフフ ヒヒフミヒ――

唱歌は土曜日の三時間目ときまっている。うれしくたのしく歌ってわかれて、日曜日をおかえりという寸法の時間割であったのが、子どもにとつても先生にとつても、きゆうにおもしろくない土曜日の三時間目になつてしまった。男先生に

とつては、なおのことである。木曜日ごろになると、もう男先生は土曜日の三時間目が気になりだし、そのために、きゆうに気短かになって、ちよつとのことでは叱りつけ、わすれものをしてきた生徒をうしろに立たせた。

「男先生、このごろ、おこりばかりするようになったな」「すかんようになつたな。どうしたんじやろな」

子どもたちがふしぎがるそのわけを、一ばんよく知っている男先生の奥さんは、ひそかに心配して、それとなく男先生を助けようとした。金曜日の夜になると、奥さんは内職の麦稗真田をやめてオルガンのそばに立ち、先生を上げました。「わたしが生徒になりますわ」

「うん、なつてくれ」  
豆ランプが、ちろちろゆらぎながら、オルガンと、二人の年より夫婦の姿をてらしているところは、もしも女の子がこれを見たら、ふるえあがりそうな光景である。やみと光りの交錯のなかで先生と奥さんは歌いかわしていた。

ヒヒヒフ ミミミ イイイムイ

奥さんだけが歌い、それにオルガンの調子があうまでにはだいぶ夜もふけた。村はもう一軒のこらず寝しずまっていることで、かえって気がねでもしているように、奥さんは豆ランプを消してから足さぐりで部屋にもどりながら、ほうつとため息をし、ひそやかに話しかけた。

「おなご先生も、えらい苦労かけますな」

「うん。しかし、むこうにすりゃあ、もっと苦労じゃろうて」  
「そうですとも、あんたのオルガンどころじゃありませんわ。  
足一本折られたんですもん」

「もしかしたら、大石先生はもう、もどってこんかもしれんぞ。先生よりも、あの母親のほうが、えらいけんまくだったもんな。かけがえのない娘ですさかい、二度とふたたび、そんな性わるの村へは、もうやりとうありません、いうてな」  
「そうでしような。しかし、これならならこれんで、代り  
の先生がきてくれんと困りますな」

人にきかれたら困るとでもいうようにないしよ声でいって、うらめしそうに、ちらりと海のむこうを見た。一本松の村も静かにねむっているらしく、星くずのような遠い灯がかすかにまたたいている。こんな夜ふけに、こんな苦労をしているのはじぶんたちだけだと思つと、女先生がうらめしかった。

あれ以来、奥さんもまたひと役かつて、四年生五人の裁縫をうけもつていたのだ。しかし、雑巾さしの裁縫はちつとも苦労ではなかつた。まるで手まりでもかがるように、ていねいにさすのを、一時間のあいだ、かわるがわるにみてやればそれですむ。だが、唱歌だけは、なんとしてもオルガンがむつかしい。オルガンは、裁縫するようには手が動かないからだ。それを一生けんめい、ひきこなそうとする男先生の勉強ぶりは、奥さんにとっては、神々しいようであつた。十月だというのに、男先生は、たらたら汗を流していた。外へきこえるのをはばかって、教室の窓はいつもしめてあつたら、汗はよけい流れた。

先生ならばオルガンぐらいひけるのがあたりまえなのだが、

なにしろ、小学校を出たきり、努力ひとつで教師になった男先生としては、なによりもオルガンがにが手であつた。田舎のこととて、どこの学校にも音楽専任の先生はいなかつた。どの先生もじぶんの受けもちの生徒に、体操も唱歌も教えねばならない。そんなこともいやで、じぶんからたのんで、こんなへんぴな岬へきたのであつたのに、今になってオルガンの前で汗を流すなど、オルガンをたたきつきたいほど腹が立つた。

しかし、今夜はそうではなかつた。奥さんひとりの生徒にしろ、ひき手と歌い手の調子が合うところまでいったのだ。そんなわけで、男先生のほうは、わりとごきげんだつた。そこで奥さんにむかつて、少し鼻をたかくした。

「おれだって、ひく気になればオルガンぐらい、すぐひけるんだよ」  
奥さんもすなおにうなずいた。

「そうですとも、そうですとも」

大石先生が休みだしてから、明日は六回目ぐらいの唱歌の時間になる。男先生にとっては、明日の唱歌の時間がたのしみにさえなつてきた。

「きつと生徒が、びっくりするぞ」

「そうですね。男先生もオルガンがひけると思つて、見なおすでしょうね」

「そうだよ。ひとつ、しゃんとした歌を教えるのも必要だからな。大石先生ときたら、あほらしくもない歌ばかり教えとるからな。『ちんちんちどり』、だことの、『ちよっきんちよっきんちよっきんち』、だことの、まるで盆おどりの歌みたよ

な柔い歌ばっかりでないか」

「それでも、子どもはよろこんでいますわ」

「ふん。しかし女の子ならそれもよからうが、男の子にはふさわしからぬ歌だな。こころでひとつ、わしが、大和魂をふりでおこすような歌を教えるのも必要だろ。生徒は女ばかりでないんだからな」

奥さんの前で胸をはるようにして、ことのついでのように、今のさつきまで二人でけいこをした唱歌を歌った。

「ちんびきのいわは、おんもからずウ——」

「しっ、人がきいたら、気ちがいとおもう」

奥さんはびっくりして手をふった。

そして、いよいよあくる日、唱歌の時間がきても、生徒はのろのろと教室にはいった。どうせ、今日もまた、オルガンなしに歌わされるのだと思って、はこぶ足もかろくなかったのだらう。小石先生だと、土曜日の二時間が終ると、そのままひとり教室にのこって、オルガンを鳴らしていたし、三時間目の板木が鳴るとともに行進曲にかわり、みんなの足をひとりに浮き立たせて、しぜんに教室へみちびいていた。どんなにそれがたのしかったことか、みんな、心のどこかにそれを知っていた。口ではいえない、それはうれしさであつた。だから、小石先生がこなくなつた今、口ではいえないものたりなさが、みんなの心のどっかにあつた。それを、気づくというほどでなく、みんなには気づいていたのだ。

「先生は聞き役しとるから、みんなすきな歌うたえ」

オルガンなど見向きもせず、男先生はそういうのだ。歌えといわれても、オルガンが鳴らぬと歌はすぐには出てこな

かつた。出てきても調子つばずれだつたりする。

ところが、今日は少しちがう。教室にはいると男先生はもう、オルガンの前にちゃんと腰かけてまっていた。女先生とは少し調子がちがうが、ブーと、おじぎのあいずも鳴つた。みんなの顔に、おや？ といういろが見えた。二枚の黒板には、いつも女先生がしていたように、右側には楽譜が、左側には今日ならう歌が立てがきに書かれていた。

千引の岩

千引の岩は重からず

国家につくす義は重し

事あるその日、敵あるその日

ふりくる矢だまのただ中を

おかしてすすみて国のため

つくせや男児の本分を、赤心を

漢字には全部ふりがながうってある。男先生はオルガンの前から教壇にきて、いつもの授業のときのように、ひちちく竹の棒の先で、一語一語を指ししめしながら、この歌の意味を説明しはじめた。まるで修身の時間のようだった。いくらくりかえして、この歌の深い意味をとき聞かしても、のみこめる子どもは幾人もいかなかった。一年生がまっさきに、二年生がつづいて、がやがや がやがや。三年生と四年生の中にも、こそこそ こそこそ ささやき声がおこつた。と、とつぜん、ぴしっ！ とひっちく竹が鳴つた。教壇の上の机をばげしくたたいたのである。とたんに、ざわめきはやみ、鳩

のような目がいっせいに男先生の顔をみつめた。男先生はきびしく、しかし一種のやさしさをこめて、

「大石先生は、まだどうぶん学校へ出られんちゆうことだから、これから、男先生が唱歌もおしえる。よくおぼえるように」

そういったかと思うと、オルガンのほうへゆき、うつむきこんでしまった。まるでそれを恥ずかしがってでもいるようにみえた。しかもその姿勢で男先生は歌いだしたのである。

「ヒヒヒフミミミ イイイムイ はいッ」

生徒たちはきゆうに笑いだしてしまった。ドレミハを、男先生は昔流に歌ったのである。しかし、いくら笑われても、今さらドレミハにして歌う自信が男先生にはなかった。そこでとうとう、ヒフミヨイムナヒ（ドレミの音階）からはじめて、男先生流に教えた。そうなるとなったで、生徒たちはすっかりよろこんだ。

——ミミミミフフフ ヒヒヒヒー フーフフフヒミイ イイイムイミ……

これでは、まるで気持ちが笑ったり怒ったりしているようだ。たちまちおぼえてしまって、その日から大はやりになってしまった。だれひとり、その勇壮活発な歌詞をうたって男先生の意図に添おうとするものではなく、イイイイ ムイミ——と歌うのだった。

それからまた、何度目かの土曜日、やっぱり「千引の岩」をうたわされての帰り道であった。一年生の香川マスノは、ませた口ぶりで、いっしょに歩いていた山石早苗にささやいた。

「男先生の唱歌、ほんすかん。やっぱりおなご先生の歌のほうがすきじゃ」

そういつてからすぐ、女先生におそわったのを歌い出した。

やまの かーらーすウが もってエキイタア——

早苗も、小ツルもいっしょにつづけてうたった。

あかい ちいさーな じょうぶくろ……

お昼ぎりの一年生の女の子ばかりがかたまっていた。

「おなご先生、いつんなったら、くるんじやるなあ」

マスノの目が一本松のほうへむくと、それにさそわれてみんなの目が一本松の村へそそがれた。

「おなご先生の顔、見たいな」

そういったのは小ツヤんの加部小ツルである。通りかかったソソキの岡田磯吉と、キッチン徳田吉次が仲間にはいつてきて、口まねで、

「おなご先生の顔、みたいな」

いつしか、それは実感になってしまったらしく、立ちどまっていっしょに一本松のほうを見た。

「おなご先生、入院しとるんど」

ソソキが聞いたことを聞いたとおりにいうと、小ツヤんが横どりして、

「入院したのは、はじめのことじゃ。もう退院したんど。うちのお父つあん、昨日道で先生に会ったもん」

それで小ツルは、だれよりもさきに顔が見たいと思いついたらしい。チリリンヤの彼女の父親は、船と陸と両方の便利屋だった。昨日は大八車をひいて町までいったのである。すくなくも一日おきぐらいに、入り江をとりまく町や村をたのまされた用たしでぐるぐるまわってくるチリリンヤは、船や車にいろんな噂話もいっしょに積みこんでもどつてきた。大石先生のけががアキレス腱がきれたということも、二、三か月はよく歩けまいということも、それらはみんな、腰に鈴をつけて歩きまわっているチリリンヤが聞いてきたものだった。「そんなら、もうすぐに、先生くるかしらん。早うくるとええけんどな」

早苗が目をかがやかすと、小ツルはまたそれを横どりして、「こられるもんか。まだ足が立たんのに」

そして小ツルは、少し調子にのつて、

「おなご先生ん家へ、いってみるか、みんなで」

いっておいて、ぐるつと、ひとりひとりの顔を見まわした。竹一も、タンコの森岡正も、仁太もいつのまにか仲間入りしていた。しかし、だれひとり、すぐには小ツルの思いつきにさんせいするものはなかった。ただだまって一本松の方を見ているのは、そこまでの距離が、自分たちの計算では見当がつかなかったからだ。片道八キロ、大人のことで二里という道のりは、一年生の足の経験でははかりしれなかった。とほうもない遠さであり、海の上からは一瞬で見わたす近さでもある。ただ氏神さまより遠いということは、少しこわかった。彼らはまだ、だれひとり一本松まで歩いていったものがないのだ。その途中にある本村の氏神さまへは、毎年の祭に、

歩いたり、船にのったりしてゆくのだが、そこから先がどのくらいなのか、だれも知らない。たったひとり仁太が、ついにないだ一本松より一つ先の町へいったことがある。しかしそれは、氏神さまの下からバスにのつて、一本松のそばを通ったというだけのことだった。それでもみんなは、仁太をとりまいた。

「仁太、氏神さまから一本松まで、何時間ぐらいかかった？」すると仁太は、得意になって、あおばなをすすりもせず、「氏神さまからなら、すぐじゃった。バスがな、ぶぶうってラッパ鳴らしよつて、一本松のとこ突っ走ったもん。まんじゅう一つ食うてしまわんうちじゃったど」

「うそつけえ、まんじゅう一つなら、一分間でくえらア」

竹一がそういうと、川本松江が西口ミサ子に、「なあ」と同意をもとめながら、

「なんぼバスが早うても、一分間のはずがないわ、なあ」

みんなの反対にあうと、仁太はむきになり、

「そやつてぼく、氏神さまのところで食いかけたまんじゅうが、バスをおりてもまだ、ちゃんと手に持ったもん」

「ほんまか？」

「ほんまじゃ」

「ゆびきりじゃ、こい」

「よし、ゆびきりするがい」

それで、みんなは安心をした。仁太が生まれてはじめてのつたバスのめずらしさに、まんじゅうを食べるのも忘れて、運転手の手もとを見ていたなど、だれも考えなかった。ただ、ともかくも仁太だけがバスにのつたことと、一本松のまだつ

ぎの町でおられるまで、まんじゅう一つを食べるまがなかったことと、この二つからわりだして、氏神さまから一本松までの遠さを、たいしたことではないと思つた。たとえ自転車にのつてとはいへ、女先生は毎日、あんなに朝早く、一本松からかよつていたではないか。と、そんなことも遠さとしてよ、近さとしてみんなの頭に浮かんだらしい。そんな氣持の動いているときに、対岸の海ぞい道にバスが走っているのが見えたからたまらない。小さく小さく見えるバスは、まったく、あつというほどのまに走つて林の中へ姿を消した。

「ああ、行きた！」

マスノがとんきように叫んだ。なんとということなく男の子にさえ力をもっているマスノの一声である。

「いこうや」

「うん、いこう」

正と竹一がさんせいした。

「いこう、いこう。走つていって、走つてもどろ」

「そうじゃ、そうじゃ」

小ツルと松江がとびとびして勇みたつた。だまつているのは早苗と、片桐コトエだけである。早苗はもちまへの無口からであつたが、コトエのほうは複雑な顔をしていた。家のことを思ひだしていたのであろう。

「コトやん、いかなの？」

小ツルがとがめだてるようにいうと、コトやんはますます

不安な表情になり、

「祖母に、問うてから」

その小さな声には自信がなかった。一年生のコトエをかし

らに五人きょうだいの彼女は、背中にいつも子どもものいないことがなかった。数え年五つぐらいから彼女は子守り役を引きうけさせられていたのだ。家へ帰つて相談すれば、とてもゆるされる見こみはなかった。そしてまた、それは早苗や松江や小ツルも同じであつた。みんな、しゅんとして顔を見あつた。数え年十歳になるまでは遊んでもよいというのが、昔からの子どものだんじょうのようになっていたが、遊ぶといつても、それはほんとうに自由に遊ぶのではなく、いつも弟や妹をつれたり、赤ん坊をおんぶしてのうえでのことだつた。ほんとうに、すき勝手に遊んでよいのはひとりっ子のマスノとミサ子だけだ。

コトエの一言はみんなにそれを思いださせたが、しかし、思いとどまることはできない空気がつた。

「めし食べたなら、そうつとぬけだしてこうや」

小ツルが、乗りかかつた船だともいうように、みんなをけしかけた。

「そうじゃ、みんなうちの人のいうたら、行かしてくれんかもしれない。だまつていこうや」

竹一が知恵をめぐらしてそう決断した。こうなるともう、だれひとり反対するものはなく、秘密で出かけることがかえつてみんなをうきうきさせた。

「そうつとぬけだしてな、波止の上ぐらいいつしよになろう」

正がそういうと、総帥格のマスノはいっそうこまかく頭をつかい、

「波止の上は、よろずやのばあやんに見つかるとうるさいか

ら、藪やぶのとこぐらいにしようや」

「それがえい。みんな、畑の道とおつてぬけていこう」

めいめい、きゆうにいそがしくなった。

「ほんまに、走つていつて、走つてもどらんかな」

念をおしたのはコトエである。みんなが走つて帰つてゆくあとから、コトエは考え考え歩いた。どう考えても、だまつてぬけだす工夫くふうはできないように思えた。じぶんだけはやめようか。しかしそれはできない。そんなことをしたら、明日からだれも遊んでくれないかもしれないと思つた。のけものになるのはいやだ。だまつてぬけだせたとしても、あとでおばんやお母さんに叱しかられるのもいやだ。

赤んぼなんぞ、なければよかった。

そう思うと、いつもはかわいい赤ん坊のタケシの顔がにくらしくなり、一日ぐらい、ほつたらかしくなつた。彼女の足はきゆうにあともどりをし、畑のほうへ歩いていつた。藪やぶが見えだすと走つた。だれかに見つかりそうで、どきどきした。

二時間後のことである。子どもについてまっさきに心配しだしたのはコトエのおばんであつた。

「腹もへろうのに、なにこそしよるやら」

はじめはひとり言ごとをいつた。もどればタケシをコトエの背中にくくりつけておいて、おばんは畑へ二番ささげをつみにゆく手はずになつておいて、コトエは帰らないのだ。学校へ見にいつたところで、今ごろいるはずもないと思ひ、赤ん坊と結むすいひもをもって、いちばん仲よしの早苗のところへの

ぞきにいつた。てつきりそこで遊びほうけていると思つたのだ。

「こんにちは。うちのコトは、きとらんかいの？」

もちろんいるわけがない。それどころか早苗もまだ帰らないというのだ。かえりに荒神こうじんさまをのぞいてみたが、杉の木かげに遊んでいたのはコトエより少し大きい子や、小さい子ばかりだつた。だれにもなく大声で、

「おまえら、うちのコト、知らんかいの？」

「しらんで」

「一ぺんも、今日は見んで」

「早苗さん家くとちがうか」

いろんな返事が矢つき早にとんできた。それはみな腹の立つ返事ばかりだつた。

「しょうのないやつじゃ、ほんまに。見つけたら、すぐもどれいよつたと、いうておくれ」

おばんは、ひよいと投げるようにして赤ん坊を背中にやり、まだわかりもしない赤ん坊に話しかけた。

「姉ねえさんは、どこへうせやがったんじやろな。コトのやつめ、もどつてきたら、どやしつけてやらんならん」

しかし、昼飯ひるめしもまだなのを思うと、少し心配になつた。心配しいしい土間どまでぞうりを作っていると、川本大工たいくのおかみさんが、気ぜわしそうな足どりでやってきた。

「こんちは、えいお天気で。うちのマツを見にきたんじやけど、見えんなあ」

それを聞くと、コトエのおばんはぞうり作りの手をおいて、「マツちゃんもかいな。昼飯も食べんと、どこをほつつき歩

きよんのかしらん」

「うちのマツは昼飯はたべにもどったがいな。箸おいて、用ありげに立って行って、すぐもどるかと思や、もどってきやせん」

コトエのおばんはきゆうに心配になってきた。もうぞうりどころでなかった。大工のおかみさんが、さがしてくるといつて帰ったあとも、心配はだんだんひろがってくるばかりだった。出たり入ったり、立ったり坐ったり、おちつかなかった。

——無理もない。あそびたいさかりじゃもん。毎日子守りばっかりじゃあ、謀反もおこしたかろう……

ほとんと涙が落ちた。その涙でかすんだ目に、小さいときから子守りばかりさせたためか、出っ尻になつてしまった幼いコトエのかわいそうな姿が浮かんできて消えなかった。

——それにしても、どこで、なにをしているのかしらん。今日は若いもんまでがおそいなあ……

外に出て沖をながめた。鰺漁に出ているコトエの両親たちの帰りまでが、今日はとくべつおそいように、おばんには思えた。

「まだ、もどってこんかえ」

大工のおかみさんの三度目の声がかかるまでに、小ツルの姉と、早苗の弟と、富士子の母親とが、めいめいの家の娘をあんじてみにきた。まもなく一年生の全部がいないとわかり、やがて本校帰りの生徒のひとり、八幡堂という文房具屋のそばでみんなを見かけたというのをきいて、やっと心配は半分になった。それだけに噂は村中にひろがり、てんでにかっ

てなことをいいあった。

「芝居がきたというから、行ったんじゃないかな」

「銭もないのに、どうして」

「のぼりやかんばんでも、口あけて見よるかもしれん」

「子どもっちゃ、ものずきなことやの」

一年生の家の者も今は半分笑顔で話しあった。

「いんま、腹へらして、足に豆こしらえて、もどってくるわいの」

「どんな顔して、もどってくるかしらん。阿呆くらいが」

「もどったら、おこったもんかいの、おこらんほうがよからうか」

「ほめるわけにや、いくまいがのう」

こんなのんきそうながいえたのも、ソんキの兄や、仁太や富士子の父親たちが迎えに出むいた安心からであった。それにしても、だれひとり大石先生を思いださなかったとは、なんとしたうかつさだったろう。

三人の出迎え人は、本村にさしかかると、これはと思う人に行きあうたびにたずねた。

「ちよっとおたずねですがな、お昼すぎごろに、七八つぐらいの子どもらが十人ほど通ったのを、見ませなんだかいな」

同じことを何べんくりかえしたろう。

そこで、子どもたちはどうしていたろう。

藪の上へまっさきについたのは、いうまでもなくコトエだった。コトエはそこで、草むらに学校の包みをかくして、みんなをまつた。吉次とソんキが先をあらそうように走ってき

た。つづいて竹一と正と。いちばんおくれてきたのは富士子と仁太であった。仁太は用心ぶかく、シャツやズボンの四つのポケットを、そら豆の煎ったのでふくらましていた。家にあっただけみんな持ってきたのだという。それを気前よくみんなに少しずつ分けてやりながら、いちばんうれしそうな顔をしていた。ぽりぽりいり豆をかみながら一行は出発した。

「おなご先生、びっくりするぞ」

「おう、よろこぶぞ」

コトエひとり先頭に立ってみんなをふりかえった。走って行って走って帰るはずなのに、だれもかれものんびりと歩いていると思った。行けばわかるのに、みんな口ぐちに女先生のことばかりいつている。

「おなご先生、ちんばひいて歩くんど」

「おなご先生の足、まだ痛いんかしらん」

「そりや痛いから、ちんばひくんじやないか」

するとソんキは、ちよこちよこ前にすすみ、

「な、みんな。アキレスはここじゃど。この太い筋が、切れたんぞ」

じぶんのアキレス腱のあたりをさすってみせ、

「こんなとこがきれたんじゃもん、痛うのうて」

ようやくみんなの足は早くなっていった。子どもたちだけでこの道を歩くのは、はじめてだった。山ひだを一つすぎるごとに新しい眺めがあらわれて、あきなかった。岬を横ざり、入り海ぞいの道にかかると、一本松の村はななめうしろに遠のく。それだけ近くなっているのが、うそのような気がして心細くなったが、だれも口には出さない。やがて、はる

かかなたに本校がえりの生徒のかたまりがみえた。みんな、はっとして顔を見あわせた。

「かくれ、かくれ。大いそぎで」

マスノの一声は、あとの十一人を猿のようにすばしこくさせ、萱山の中へ走りこませた。がさがたと音がして萱がゆれた。

「じっとして！ 音さしたらいかん」

マスノがうすいくちびるをそらして、少しつった切れ長の目にものをいわせると、竹一や正までが声もからだもひそめてしまった。みんなの背の倍もありそうな笹萱の山は、十二人の子どもをかくしてさやさやと鳴った。しかし気づかれずに大きな生徒たちをやりすごせたのは、じつにマスノの機転であった。彼女ににらまれると、みんなは猫のようにおとなしくなるのだ。

岬の道を出て、いよいよ本村にはいるころから、みんなはしぜんと小声にしゃべっていた。一本松の村までには幾つかの町や村の、たくさんの部落があった。大小のその村むらゝをすぎては迎え、すぎてはまた迎え、あきるほどそれをくりかえしても、一本松はなかなかこなかった。岬の村からみれば、あんなに近かった一本松、目の前に見えていた一本松、それが今は姿さえも見せない。八キロ、大人のいう二里の遠さを足の裏から感じだして、だんだんだまりこんでいった。行きあう人の顔も、見おぼえがなかった。まるで遠い国へきたよいうな心細さが、みんなの胸の中にだんだん、重石のようにならずんでいく。

もう一つ、はなをまわれれば一本松は目の前にながめられる

ことを、だれもしらないのだ。きいてもらちのあかぬ仁太に  
きくことも、もうあきらめてしまつて、ただ前へ前へとひと  
足でも進むよりほかなかつた。竹一とミサ子はまっさきにぞ  
うりをきらし、きれぬ片方をミサ子にやつて、竹一ははだし  
になつていた。吉次も正もあやしかつた。だれも一銭ももつ  
ていないのだ。ぞうりは買えるわけがない。はだしで帰らね  
ばならないだろうことは、歩いてきた道の遠さと考えあわせ  
て、ぞうりのきれかけたものの気持はよけいみじめだつた。

とつぜん、コトエが泣きだしてしまつた。昼めしぬきの彼  
女は、つかれかたもまたはやかつたらうし、がまんできなく  
なつたのだらう。道ばたにしゃがんで、ええん ええん と  
声を出して泣いた。すると、ミサ子と富士子がさそわれて、  
しくしくやりだした。みんなは立ちどまつて、ぼかんとした  
顔で泣いている三人を見ていた。じぶんたちも泣きたいほど  
なのだ。元気づけてやることばなど、出てこなかつた。きび  
すをかえせばよいのだ。もう帰ろうや、と、だれかがいえば  
よいのだ。しかしだれも、それさえいいだす力がなかつた。  
マスノや小ツルさえ、困惑の色を浮かべていた。彼女たちに  
しても、泣きだしたかつたのだ。しかし泣けなかつた。いつ  
そ、みんなで泣き出せば、どこからか救いの手がのべられる  
だらうが、それにも気がつかなかつた。

初秋の空は晴れわたつて、午後の陽ざしはこの幼い一団を、  
白くかわいた道のまん中に、異様さをみせてうしろから照ら  
していた。家へ帰りたい気持はしぜんにあらわれて、知らず  
しらず歩いてきた道のほうを向いて立つていたのである。そ  
の前方から、警笛とともに、銀色の乗合バスが走ってきた。

瞬間、十二人は一つの気持にむすばれ、せまい道ばたの草む  
らの中に一列によけてバスを迎えた。コトエさえももう泣い  
てはいず、一心にバスを見まもつていた。もうもうと、煙の  
ように白い砂ぼこりをたてて、バスは目の前を通りすぎよう  
とした。と、その窓から、思いがけぬ顔がみえ、

「あら、あら！」

といったと思うと、バスは走りぬけた。大石先生なのだ。

わあッ！

思わず道へとびだすと、歓声をあげながらバスのあとを追  
つて走つた。新しい力がどこからわいたのか、みんなの足  
は早かつた。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

途中でバスがとまり、女先生をおろすとまた走つていった。  
松葉杖によりかかつて、みんなをまつていた先生は、そばま  
でくるのをまたずに、大きな声でいった。

「どうしたの、いったい」

走りよつてその手にすがりつきもならず、なつかしさと、  
一種のおそろしさに、そばまでゆけず立ちどまつたものもあ  
つた。

「先生の、顔みにきたん。遠かつたあ」

仁太が口火をきつたので、それでみんなも口ぐちにいいだ  
した。

「みんなでやくそくして、だまつてきたん、なあ」

「一本松が、なかなか来んの、コトやんが泣きだしたとこ  
ろじゃつた」

「せんせ、一本松、どこ？ まだまだ？」

「足まだ痛いん？」

笑っている先生の頬を涙がとめどなく流れていた。なんのことは無い、一本松も先生の家も、すぐそこだとわかると、また歓声があがった。

「ほたつて、一本松、なかなかじゃったもんなあ」

「もう去のうかと思たぐらい遠かったな」

松葉杖をとりまいて歩きながら先生の家へゆくと、先生のお母さんもすっかりおどろいて、きゆうにてんてこまいになった。かまどの下をたきつけるやら、何度も外に走りだすやら、そうして一時間ほど先生の家にいただらうか。そのあいだにキツネうどんをごちそうになり、おかわりまでするものもいた。先生はよろこんで、記念の写真をとろうといい、近所の写真屋さんをたのんで、一本松まで出かけた。

「もつと、みんなの顔みていたいけど、もうすぐ日がくれるからね。うちの人、心配してるわよ」

帰りがらぬ子どもらをなだめて、やっと船にのせたのは四時をすぎていた。短かい秋の日はかたむいて、岬の村は、何ごともなかったかのように、夕ぐれの色の中に包まれようとしていた。

「さよならア」

「さよならア」

松葉杖で浜に立って見おくっている先生に、船の上からはたえまなく声がかかった。

三人の大人たちが町から村をさがしまわっているとき、十人の子どもは、思いがけぬ道を通って村へもどった。

わあい！

やあい！

時ならぬ沖合からの叫びに、岬の村の人たちは、どぎもをぬかれたのである。叱ってはみても、けつきよくは大笑いになって、大石先生の人気はあがった。

その翌々日、チリリンヤの大八車には、めずらしい荷物が積みこまれた。あんまりこまかいので、チリリンヤはそれをリンゴの空箱にまとめて村を出ていった。道みち、いろんな用たしをしながら一本松までくると、リンゴの箱をそのままかついで歩きだした。腰の鈴がリリンリリンと、足をかわすごとに鳴りつづけ、やがて、リツと鳴りやんだのが、大石先生の家の縁先である。チリリンヤのリンの音は、どこかから、なにかが届けられるときのあいさつである。いいわけは、あまり必要でなかった。

「はい。米五合の豆一升。こいつは軽いぞ煮干かな。ほい、もう一つ米一升の豆五合——」

小さな袋を幾つもとりだして縁側の板の間に積みかさねた。袋には名前が書いてある。それはみな、義理がたい岬の村から、大石先生への見舞いの米や豆だった。

#### 四 わかれ

写真ができてきた。一本松を背景にして、松葉杖によりかかった先生を十二人の子どもたちが、立ったり、しゃがんだりしてとりまいている。磯吉、竹一、松江、ミサ子、マスノ、順々に見ていって仁太のところへくると、思わずふきだした。

あんまり仁太がきばりすぎているからだ。つめている呼吸が、いまにも、うううともれて、うなりだしそうにかたくなっている。気をつけのその姿勢は、だれが見たって笑わずにいられるものではなかった。マスノとミサ子のほかは、生まれてはじめて写真をとったということで、だいたい、みんなかたくなっている。そのなかで仁太と吉次はとくべつであった。仁太とは反対に、身をすくめ、顔をそむけ、おまけに目をつぶっている吉次は、ふだんの小気さをそのまま映しだされているようで、かわいそうにさえ思えた。

かわいそうにキッチン、こわかったんだらう、写真機の中から、なにがとびだすかと思っただらう……

ひとり写真をながめて笑っているところへ、本校の校長先生がきた。その声をきくと、こんどは大石先生のほうが、思わず気をつけのようになって玄関に出ていった。松葉杖ははなれていたが、まだまだびっこの歩きぶりを見ると、校長先生はちよつと眉をよせ、気のどくがった顔で見っていた。

「ひどい目にありましたな」

「はあ、でも、ずいぶんよくなりました」

「いたいですか、まだ？」

返事にこまうて答えられないでいると、校長先生がさいそくにきたとも思っただらしく、お母さんがかわうて答えた。

「いつまでもごめいわくをかけまして、すみません。もうずいぶんらくになったようですけど、なんしろ、自転車にのれないものですから、いつまでもぐずぐずしておりまして、はい」

しかし校長先生のほうはそんなつもりではなく、見舞いが

てら吉報をもってきたのであった。友人の娘である大石先生のこと、今日は名前前でよんで、

「久子さんも片足犠牲にしたんだから、岬勤めはもうよいでしょう。本校へもどつてもらうことにしたんじやがな、その足じゃあ、本校へもまだ出られんでしょうな」

お母さんはきゆうに涙ぐんで、

「それは、まあ」

といったぎり、しばらくあとが出なかった。思いがけない喜びであり、きゆうには礼のことも出でこなかったのだ。

それをごまかしでもするように、さつきから、やっぱりだまっている娘の大石先生に気がつくくと、

「久子、久子、なんです。ぼんやりして。お礼をいいなさいよ」

しかし、大石先生としては、せっかくのこの校長先生のはからいが、あんまりうれしくなかったのだ。これがもし、半年前のことならば、とびとびして喜んだらうが、今ではもう、そうかんたんに、いかなない事情が生まれてきていた。だから、口をつけて出たことばは、お礼ではなかった。

「あのう、もうそのこと、きまつたんでしょうか。後任の先生のことも」

まるでそれは、とんでもないといわぬばかりの口調である。

「きまりました。きのうの職員会議で。いけませんかい」

「いけないなんて、それは、そんなこという権利ありませんけど、でもわたし、やっぱりこまつたわ」

そこにお母さんでもいたら、大石先生は叱りつけられたかもしれない。しかしお母さんは、茶菓子でも買いにいったらし

く、出ていったあとだった。校長先生はにこにこ笑って、

「なにが困るんですか？」

「あの、生徒と約束したんです。また岬へもどるって」

「こりやおどろいた。しかし、どうしてかよいますかね。お母さんのお話だと、とうぶん自転車にもものれんということだったので、そうはからったんですがね」

もう、いいようがなかった。すると、岬の村がいつそうなつかしくなり、思わず未練がましくいった。

「後任の先生は、どなたでしょう」

「後藤先生です」

「あら！」

お気のどくといひそうになってあわててやめた。後藤先生こそ、どうしてかようだろうとあんじられたのだ。もうすぐ四十で、しかも晩婚の後藤先生には乳呑み子があつた。じぶんよりは少し岬へ近い村の人とはいへ、一里半（六キロ）はあるであろう岬へ、寒さにむかってどうしてかようだろうかと思うと、その気のどくさと、じぶんの心残りとがごっちゃになって、急に眉をあげた。

「では、校長先生、こうしてただけませんか。わたくしの足がすっかりなりましたら、いつでも代りますから。それまで後藤先生にお願いすることにして……」

いかにもよい思いつきだと思ったのだが、校長先生の返事は思いがけなかった。

「義理がたいこというなあ、久子さん。あんたがそないに気をつかわんでも、ちようどよかつたんだから。後藤先生は、すすんで岬を希望したんだから」

「あら、どうしてですの？」

「いろいろ、あってね。老朽で来年はやめてもらう番になっていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そうだったら、よろこんで、承知しましたよ」

「まあ、老朽！」

三十八や九で老朽とは？ まだ乳呑み子をかかえている女が老朽とは。あきれたような顔をしてことばをきつた大石先生を、いつのまにか外から帰ってきたお母さんは、くだものなど盛った盆をさし出しながら、娘のぶえんりよさに気が気でなく、

「久子、なんですか、せつかくの校長先生のご好意に、ろくろくお礼もいわないで。だまってきてりや、さつきからおまえ、へソ曲りなことばかりいうて……」

そして校長先生の前に手をつき、  
「どうもほんとに、わたしが行きとどきませんでな。つい、ひとりっ子であまえさせたらしく、失礼なことばかり申しまして。これでも、学校のことだけはあなた、寝てもさめても考えとりますふうで、早く出たい出たいと申しとりましたんです。おかげさまで、本校のほうにかわらしてただけでしたから、もう十日もしたら、バスにのって、かよえると思います。こんな、気ままものですけど、どうぞもう、よろしゅうお願いいたします」

娘にいわせたいことを、ひとりでならべたてて、何度もぺこぺこ頭をさげた。そして、それとなく目顔であいずをしたが、大石先生はそしらぬ顔で、まだ後藤先生にこだわっていた。

「それで、もう後藤先生は、岬へかよってるんでしょうか？」  
校長先生もまた、この少しふうがわりの、あまのじやくみ  
たいな娘を相手にして、おもしろがっているようすで、  
「そいつは、まだですがね。なんならもう一度職員会議をひ  
らいて取り消してもよろしい。後藤先生は、がっかりするで  
しょうがなあ」

お母さんひとりには、気をもみつづけ、はらはらしていた。  
そのお母さんにむかって、校長先生は、

「大石くんに、似たところがありますな。一徹居士なところ。  
なにしろ彼は、小学生でストライキをやったんだから、  
前代未聞ですよ」

あつはつはと笑った。その話は、まえにも聞いたことがあ  
った。なんでも、小学校四年生の父が、受けもちの先生に誤解  
されたことをおこって、級友をそそのかして一日ストをやっ  
たというのだ。同級生だった校長先生も、同情して、みんな  
でいっしょに村役場へ押しかけていって、先生をとりかえて  
くれといったのだという。今年の春、就職をたのみにいつ  
たとき、はじめて父の少年時代のことをきいて、母と子はい  
っしょに笑ったのである。ただ思い出話として笑って語られ  
る父のことが、今の大石先生には、ふしぎと、まじめにひび  
いた。

校長先生が帰ったあと、ひとり考えている大石先  
生を、お母さんはいたわるように、

「でもまあ、よかったではないか、久子」

しかし大石先生はだまっていた。そして晩の御飯もいつも  
よりたべなかつた。夜おそくまで考えつづけたあげく、やっ

とお母さんにいった。

「よかったのかもしれないわ。わたしにも、後藤先生にも」  
それは「よかったでないか、久子」といわれてから四時間  
もあとのことであつた。お母さんはほっとした顔で、

「そうとも、そうともお前、万事都合よくいったというもの  
よ、久子」

すると先生はまた、ややしばらく考えてから、はつきりい  
った。

「そんなこと、ぜったいにないわ。万事都合なんかよくなら  
ない。すくなくも後藤先生のためにはよ。だつて、老朽なん  
で、失礼よ」

この娘は気が立っているのだというふうにお母さんにも  
うそれにさからおうとはしないで、やさしくいった。

「とにかく、もう寝ようでないの。だいぶふけたようじゃ」  
その翌朝、思ひたつた大石先生は、岬の村へ船で出かけ  
た。船頭は小ツルの父親とおなじく、渡し舟をしたり、車を  
ひいたりするのが渡世の、一本松の村のチリリンヤであつた。  
十月末の風のない朝だ。空も海も青々として、ひきしまるよ  
うな海の空気は、両袖で思わず胸をだくほどのひやっこさで  
ある。

「お寒ぶ。もう袷じゃのう、おっさん」

「なに、陽があがりや、そうでもない。今が、いちばんえい  
季節じゃ。暑うなし、寒うなし」

珍らしく紺のセルの着物に、紫紺の袴をつけている大石  
先生だつた。ゴザをしいた船の胴の間に横いざりに坐つた足

を、袴はうまくかくして、深い紺青こんじょうの海の上を、船は先生の心一つをのせて、櫓音ろうおとも規則ただしく、まっすぐに進んだ。二か月前に泣きながら渡った海を、今はまた、気おいたついで渡っている。

「なんせ、ひどい目をみたのう」

「はあ」

「若いものは、骨がやらかい（やわらかい）から、折れてもなおりが早い」

「骨じゃないんで。筋ともちがう。アキレス腱けん、いうんじやがのう。骨よりも、むつかしいとこで」

「ほう、そんなら、なおいかん」

「でも、ひどい目にあわすつもりでしたんじやないさかい。怪我けがじゃもん、しょうがない」

「そんな目に おうても わかれの あいさつとは 気のえい こつちやい。ゆんとん、さんじやい」

船頭せんとうさんは櫓ろうにあわせて短かくことばをくぎりながら、「ゆんとん、さんじやい」で、いっそう力を入れてこいだ。大石先生もくつくつ笑いながら、それにあわせて、

「そんなこと いうても たったの 一年生が 親にも ないしよで 見舞みまいに きたんじやもん いかんと おれるかい ゆんとん さんじやい」

大石先生がきやっきゃつと笑うと、船頭さんもいい気持ちらしく、

「ぎりと ふんどじゃ かかねば なるまい そういう もんじやよ ゆんとん さんかよ」

もう大石先生は腹をかかえて、思うぞんぶん笑った。海の

上ではだれも気にするものはなく、その笑い声まで櫓の音でくぎられながら、船はしだいに沖おきにすすみ、やがて対岸の村へと近づいてゆく。まだ朝あさの霧もやの消えきらぬ岬みさきのはなは、もうとつくに今日の出発がはじまったらしく、小さな物音がしきりにひびいてきた。今ごろ、あの子どもたちはどうしているだろうか。自転車でかよっていたとき、よろずやの前にさしかかると、あわてて走りだしてきていた松江、よく、波止場はとばの上まで出てきて待ちうけていたソソキ、三日に一度はちこくする仁太にた、おしゃまのマスノ、えんりよやの早苗さなえ、一学期に二度も教室で小便をもらした吉次、と、ひとりひとりの上に思いをめぐらしながら、よくぞあのチビどもが、思いきつて一本松までこられたものだと思うと、あの日の、ほこりにまみれた足もとなど、思いだされて、いとしさに、からだがふるえるほどだった。

あのときは、わたしのほうがおどろかされたから、今日はひとつ、みんなをびっくりさせてやる……。だれにまっさきに見つかるだろうかと、たのしい空想をのせて船はすすみ、緑の木立ちや黒い小さな屋根をのせて岬はすすべるように近づいてきた。二人の女の子が砂浜に立ってこちらを見ている。一年生ではないらしい。ふしぎそうにこちらから目をはなさない。変化にとぼしい岬の村では、海からの客も、陸からの客も見つけるに早く、好奇の目はまたたくまに集団をつくるのだった。立ちどまっている子どもが五人になり、七人にふえたと思うと、その姿はしだいに大きくなり、がやがや騒さわぎとともに、ひとりひとりの顔の見わけもつきだした。しかし、子どものほうではだれもまだ着物の先生に見当けんとうがつかぬらし

く、ま顔で見つめている。笑いかけてもわからぬらしい。しびれをきらして思わず片手があがると、がやがやはきゆうに大きくなって、叫びだした。

「やっぱり、おなご先生じゃア」

「おなご せんせえ」

「おなごせんせが きたどオ」

浜べはもういつのまにか大人までがまじつての大かんげいになった。船頭さんのなげたと綱は歓呼の声でたぐりよせられ、力あまつて船は砂浜まで引きあげられるさわぎだった。ひとしきり笑いさざめいたあげく、ともかく学校へ向かった。途中であう人たちは、いちいち見舞いのことばをおくった。

「怪我はどないでござんす。あんじよりました」

先生のほうもいちいちあいさつをかえした。

「ありがとうございます。そのせつは、お米をいただいたりしまして、すみませんでした」

「いいえ、めつそうな。ほんの心もちで」

すこしゆくと鋤をかついだ人が、はちまきをはずしかかっている。同じような見舞いを聞いたあと、

「こないだはどうも、きれいなそら豆をありがとうございますました」

すると、その人は少し笑って、

「いやア、うちは、胡麻をあげましたんじゃ」

じぶんの馬鹿正直さに気がつき、これからは米とも豆ともいわないことにきめた。わずか一学期だけのことだったので、一年生の父兄のほかはよく顔もおぼえていなかったのだ。そのつぎに出あった、漁師らしい風体の人を見ると、魚をくれ

たのはこの人かと思ひ、用心しいしい、頭をさげた。

「こないだは、けっこうなお見舞いをありがとうございますました」

するとその人は、きゆうにあわてだし、

「いや、なに、ことづけようと思つたんですが、つい、おくれてしても、まにあいませなんだ」

先生のほうも同じようにあわてて、赤い顔になり、

「あら、どうも失礼しました。思いちがいましたの」

これが以前だったら、女先生は見舞いを催促したといわれるところだったろう。行きすぎると子どもたちが笑いだし、その中の男の子が、

「先生、清六さん家は、人にもものやつたためしがないのに。

もらうだけじゃ。山へ仕事に行つてしようべんしとうなつたら、どんな遠うても、わが家の畑までしにいづく人じゃもん」

わあとみんなが笑つた。その話はまえにもいちど聞いたことがあつた。四年生にいるその息子が、組でひとりだけ、どうしても音楽帳をもつてこなかつた、そのときである。いつも忘れてくるのかと思つてただすと、泣きそうになつてうつむいた。するとならんでいた生徒が、かわつて答えた。

「歌をなろうても銭もうけのたしにはならんいうて、買うてくれんのじゃ」

つぎの唱歌のとき、清一というその子に音楽帳をやると、うれしそうに受けとつたことを思ひだした。彼は、教科書まで全部、他人の使い古しをもらつていた。しかも村で二番目のしんしょ持ちだというのだ。そこに清一のいないことで、ほつとしてゐる先生へ、

「せんせ足、まだ痛いん？」

まっさきにきいたのは仁太である。もう松葉杖ではなかったにしろ、やっぱりびっこをひいているのを見ると、仁太はうたてかったのであろう。

「せんせ、まだ自転車にのれんの？」

こんどは小ツルだった。

「そう、半年ぐらいしたら、のれるかもしれん」

「そんなら、これから、船でくるん？」

ソんキの質問にだまって顔をふると、コトエがおどろいて、「へえ、そんなら、歩いて？ あんな遠い道、歩いてエ？」

コトエにとっては忘れられない二里の道だったのだろう。空腹と心配でまっさきに泣きだしたコトエである。仲間はず

れになりたくないばかりに、本の包みを藪にかくして出かけたコトエは、船で送りとどけられたときにも、ひとり気がふさいでいた。どんなに叱られるかと、びくびくしていたのだ。

しかし、迎えに出ていたおぼんは、どこの親たちよりもまっさきに、船にアユミのかかるのもまちきれず、じゃぶじゃぶと海の中へはいつてゆき、どの子よりもまっさきにコトエを船から抱きおろしたのである。まるでがいせん將軍のように晴れがましくアユミをわたる子どもらとそれを迎える親たちのなかで、コトエとおぼんだけは泣いていた、藪へまわって本包みをとってもどりながら、もうそのときは二人ともふだんの顔になって話があった。

「これからは、だまってやこい行ったらいかんで。ちゃんと、そういうて行かじゃ」

「そういうたら、行かしてくれへんもん」

「そうじゃなア、ほんにそのとおりじゃ。ちがいない」

おぼんはふるえるような力のない笑い声でわらい、

「でもな、なにがなんでも飯だけはたべていかんと、からだに毒じゃ」

そういわれてコトエは、先生の家でごちそうになったキツネうどんを思いだした。思いだしただけでも唾が出てくるほどうまかったキツネうどん。空腹はキツネうどんの味を数倍にしてコトエの味覚にやきついていた。

その後も彼女は、何度かキツネうどんの話をしては、大石先生を思いだし、先生を思いだしてはキツネうどんを思いうかべた。思いがけず先生がやってきた今、彼女はまた、あの遠い道とキツネうどんを思いだしながら、聞いたのである。

あんな遠い道を、歩いてエ？ と。しかし、コトエでなくとも、子どもらは、今日の先生を、ふたたび学校へむかえたものと考えていた。だれもうたがおうとしない態度を見ると、先生は、陸第一歩で今日の目的をはっきりさせるべきだったと思つた。

お別れにきたのよう……

そう叫びながら船をおりたら、そくざにそのような雰囲気が生まれたらうにと、くやみながら、コトエのことばにしがみつくようにして、ゆっくりといった。

「ね、遠い遠い道でしょ。そこを、ひよこたん ひよこたん と、ちんばひいて歩いてくると、日がくれるでしょ。それでね、だからね、だめなの」

それでも子どもたちにはさっしがつかなかつた。網元の森岡正が、正しい考えで、

「そんなら先生、船できたら。ぼく、毎日迎えにいつてやる。一本松ぐらい、へのかつぱじや」

正は近ごろ櫓こがこげるようになり、それが自慢じまんなのであった。先生も思わずにこにこして、

「そうお、それで夕方ゆうがたはまた、送おくってくれるの？」

「うん、なあ」

あとをソソキにいったのは、少し不安でソソキに加勢かせいを求めたものらしい。ソソキも、うなずいた。

「そう、ありがとう、でも、困こったわ。もつと早くそれがわかってたらよかつたのに、先生もう、学校やめたの」

「……………」

「今日は、だからお別れにきたの。さよなら、いいに」

「……………」

みんなだまつていた。

「べつのおなご先生が、すぐきますからね、みな、よく勉強べんきょうしてね。先生、とつても岬みさきを好きなんだけど、この足じゃあ仕方がないでしょ。また、よくなつたら、くるわね」

みんな一せいにうつむいて先生の足もとを見た。早苗が目に一ぱい涙なみだをため、それをこぼすまいとして、目を見ひらいたままきらきらしている。感情をなかなかことばにしない早苗のその涙を見たたん、先生の目にも同じように涙がもりあがってきた。と思うと、きゆうに蜂はちの巣すにでもさわったように、わあっと泣きだしたのはマスノだった。するとコトエやミサ子や、気の強い小ツルまでが、しくしくやりだした。泣き声の合唱である。岬分教場の古びた門札もんさつのかかった石の門の両側に、大きな柳やなぎと松の木がある。その柳の木の下で、

三十四、五人の生徒にとりまかれて、女先生もまたかまうことなく涙をこぼした。マスノの音頭おんどがあんまり大げさだったので、吉次や仁太まで泣きそうになり、それをがまんしているふうだった。大きな生徒のなかにはおもしろそうに見ているものもいた。職員室の窓からその光景を見ていた男先生は、古ぐつの先革さきがわだけをのこした上ばきをつっかけてとんできたが、わけをきくと、

「なんじゃあ、おなご先生がせつかくおいでたんだから、笑うてむかえんならんに、みんなはでに泣くじゃないか。さ、どいたどいた。おなご先生、早く中へおはいりなさい」

しかしだれひとり動こうとはせず、しくしくつづけた。

「やれやれ、女子じょしと小人しょうじんはなんとかじゃ。泣きたいだけ泣いてもらお。泣きたいものは、なんぼでも泣け泣け」

古ぐつの上ばきをぱくぱく音させて男先生が去りかけると、はじめてみんなは笑いだした。泣け泣けといわれたのがおかしかったのだ。

始業の板木ばんぎが鳴りわたり、いよいよ今日の勉強もはじまるわけだ。そのはじめに別れのあいさつをして帰るはずの大石先生であったが、別れのことばをいったあと、なにかに引っぱられるようにして、一、二年の教室へはいった。久しぶりの女先生に、みんなうきうきした。

「じゃあ、この時間だけ、いっしょにべんきょうしてお別れにしましょうね。算数だけど、ほかのこともいいわ。なにしよう？」

はい はい と手があがり、まだ名ざしをしないうちにマスノが、

「唱歌」

と叫んだ。歓声と拍手がおこった。みんなさんせいらしい。

「浜で歌うたう」

わあっと、また、ときの声があがる。

「せんせ、浜で歌うたう」

マスノがひとりで音頭をとっている。

「じゃあ、男先生にそいって、浜まで送ってきてね。船がま  
ってるから」

パチパチと拍手がおこり、机ががたがた鳴った。男先生に  
相談すると、それならみんなを送ろうということになった。

びっこの大石先生をとりまくようにして十二人の一年生が先  
頭を歩いた。一ばんしんがりの男先生は、怪我がの日以来ほこ  
りをかぶっている女先生の自転車を押していった。道で出あ  
った村の人も浜までついてきた。

「こんどは、泣きっこなしよ」

大石先生はひとりひとりの顔をのぞきながら、

「さ、指きり、マアちゃんも泣かないでね」

「はい」

「コトやんも」

「はい」

「早苗さんも」

「はい」

これだけが一ばん泣き虫だから、これだけ指きりしたから、  
もうだいじょうぶ——

ひとりひとりの小さな指にちかひながら、浜へくると、仁  
太が大声で、

「なに、歌うん？」

と、マスノの顔を見た。

「蛍の光だ、そりゃあ」

男先生がそういったが、一年生はまだ蛍の光をならつてい  
なかつた。

「そんなら一年生も知つとる歌、『学べや学べ』でもうたうか  
い」

男先生はじぶんの教えた歌を聞いてもらいたかった。しか  
しマスノがいち早く叫んだ。

「山のからす」

彼女はよほど「山のからす」がお気にいりらしかった。そ  
してもう、まっさきに、うたいだしたのだ。

山のからすが もつてきた

あかい小さな じょうぶくろ

まだやっと一年生なのに、彼女の音頭とりはなれきってい  
た。天才とでもいうようなものであろうか。ちゃんと、みん  
なをあとについて歌わせる力があつた。

あけてみたらば 月の夜に

山がやけそろ こわくそろ

村の人も大ぜい集まってきて、あいさつをした。大石先生  
もいっしょに歌いながら、船にのりこんだ。

へんじかこうと 目がさめりや  
なんのもみじの 葉がひとつ

くりかえし歌って、いつかそれもやみ、しだいに遠ざかる船にむかって呼びかける声も細りながら、いつまでもつづいた。

「せんせえ——」

「また、おいでえ」

「足がなおったら、またおいでえ」

「やくそく したぞオ」

「やくそく しくした ぞオ」

最後に仁太の声で、あとはもう、ことばのあやもわからなくなつた。

「かわいらしいもんじやのう」

船頭せんとうさんに話しかけられて、はじめて我れにかえりながら、

しかし目だけは、まだ立ちさりかねている浜べの人たちからはなさずに、

「ほんまに、みんな、それぞれ、えい人ばっかりでのう」

「昔から、ひちむつかしい村じやというけんどのう」

「そうよの。そんな村は、気心がわかつたとなると、むちやくちやに人がようてのう」

「そんなもんじや」

つよい日ざしと海風に顔をさらしたまま、もう胡麻粒ごまつぶほどにしか見えない人の姿とともに、岬みさきの村を心の中にしみこませるように、いつまでも目をはなさなかつた。櫓この音だけの海の上で、子どもたちの歌声は耳によみがえり、つづらな目

の輝かがやきはまぶたの奥おくに消えなかつた。

## 五 花の絵

海の色も、山の姿も、そっくりそのまま昨日きのうにつづく今日きょうであった。細長い岬の道を歩いて本校にかよう子ども群れも、同じ時刻じこくに同じ場所を動いているのだが、よく見ると顔ぶれの幾人いくにんかがかわり、そのせいでも、みんなの表情もあたるの木々の新芽しんめのように新鮮しんせんなのに気がつく。竹一たけいちがいる。ソんキの磯いそ吉きちもキッチンキッチンの徳田とくだ吉次きちじもいる。マスノや早苗さなえもあとからきている。

この新しい顔ぶれによって、物語のはじめから、四年の年月が流れさつたことを知らねばならない。四年。その四年間に「一億同胞いちおくどうぼう」のなかの彼らの生活は、彼らの村の山の姿や、海の色と同じように、昨日きのうにつづく今日けふであつたらうか。

彼らは、そんなことを考えてはいない。ただ彼ら自身の喜びや、彼ら自身の悲しみのなかから彼らはのびていった。じぶんたちが大きな歴史の流れの中に置かれているとも考えず、ただのびるままにのびていた。それは、はげしい四年間であつたが、彼らのなかのだれがそれについて考えていたろうか。あまりに幼わかい彼らである。しかもこの幼い者の考えおよばぬところに、歴史はつくられていたのだ。四年まえ、岬みさきの村の分教場へ入学したその少しまえの三月十五日、その翌年彼らが二年生に進学したばかりの四月十六日、人間の解放を叫さけび、日本の改革を考える新らしい思想に政府の圧迫あつぱくが加えられ、同じ日本のたくさんの人びとが牢獄ろうごくに封じこめられた。そん

なことを、岬の子どもらはだれも知らない。ただ彼らの頭にこびりついているのは、不況ふきょうということだけであった。それが世界につながるものとはしらず、ただだれのせいでもなく世の中が不景気になり、けんやくしなければならぬ、ということだけがはっきりわかっていた。その不景気の中で東北や北海道の飢饉ききんを知り、ひとり一銭せんずつの寄付金ききんを学校へもっていった。そうした中で満州事変まんしゅうじへん、上海事変シヤンハイはつづいており、幾人いくにんかの兵隊が岬からもおくり出された。

そういうのはげしい動きのなかで、幼い子どもらは麦めしをたべて、いきいきと育そだった。前途ぜんとに何が待ちかまえているかをしらず、ただ成長することがうれしかった。

五年生になっても、はよりの運動靴うんとくつを買ってもらえないことを、人間の力ではなんともできぬ不況のせいとあきらめて、昔むかしながらのわらぞうりに満足まんぞくし、それが新らしいことで彼らの気持はうきうきした。だからただひとり、森岡正のズックを見つけると、みんなの目はそこにそそがれてさわいだ。

「わア タンコ、足が光りよる。ああばば（まぶしいこと）」  
いわれるまえから正は気がひけていた。はいてこなければよかったと後悔こうかいするほど恥ずかしかった。女のほうでは小ツルがひとりだった。靴は、足をかわずたびにぶかぶかとぬげそうになった。小ツルはどうとうズックを手にもって、はだしになり、うらめしそうに靴をながめた。六年生の女の子がじぶんのぞうりと取りかえてやりながら、大声で、

「わあ、十文半ともんはんじゃもん、わたしにでも大きいわ」

おそらく三年ほどもたせるつもりで買ってやったのだろうが、小ツルはもうこりこりしていた。ぞうりのほうがよっぽ

ど歩きよかったのだ。ほっとしている小ツルに、松江は笑いかけ、

「な、コツやん、べんどが、まだ、ここで、ぬくいぬくい」  
そういつて腰こしのあたりをたたいてみせた。

「百合ゆりの花の弁当箱？」

小ツルが、いつ買ったのだ、という顔で問うのを、松江は気弱くうけ、

「ううん、それは明日あしたお父ととつあんが買こうてきてくれるん」

そういつてしまつて、松江はほつとした。三日前のことを思いだしたのだ。ミサ子もマスノも、ふたに百合の花の絵のあるアルマイトの弁当箱を買ったと聞いて、松江は母にねだつた。

「マアちゃんも、ミイさんも、百合の花の弁当箱買うたのに、うちもはよ買うておくれいの」

「よしよし」

「ほんまに、買うてよ」

「よしよし、買うてやるとも」

「百合の花のど」

「おお、百合きくなと菊きくなど」

「そんなら、はよチリリンヤへたのんでおくれいの」

「よしよし、そうあわてるない」

「ほたつて、よしよしばかりいうんじゃもん。マツちゃん、チリリンヤへいつてこうか」

それではじめて彼女の母はしんけんになり、こんどはよしよしといわずに、少し早口で、

「ま、ちよつとまつてくれ、だれが銭ぜいはらうんじゃ。お父つ

あんにもうけてもろてからでない、赤恥かかんならん。それよか、お母さんがな、アルマイトよりも、もっと上等のを見つけてやる」

そういつてその場を流されたのだが、松江のためにさがしだしてくれたのが、古い昔の柳行李やなぎじりの弁当入れとわかると、松江はがっかりして泣きだした。今どき柳行李の弁当入れなど、だれも持っていないことを、松江はしっていたのだ。世の中の不況ふきょうは父の仕事にもたたって、大工だいこくの父が、仕事のな日は、草とりの日のようにまでいつているほどだから、弁当箱一つでもなかなか買えないこともわかつていた。しかし松江は、どうしてもほしかったのだ。ここで柳行李をうけいれたら、いつまでたつても百合の花の弁当箱は買ってもらえないということ、松江は感じて、ごねつづけ、とうとう泣きだしたのである。しかし母親もなかなかまけなかった。

「不景気なんだから、ちつとがまんしい。来月になって、景気がよかつたら、ほんまに買おうじゃないか。なあ、マツはいちばん大きいから、もつと聞き分けいでどうすりゃ」

それでも松江はしくしく泣いていた。いつやむともしれないほど、しんねり泣きつづけるのは、よほどの思いにちがいない。そのままつづけばいつやむともしれぬ泣きぶりであったが、やがて、泣くどころではないことがおこった。彼女の母は、きりつとした声でいつた。

「マツ、弁当箱はきつと買うてやる。指きりしてもええ。そのかわりおまえ、産婆さんばさんとこへ、ひとつ走りはしいつてきてくれや。大急ぎできてつかあされ、いうてな。行きしなに、よろずやのばあやんにも、ちよつときてもろてくれ。こんなは

ずないんじゃけん、おかしいな」

あとのほうはひとり言のようにいつて、納戸なんどにふとんをしきだした母親を見ると、さすがに松江も泣きやみあわてて家をとびだした。小さいからだをツブテのように走らせながら、彼女の心には一つのたのしみがふくらんできた。それは指きりしてもよいといった母のことばだった。産婆さんばさんの家は本村のつつきにあつた。帰りは途中とちゆうまで自転車にのせてくれ、少し上り坂のところまでくると、年とつた産婆さんは自転車をとめ、

「おまえは、ここでおりてくれ。一刻も早ういかんならん」  
松江はこつくりして、自転車のあとから走つた。自転車はみるみる遠ざかり、すぐに山の中へ消えていつた。大石先生の自転車いらい、女の自転車もようやくはやりだして、今ではもう珍めづらしくはなかつたが、それだけに走りさつた産婆さんの自転車を見て、毎日朝早く起きて、てくてく、町まで歩いて仕事にゆく父親にも、自転車があれば、どれほど助かるかと、ふと思つた。

走つて帰ると、もう赤ん坊は生まれていた。いそがしそうに襁たすきがけで水をくんでいたよろずやのおばさんは、松江を見るなりいつた。

「マツちゃんよ、お前、えらかろうが、大いそぎで釜かまの下たいておくれ」

バケツのまま釜に水をあけてから、小声で、  
「こんまい女の子じゃ。月たらずじゃといな。でも、ええじやないか、なあマツちゃん。また女でお父ととつあんはうんざりしようけん、女の子はええ。忠義はできんけん、十年も

たったら、マツちゃんじゃって、どない出世するかしたもんじゃない」

なんの意味がよくわからぬまま、松江は釜の下をたきつづけた。母親になにかことがあると、年よりのいない松江の家では、小さいときから松江がかまどに立たねばならなかった。それから三日目、はじめて弁当をもって本校へゆく松江は、納戸なんどにねている母親に注意されながら、湯気ゆげの出ている御飯を釜から弁当箱につめた。

「お父つあんのは、両行李りょうりぎゆうぎゆうにつめこんであげよ。お前のは軽くいれてな、なにせ、大きい弁当箱じゃもん。梅干うめぼしは見えんほど御飯の中に押しこまにや、ふたに穴があくさかい」

血の道がおこりそうだといって、しかめ顔に、手ぬぐいで はちまきをしてねている母を、幼い松江は気にもかけず、

「お母さん、百合の花の弁当箱、ほんまに買うてよ。いつ買うてくれるん？」

「お母さんが、起きたら」

「おきれたら、その日に、すぐに？」

「ああ、その日に」

松江はうれしくて、今日借りてもってゆく父親のアルミの弁当箱の大きさも気にかからなかった。松江ぐらいの女の子なら、三人分はゆうにはいる大きな、深い弁当箱が、小学校の教室ではどれほどこっけいに見えるかを、彼女は考えなかった。柳行李やなぎりよりはそのほうがよいと思ったのだ。それどころか、からだにたわってくる弁当のぬくみは、彼女の心をほかほかと温めつづけていた。小ツルの問いに、思わず、明日あした

と答えなければ、明日は買ってもらえない。しかし、あさっては買ってもらえるかもしれないと考えると、彼女はひとり笑えてきた。こんな、温かい気持ちで出かけていった松江であった。松江にかぎらず、みんな何かしらうれしがっていた。マスノは新しいセーラー服をきて自慢じまんらしかったし、コトエはおばんの作っておいてくれたぞうりの鼻緒はなおに赤いきれのないこんでいるのがうれしそうだった。まるで大学生の着るようなこまかいさつまがすりの裕あわせをきせられている早苗は、赤いはっかけ（すそまわし）を気にして、ときどきうつむいて見ている。じみなその着物を人に笑われないうちに、早苗の母はいったのである。

「なんと、じみすぎておかしいかと思うたら、赤いはっかけでひきたつこと。そんでまた、これが早苗に似合うというたら。この着物きたら、かしこげに見えるわ。裾すそにちろちろ赤いのも見えて、みごといい、みごといい。よかったア」

これだけほめられると、早苗は正直にそれを信じこんだ。着物をきているのはコトエと二人ふたりだけで、コトエもまた母親のだったららしい黒っぽい、飛び模様のある綿めんめいせんをきていた。本裁ほんぢそのままらしく、腰こしあげも肩かたあげももりあがっている。しかし彼女のじまは、先鼻緒さきばなに赤いきれのついたぞうりの方だった。藪やぶのそばの草むらを通るとき、コトエだけは、ふっと、大石先生を思いだし、一本松のほうを見た。

「小石先生！」

親したしく、心の中でよびかけたつもりなのに、まるでそれが聞こえたかのように、小ツルがよってきた。

「小石先生のこと、知っとな？」



でおいでと手をふられると、みんなはそのほうへ走っていった。

「もうくるか、もうくるかと思って、まっけたのよ。ちよつとまっけた」

そういつて出てきた小石先生は、歩きながらみんなを土手のほうへつれていった。

ひとりひとりの顔を見ながら、

「大きくなったじゃないの。今に先生においつくわ。あら、

小ツやんなんか、追いかしそうだ」

小ツルに肩をならべ、

「へえ、まけた。でもしようがない、小石先生だもんね」

みんな笑った。

「あんたらが小石先生といったもんで、いつまでたつても大石先生になれないじゃないの」

また笑った。笑いはするが、だれもまだ、なんともいわない。

「いやに、おとなしいのね。五年生になったら、こんな、おとなしくなったの」

それでもここにこしているだけなのは、小石先生が、なんだかまえと少しかわって見えたからだだった。色も白くなっているし、そばにいくと、スマイレの花のようにいいにおいがした。それは嫁さんのおいだというのを、みんなは知っていた。

「せんせ」

マスノがやつと口をきつた。

「先生、唱歌おしえてくれるん？」

「そう。唱歌だけじゃないわ。あんたたちの受けもちよ、こんど」

わあつと歓声があがり、きゆうにうちとけてしゃべりだした。先生、先生とだれかが呼びつづける。呼びつづけながら岬の村のいろんなできごとが、その海の色や風の音までつたわつてくるようにわかつた。コトエのうちでは最近、おばあさんが卒中でなくなり、ソソキのお母さんはリヨウマチで寝こんでいるという。早苗のおでこのかすりきずは、ついこないだ、ミサ子と二人で肩をくんでスキップで走っていて、道路から浜におちたときの怪我がとわかつたし、キッチンの家では豚が三匹も豚コレラで死んでしまい、お母さんが寝こんだ、などと話はつきなかつた。

小ツルは、先生のからだをつかまえて、ゆすぶり、

「先生、仁太、どうしてこなんだか？」

「あ、それ聞こう聞こうと思つてたの。どうしたの。病気？」  
すぐには答えず、みんな顔見あわせて笑っている。先生もつられて笑いながら、これはきつと仁太が、とつぴょうしないことをしでかしたにちがいないと、ふと思つた。

「どうしたのよ。病気じゃないの？」

早苗の顔を見ていうと、早苗はだまつかぶりをふり、目を伏せた。

「らくだい」

ミサ子が答えた。

「あら、ほんと？」

おどろいている先生を、笑わせようとするように小ツルは、

「いつも、はな、たらしとるさかい」

みんなは笑ったが、先生は笑わなかった。

「そんなことうそよ。はなたらして落第らくだいなら、みんな一年生のとき落第したわ。病気かなんかで、たくさん休んだんでしょ」

「でも、男先生がそういうた。はなたれもしだいおくりというのに、仁太は四年生になってもはなたれがなおらんから、もーぺん四年生だつて」

小ツルの話に、みんながツンツンはなをすすった。それには先生もちょっと笑ったが、すぐ、心配そうな顔になった。始業のかねが鳴ったので、みんなと別れた先生は、職員室しよくいんしつにもどりながら、仁太のことき考えていなかった。かわいそうにとつぶやいた。落第した仁太が、弟の三吉と同級生になつてもう一度やりなおす四年生を思うと、氣持がくもつてきた。はなたれもしだいおくりと、ほんとに男先生がいったとしたら、仁太を四年生にとどめることこそ、はなをたれつぱなしにさせておくことのように思ったのだ。あのからだの大きな仁太のむじやきさが、それで失われるとしたら、仁太の一生についてまわる不幸のように思えて、今日きょう、ひとりひとり残された仁太のさびしさが、ひしひしとせまってきて、またくりかえした。

はなたれも しだいおくり

はなたれも しだいおくり

仁太はどうしてとり残されたらう。

それを竹一にでももういちど聞こうと思つた大石先生は、お昼休みの時間をまっつて、そとへ出た。運動場の見わたせる土手どての柳やなぎの下に立つと、竹一は見あたらず、まっさきにとらえたのは松江だった。松江はなぜかひとり校舎の壁かべにもたれてしょんぼりしていた。まねくと土手の下まで走ってきて、そっくりそのまま母親に通じる目で笑つた。手をのばすと、ますます母親似の顔をして、きまりわるそうに引っぱりあげられた。仁太のことをきこうとする先生ともしらず、松江は、じぶんひとりの氣づまりさからのがれようとでもするように、せっぱつまつた声で呼びかけた。

「せんせ」

「なあに」

「あの、あの、うちのお母さん、女の子うんだ」

「あらそう、おめでとう。なんて名前？」

「あの、まだ名前ないん。おとつい生まれたんじゃもん。あした、あさつて、しあさつて」

と、松江は三本の指をゆっくりと折り、

「六日むいざり（名付日）。こんど、わたしがすきな名前、考えるん」

「そう、もう考えついたので？」

「まだ。さっき考えよつたん」

松江はうれしそうにふつと笑い、

「せんせ」

と、いかにもこんどは別の話だというふうによびかけた。「はいはい。なんだかうれしそうね。なあに」

「あの、お母さんが起きられるようになったら、アルマイト

の弁当箱、買ってきてくれるん。ふたに百合ゆりの花の絵がついとる、べんと箱」

すうっとかすかな音をさせていきを吸すい、松江は顔いっぱいによるこびをみなぎらせた。

「あーら、いいこと。百合の花の絵がついとるの。ああ、赤ちゃんの名前もそれなの？」

すると松江は、恥はじらいとよろこびを、こんどはからだじゅうで示すかのように肩かたをくねらせて、

「まだ、わからんの」

「ふーん。わかりなさいよ。ユリちゃんにしなさい。ユリコ？ ユリエ？ 先生、ユリエのほうがすきだわ。ユリコはこのごろたくさんあるから」

松江はこっくりうなずいて、うれしそうに先生の顔を見あげた。松江の目がこんなにもやさしいのを、はじめて見たよ。うな気がして、先生はその長いまつ毛におおわれた黒い目に、じぶんの感情をそそいだ。仁太のことはもう、ひとまず流して、心はいつかなごんでいた。松江にとつてもまた、その数倍のよろこびだった。先生にいわなかったけれど、お昼の弁当のとき、松江は大きな父の弁当箱を、小ツルやミサ子から笑われたのである。それで、彼女はひとりみんなからはなれていたのだ。しかし今は、そのしょげた気持も朝露あさつゆをうけた夏草のように、元気をもりかえした。じぶんだけが、とくべつに先生にかまわれたよううれしきで、これはないしょにしておこうと思った。だにその日、帰り道で彼女はつい口に出してしまった。

「うちのねね、ユリエって名前つけるん」

「ユリエ？ ふうん、ユリコのほうが気がきいたら」

はねかえすように小ツルがいった。松江は胸をはって、「それでも、小石先生、ユリエのほうがめずらして、ええっていうた」

小ツルはわざととびあがって、

「へえ、なんで小石先生が。へえ！」

なにかをさぐりあてようともするような目で松江の顔のぞきこみ、

「あ、わかった」

ならんでいたミサ子をうしろの方へ引っぱって行って、こそこそささやいた。富士子、早苗、コトエとじゅんじゅんにその耳に口をよせ、

「なあ、そうじゃな」

おとなし組の三人は小ツルの言い分にさんせいできないことを、気弱きよわな無言であらわすばかりで、松江を孤立こりつさせようとした小ツルのたくらみはくずれてしまった。よく気のあうマスノが、今日きょうは母の店によつて、ここにはいないのが小ツルの弱さになっていた。彼女はみんなに、松江がひいきしてもらうために、ひとり小石先生にへつらったと聞いたのである。そのためにかえってじぶんから孤立した小ツルは、ひとりふきげんにだまりこんで、とつとつ先を歩いていった。みんなもそのあとからだまってついていった。

一つはなをまがったときである。前の小ツルがきゆうに立ちどまって海のほうをながめた。先にたつものにならう雁がんのように、みんなも同じほうを見た。小ツルが歩きだすとまた歩く。やがて、いつのまにかみんなの視線しせんは一つになって海

の上にそそがれ、歩くのを忘れてしまった。

はじめから小ツルは知っていたのであろうか。それともたつた今、みんなといっしょに気づいたのであろうか。静かな春の海を、一そうの漁船が早櫓でこぎわたっていた。手ぬぐいで、はちまきをしたはだかの男が二人、力いっぱいのかっこうで櫓を押している。二丁櫓のあとが、幅びろい櫓足をひいて、走るように対岸の町をさして遠ざかってゆくのだ。もうけんかどころでなかった。

なんじやろ？

だれのうちのできごとじやろう？

みんな目を見あわした。消え去りつつ新らしくひかれてゆく櫓足から、岬の村に大事件が突発したことだけがわかった。急病人にちがいない。船の胴の間にひろげたふとんが見られ、そこにだれかがねかされているとさっした。しかし、またたくまに船は遠ざかり、乗りこんでいる人の判別もつかなかった。まるでそれは、瞬間の夢のように、とぶ鳥のかげのようすぎた。だが、だれひとり夢と考えるものはいなかった。一年に一度か二年に一度、急病人を町の病院へ運んでゆく岬の村の大事件を、さかのぼって子どもたちは考えていた。かつて小石先生もこうして運ばれたのだ。怪我をしたか、急性の盲腸炎か。

なんじやろう？

だれぞ盲腸の人、おったかいや？

あとから追いついてきた男の子もいっしょにかたまつて評定した。女はだれも声をたてず、男の子がなにかいうたびにその顔に目をそそいだ。そんななかで松江はふと、今朝

家を出かけるときの母の顔を思い浮かべた。瞬間、黒いかげのさしたような不安にとらわれたが、そんなはずはないのだと、つよくうち消した。しかし、頭痛がすると顔をしかめ、手ぬぐいできつくきつくはちまきをした、その結び目のところの額によっていた、もりあがった皺を思い出すと、なんとなく払いきれぬ不安がせまってきた。はじめに、今日は父に休んでもらいたいといった母、しかし父は仕事を休むわけにはいかなかった。

「松江を休ませりや、ええ」

父が、そういうと、そんならええといい、松江にむかって、「学校、はじめてなのになア。だけれど、遊ばんともどつてくれなあ」

思いだして松江はどきどきしてきた。するといつのまにか足は、みんなの先を走りだしていた。ほかの子どもももつて走った。足がもつれるほど走りつづけて、ようやく岬の家並を見たときには、松江のひざはがくがくふるえ、肩と口とでいきをしていた。村のとつつきがよろずやであり、そのとなりのわが家に、おしめがひらひらしているのを見て、安心したのである。しかし、その安心で泣きそうになった彼女は、こんどは心臓がとまりそうになった。井戸ばたにいるのが母ではなく、よろずやのおばさんだと気がついたからだ。はずんだ石ころのように坂道をかけおりの松江は、わが家の敷居をまたぐなり、走ってきたそのままでの足のはこびで、母のねている納戸にとびこんだ。母はいなかった。

「お母さん……」

ひっそりとしていた。

「おかあ、さん」

泣き声になった。よろずやのほうから赤ん坊の泣くのが聞こえた。

「うわあ、わあ、おかあさーん」

力のかぎり大声で泣き叫ぶ松江の声は、空にも海にもひびけとばかりひろがっていった。

## 六 月夜の蟹

五年生の教室は川つぷちに新らしく建った校舎のつつきであった。川にむかった窓からのぞくと、枉のような形の、せまい三角地をはさんで、高い石垣は川床まで直角に築かれていた。危険防止の土手は地面から三尺ほどの高さでめぐらしてあったが、土手はあまり用をなさず、子どもらはわずかな遊び時間をもかってに石垣をつたって、川の中へおりていった。おもに男の子だった。川上に家は一軒もなく、ちろちろの水はきれいだっただ。山から流れてきてはじめて、ここで人の肌はだにふれる水は、おどろくほど、つめたく澄みきっていた。子どもらにとっては、ただ手足をふれているだけで、じゆうぶん満足のできる、こころよい感触であった。水はここではじめて人の手にふれ、せきとめられて濁った。だれがいだしたのか、鰻うなぎがいるという噂うわさがたつてから、子どもたちの熱意は川底に集まり、毎日土手の見物と川の漁師とのあいだで時ならぬやりとりがつづいた。川床の石をめぐっては、まだ一度もとれたことのない鰻をさがしているのだが、出てくるのは蟹かにばかりである。それでもけっこうおもしろいらし

く、漁師も見物もふえるばかりだった。くるぶしをかくしかねるほどの水量は、遊び場としても危険はなく、だから小石先生もだまって眺めていた。

「せんせ、ズガニ あげよか」

保護色ほごしきなのか泥色どろいろをして、足にあら毛のある蟹をつかまえて、うで一ぱいさし出したのは森岡正だった。

「いらん、そんなもん」

「たべられるのに、せんせ」

「いやだ、そんなもんたべたら、足や手にヒゲがはえるもの」

川底と土手からどつと笑い声がおこった。窓ぎわの先生ももちろん笑いこぼしたのだが、ついさっきまでの先生は、そんな笑いとは遠い気持で、窓の外にくりひろげられた風景を眺めていたのであった。川の中でも土手の上でも、岬の子どもらは知らず知らずかたまっていた。だが、そこに松江の姿は見る事ができない。その目に見えぬ姿が、ときどき先生の心を占領せんりょうしてしまうのだ。

母親がなくなつてから、松江は一度もこの教室に姿をあらわさなかった。窓ぎわの、前から三番目の松江の席は、もう二か月もからっぽのままである。入学の日のことを思いだして、百合の花の絵のついた弁当箱をみやげに松江の家をたずねたのは、彼女の母親がなくなつてからひと月ぐらいたつていた。ちょうど川本大工も家たくにいて、男泣きに泣きながら、赤ん坊が死なないかぎり、松江を学校にはやれぬといった。あまりに事情が明白めいはくなので、それでも松江を学校によこせとはいえず、だまって松江の顔かほをみた。小さな赤ん坊をおぶつたまま、父親のわきにちよこんとすわつて松江もだまってい

た。へんにまぶたのはれて見える顔は、頭のはたらきを失ったようにぼんやりしていた。その膝の上へ、「マツちゃん、これ、百合の花の弁当箱よ。あんたが学校にこられるようになったら、つかいなさいね」

あまりうれしそうにもせず、松江はこつくりをした。「早く、学校へこられるといいわね」

いってしまつて、はつとした。それは赤ん坊に早く死ぬということになるのだ。思わず赤くなつたが、松江たち父子には、はつきりひびかなかつたらしく、ただ感謝のまなざしでうけとられた。

まもなく、赤ん坊がなくなつたと聞き、松江のためにほつとしたのだが、松江はなかなか姿を見せなかつた。マスノヤコトエたちにようすをきいてもらちがあかず、先生はどうとう手紙をかいた。十日ほどまえになる。

——松江さん、赤ちゃんのユリエちゃんは、ほんとにかわいそうなことをしましたね。でももうそれはしかたがありませんから、心の中でかわいがつてあげることにして、あなたは元気をだしなさいね。学校へは、いつからこられますか。先生は、まい日マツちゃんのからっぽのせきを見つては、マツちゃんのことを考えています。早くこい　こい　マツちゃん。早くきて　みんなといっしょに、べんきょうしましょう。——

手紙は松江の家といちばん近いコトエにことづけた。しかしこの手紙が、松江にとってどれほど無理な注文であるかを

先生は知っていた。赤ん坊のユリエはいなくなつても、松江にはまだ弟妹が二人あつた。五年生になつたばかりの彼女は、幼い頭脳と小さなからだで、むりやり一家の主婦の役をうけもたされているのだ。どんなにそれがいやでも、ぬけだすことはできない。父親をはたらきに出すためには、小さな松江がかまどの下をたき、すすぎせんたくもせねばならぬ。ひよこのようにきょうだい三人よりあつて、父親の歸りをまつているだろうあわれな姿が目の前にちらつく。法律はこの幼い子どもを学校にかよわせることを義務づけてはいるが、そのために子どもを守る制度はないのだ。

翌日、コトエは先生の顔を見るなり報告した。

「先生、きのうマツちゃん家へ手紙をもつていったら、知らんよその小母さんがきとつた。マツちゃんおりますか、いうたら、おりませんいうたん。しかたがないから、これマツちゃんにわたして、いうて、その小母さんにたのんできたん」  
「そう、どうもありがとう。マツちゃんのお父さんは？」  
「知らん。見えなんだ。——その小母さん、おしろいつけて、きれい着物きとつた。マツちゃん家へ嫁にきたんとちがうかつて、小ツルさんがいうんで」

コトエはちよつとはにかみ笑いをした。「そうだと、マツちゃんも学校へこられていいけどね」

それからまた十日以上たつたが、松江は姿を見せない。手紙はよんだらうかと、ふと心にかげのさす思いで、窓の下を見ていたのだった。ズガニを三匹とつた正は、それをあき缶にいれて得々として石垣をのぼってきた。三角形の空地にある杏の木は夏にむかつて青々としげり、黒いかげを土手の上

におとしている。そのま下にかたまつて、岬組の女生徒たちはズガニの勇士を迎え、われがちにいった。

「タンコ、一ぴきくれなア」

「うちにも、くれなア」

「わたしにもな」

「やくそくど」

蟹は三匹なのに希望者は四人なのだ。正は考えながらあがつてきて、

「食うか、食わんのか」

みんなの顔を見まわした。食うものによろうと思ったのだ。

いち早く小ツルが、

「食う食う。月夜の蟹は、うまいもん」

それをきくと、正はにやりとし、

「うそつけえ、蟹がうまいんは、やみ夜のこつちや」

「うそつけえ、月夜じゃないか」

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹はやせて、うも（うまく）ないのに」

正が確信をもっていうと、小ツルもまげようとしな。同じように正の口まねで、

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹がうまいのに。ためしに食うてみる、みんなくれ」

「いや、こんな川の蟹でわかるかい。海の蟹じゃのうて」

それをきくと女組がわあわあさわぎたて、窓の先生にむかつて口ぐちにきいた。

「せんせ、月夜の蟹とやみ夜の蟹と、どっちがおいしいん？」

「せんせ月夜じゃなあ」

マスノや小ツルやミサ子たちだった。

「さあ、ねえ。やみ夜のように思うけど……」

男組がわあつときた。

「ほらみい、ほらみい」

こんどは先生は笑いながら、

「でも、月夜のような気もする……」

女組が両手をあげ、とびとびしてよろこんだ。そうしてさわぐことがおもしろく、だれもそれを本気にして考えてはいなかったのだが、正だけは熱心に先生を見あげ、

「馬鹿いうな先生！」

すると女組がまた、わあつときた。

「先生を馬鹿じゃとい」

「ほう、タンコは先生を馬鹿じゃとい」

正は頭をかき、みんなのしずまるのをまっつて、やっぱりしんけんに入った。

「ほたつて先生、それにやわけがあるんじやもん。月夜になるとな、蟹は馬鹿じゃせに、わがの影法師をお化けかと思つてびっくりして、やせるんじや。やみ夜になると、影法師がうつらんさかい、安心してみがつくんじやど。だから、月夜は蟹が網にかかっても逃がしてやるんじやないか。かすかすで、うまないもん。やみ夜までおくと、しこしこのみがついて、うまいんじや。ほんまじゃのに、せんせ。うそじゃ思うなら、ためしてみるとええ」

「じゃあ、みんなでためしましうね」

じょうだんにそういつて、その日はすんだのだが、翌々日、森岡正はほんとに月夜の蟹をもってきた。一時間目の算数が

はじまるまえ、ひょうたん籠をつき出したのである。

「せんせ、蟹。月夜の蟹。やせて、うもない月夜の蟹」

それは今朝とれたばかりで、まだ生きていた。がさごそと音がしている。みんな笑った。

「ほんとにもつてきたの。タンコさん」

先生も笑って、しかたなさそうに受けとった。蟹は、この期になってもまだじぶんの運命をなんとかして打開しようともいうように、せまい籠の中をがさごそ這いまわっていた。どういうわけか、二匹とも、大きな鋏を片方だけもぎとられたあわれな姿で、残った片方の鋏を上に向け、よらばはさむ構えで泡をふいている。

「かわいそうに、これ先生がたべるの？」

「うん、約束じゃもん」

「逃がしてやりましょうよ」

「いや、約束じゃもん」

正はうしろをふりむいて「なあ」とみんなのさんせいを求めた。男の子は手をたたいてよろこんだ。

「じゃあこうしましょう。あとで小使さんにこれをにてもらい、今日の理科の時間に研究しようじゃないの。それから、蟹っていう題で綴方も書いてくるの」

「はーい」

「はーい」

大さんせいだった。籠は窓ベリの柱の釘にかけられ、その時間中蟹はがさごその音を立てつつづけてみんなを笑わせた。

時間がすむと、先生はひょうたん籠をはずし、じぶんで小使室のほうへ歩いていった。小ツルとコトエが用ありげにつ

いてきて、

「せんせ」と呼びかけ、ふりむくのをまって、

「マツちゃんのこと」といった。

「マツちゃん？」

「はい。マツちゃん、ゆうべの船で、大阪へいったん」

「ええっ」

思わず立ちどまった先生の顔を見あげながら、コトエが、一生けんめいの顔で、

「しんるいの家へ、子にいったん」

「まあ」

「そいで、マツちゃん家、おっさんと男の子と残ったん」

「そう、マツちゃん、うれしそうだった？」

コトエは答えずに、かぶりをふった。小ツルがかわつて、

「マツちゃん、行かんいうて、はじめ、庭の口の柱に抱えついて泣いたん。マツちゃん家のお父さんがよわって、はじめはやさしげにすかしたけど、なかなかマツちゃんがはなれんので、あとは頭にげんこつかましたり、背中をどづいたりしたん。マツちゃん、おいおい泣いてみんなが弱つとった。よろずやのばあやんが、ようやとすかして、得心さしたけ

んど、みんなもらい泣きしよった。わたしも涙が出てきて弱った。途中まで、みんなと見おくっていったけど、マツちゃん一口もものいわなんだ。なあコトやん。そいで……」

きゆうにハンカチを顔にあてて、くっくつと泣きだした先生におどろいて、小ツルはだまった。いつのまにか早苗やマスノもよってきて、片手にひょうたん籠をもったまま、うつむいてハンカチを目にあてている先生を、うたてげに見てい

た。みんなの目にも、さそれれた涙がもりあがっていた。

そのあともしばらくは、窓ぎわの前から三番目の松江の席はあいたままおかれてあったが、あるとき、その、松江のたった一日すわった席に先生はだまって腰かけていた。そのあとすぐ席の組みかえがあつて、その列は男の子になった。それきり松江の噂は出なかつた。先生もきかず、生徒もいわず、松江からの便りもなかつた。もうみんなの心から、松江の姿は追いだされたのであろうか。別れのあいさつにもこず、どこかへいってしまった五年生の女の子。……

そして、もうすぐ六年生に進級するという三月はじめてあつた。春は目の前にきていながら珍らしく雪の降る中を、ひとバスおくれた大石先生は、学校前の停留所から傘もささずに走つて、職員室にとびこんだたん、異様な室内の空気に思わず立ちどまり、だれに話しかけようかというふうに十五人の先生たちを見まわした。みんな心配そうな、こわばつた顔をしていた。

「どうしたの？」

同僚の田村先生にきくと、しつ　というような顔で田村先生は奥まった校長室に、あごをふつた。そして小さな声で、  
「片岡先生が、警察にひっぱられた」

「えっ！」

田村先生はまた、しずかに、というふうにこまかく顔をふりながら、

「いま、警察がきてるの」

また校長室を目顔でおしえ、つい今のさつきまで片岡先生

の机をしらべていたのだとささやいた。全然、だれにもまだことの真相は分かつていないらしく、火鉢によりあつて、だまつていたが、始業のベルでようやく生きかえつたように、廊下へ出た。田村先生と肩をならべると、

「どうしたの」

まっさきに大石先生はきいた。

「あかだつていうの」

「あか？ どうして？」

「どうしてか、しらん」

「だつて、片岡先生があか？ どうして？」

「しらんわよ。わたしにきいたつて」

ちようど教室の前へきていた。笑つて別れはしたが、二人とも心にしこりは残つていた。まだなんにも知らないらしい生徒は、雪に勢いづいたのか、いつもより元氣に見えた。ここに立つと、すべての雑念を捨てねばならないのだが、教壇にたつて五年間、大石先生にとってこの時間ほど、永く感じたことはなかつた。一時間たつて職員室にもどると、みんな、ほつとした顔をしていた。

「警察、かえつたよ」

笑いながらいったのは、若い独身の師範出の男先生である。彼はつづけて、

「正直にやると馬鹿みるちゅうことだ」

「なんのこと、それ。もっと先生らしく……」

突つつかれて大石先生はいうのをやめた。突つついたのは田村先生だつた。

教頭が出てきての説明では、片岡先生のは、ただ参考人と

いうだけのことで、いま校長がもらいさげにいったから、すぐ帰ってくるだろうといった。問題の中心は片岡先生ではなく、近くの町の小学校の稲川いながわという教師が、受けもちの生徒に反戦思想を吹きこんだという、それだった。稲川先生が片岡先生とは師範学校の同級生だというので、一おうしらべられたのだが、なんの関係もないことがわかったというのである。つまり、証拠しょうこになるものが出てこなかったのだ。そのさがついている証拠品しょうこひんというのは、稲川先生が受けもっている六年生の文集『草の実』だというのである。それが、片岡先生の自宅にも、学校の机にもなかったのだ。

「あら、『草の実』なら見たことあるわ、わたし。でも、どうしてあれが、あかの証拠しょうこ」

大石先生はふしぎに思ってきたのだったが、教頭は笑って、

「だから、正直者が馬鹿みるんですよ。そんなこと警察に聞かれたら、大石先生だってあかにせられるよ」

「あら、へんなの。だってわたし、『草の実』の中の綴方つづりかたを、感心して、うちの組に読んで聞かしたりしたわ。『麦刈り』だの、『醤油屋の煙突』しょうゆや えんとつなんていうの、うまかった」

「あぶない、あぶない。あんたそれ（『草の実』）稲川くんにもらったの」

「ちがう。学校あておくってきたのを見たのよ」

教頭はきゆうにあわてた声で、

「それ、今どこにある？」

「わたしの教室に」

「とってきてください」

謄写版とうしゃばんの『草の実』は、すぐ火鉢ひばちにくべられた。まるで、ペスト菌きんでもまぶれついているかのように、あわてて焼かれた。茶色っぽい煙けむりが天井てんじょうにのぼり、細くあけたガラス戸のあいだから逃げていった。

「あ、焼かずに警察へ渡せばよかったかな。しかし、そして大石先生がひっぱられるな。ま、とにかく、われわれは忠君愛国でいこう」

教頭のことばが聞こえなかったように、大石先生はだまつて煙のゆくえを見ていた。

翌日の新聞は、稲川先生のことを大きな見出しで「純真なる魂たましいを蝕むしばむ赤い教師」と報じていた。それは田舎いなかの人びとの頭を玄翁げんのうでどやしたほどのおどろきであった。生徒の信望を集めていたという稲川先生は、一朝にして国賊こくぞくに転落てんらくさせられたのである。

「あ、こわい、こわい。沈香じんこうもたかず、屁へもこかずにいるんだな」

つぶやいたのは年とった次席きんどう訓導くんとうだった。ほかの先生はみな、意見も感想ものべようとはしなかった。そんななかでひとり大石先生は、大げさな新聞記事のなかの、わずか、四、五行のところから目がはなれなかった。そこには、稲川先生の教え子たちが、ひとり一つずつの卵をもちよって、寒い留置場りゅうちじょうの先生に差し入れしてくれと、警察へ押しかけたことが書かれていたのだ。

今日はもう出勤しゅつぎんした片岡先生はきゆうに英雄えいゆうにでもなったように、引っぱりだこだった。どうだった？ の質問しつもんに答えて、一日でげっそり頬ほおのおちた彼は、青いひげあとをなでな

から、

「いや、どうもこうも、いま考えるとあほらしいんじゃないかな、すんでのことにあかにならされるとこじゃった。稲川は、君が会合に出たのは四、五回じゃというがだの、小林多喜二の本をよんだらうとかって。ぼくは小林多喜二なんて名前もしらん、いうたら、この野郎、こないだ新聞に出たじゃないかって。いわれてみりゃあ、ほら、ついこないだ、そんなことが出ましたな。小説家で、警察で死んだ人のことが」（ほんとうは拷問で殺されたのだが、新聞には心臓まひで死んだと報じられた）

「ああ、いたいた。赤い小説家だ」

若い独身の先生がいった。

「そのプロレタリア何とかいう本を、たくさんとられとりました。あの稲川は師範しはんにいるときから本好きでしたからな」

その日国語の時間に、大石先生は冒険ぼうけんをこころみてみた。生徒たちはもう『草の実』とその先生のことを知っていたからだ。

「家で、新聞をとってる人？」

四十二人のうち三分の一ほどの手があがった。

「新聞をよんでる人？」

二、三人だった。

「あかって、なんのことか知ってる人？」

だれも手をあげない。顔を見あわせているのは、なんとなく知っているが、はっきり説明できないという顔だ。

「プロレタリアって、知ってる人？」

だれも知らない。

「資本家は？」

「はい」

ひとり手があがった。その子をさすと、

「金もちのこと」

「ふーん。ま、それでいいとして、じゃあね、労働者は？」

「はい」

「はい」

「はい」

ほとんどみんなの手があがった。身をもって知っており、自信をもって手があがるのは、労働者だけなのだ。大石先生にしても、そうであった。もしも生徒のだれかに、答えを求められたとしたら、先生はいったろう。

「先生にも、よくわからんのよ」と。

まだ五年生にはそれだけの力がなかったのだ。ところがすぐそのあと、このことについては、口にするのをとめられた。ただあれだけのことがどこからもれたのか、大石先生は校長によばれて注意されたのである。

「気をつけんと、こまりまっそ。うかつにものがいえんときじゃから」

校長とは、父の友人というとくべつの関係だから、それだけですんだらしい。だがこのことは、明かるい大石先生の顔をいつとなくかげらすものになった。たいして気にもとめていなかった『草の実』のことと同じく、消しがたいかげりをだんだんこくしていった。

六年生の秋の修学旅行は、時節じせつがらいつもの伊勢いせまいりを

とりやめて、近くの金毘羅ということにきまった。それでも行けない生徒がだいたいの働みにくくくべて儉約な田舎のことである。宿屋にはとまらず、三食分の弁当をもってゆくということで、ようやく父兄のさんせいを得た。それでも二組あわせて八十人の生徒のうち、行けるといふのは六割だった。ことに岬の村の子どもらときたら、ぎりぎりの日まできまらず、そのわけを、おたがいにあばきだしては、内情をぶちまけた。

「先生、ソんキはな、ねしょんべんが出るさかい、旅行に行けんので」

マスノがいう。

「だって、宿屋にはとまらんですよ。朝の船で出て、晩の船でもどつてくるのに」

「でも、朝の船四時だもん、船中でねるでしよう」

「ねるかしら、たった二時間よ。みな、ねるところでないでしように。それよりマスノさんは、どうしてゆかんの」

「風邪ひくといかんさかい」

「あれあれ、大事なひとり娘」

「そのかわり、旅行のお金、倍にして貯金してもらおうん」

「そうお、貯金はまたできるから、旅行にやってみて、いいなさいよ」

「でも、怪我するといかんさかい」

「あら、どうして。旅行すると、風邪ひいたり怪我したりするんなら、だれもいけないわ」

「みんな、やめたらええ」

「わあ、お話にならん」

先生はにが笑いをした。

「先生、ぼくはもう、金毘羅さんやこい、うちの網船で、三べんもいったから、いきません」

森岡正がそういつてきた。

「あらそう。でもみんなといくの、はじめてでしよう。いきなさいよ。あんたは網元だからこれからだつて毎年いくでしょうがね。先生いつとくから。修学旅行の金毘羅まいりが一ばんおもしろかった、とあとできつと思えますからね」

加部小ツルは、じぶんも行かないといいなながら、やはり行かない木下富士子のことを、こんなふうにいふた。

「せんせ、富士子さん家、借錢が山のようにあつて旅行どころじゃないん。あんな大きな家でも、もうすぐ借錢のかたとられてしまうん。家人中、もう、なんちや売るもんもないんで」

「そんなこと、いわんものよ」

かるく背中をたたくと、小ツルはぺろつと舌を出す。

「いやな子！」

そういうながら思いだすのは富士子の家だった。はじめて岬へ赴任したときでも、もう明日にも人手に渡りそうな噂だったその家は、蔵の白壁が北側だけごっそりはげていた。古い家に生まれた富士子は、いかにもその家柄を背負ったように落ちつきはらつていて、めつたに泣かず、めつたに笑わない少女だった。小ツルなどからあからさまなことをいわれでも、じろりと冷たい目で睨みかえす度胸は、だれにもまねのできないものだ。「くさつても鯛」という彼女のあだ名は、彼女の父の口ぐせからきており、彼女はそれに満足している

ところがみえた。

そこへゆくと小ツルなどはさっぱりしたもので、人のこともいうが、じぶんのことをいわれても、べつに気にとめないふうだった。一家そろってはたらき、そのはたらきを表看板にして裏も表もなかった。たとえば小ツルのあだ名は「目つり」といわれている。たいしたきずではないが、まぶたの上のおできのあとがひつつれていいるからだ。ふつうなら、ことに女の子は「目つり」などとなぶられれば泣きたくなるだろうが、小ツルはちがっていた。まるで人ごとのようにわだかまりのないようすで、

「目つり目つりと、やすやすいうてくれな。目つりも、なろうと思うてなれる目つりとちがうぞ」

それは彼女の母たちがそういつていたからであろう。旅行にゆけないわけをも、彼女はざつくばらんというのだ。

「わたしン家なあ先生、こないだ頼母子講をおとして、大きい船を買ったん。だから、倭約せんならんの。こんぴらまいりは、じぶんで金もうけするようになってから、いくことにきめた」

それで他人のふところも遠慮なくのぞきこんで、人のことはいうなといつても平気という。ミサ子が行かないのはよくばりだからだの、コトエや早苗はきょうだいが多くて、旅行どころでなからうとかと。

ところが前々日になると、旅行志望者はきゆうにふえて、岬ではマスノをのけてみんながゆくということになった。

そのきっかけは、だまりやの吉次が、山出しをしてもうけた貯金をおろして申しこみをしたことにあるようだった。吉

次がゆけば、どうしたってだまっていられないのがソソキであった。磯吉は、じぶんも豆腐や油あげを売り歩いてもらった歩金を貯金していたのだ。ソソキさえも行くとなると、どうしたって正や竹一がやめるわけにはゆかない。正も綱ひきで、もうけた貯金を思いだすし、竹一も卵を売ってためた金でゆくといいだした。倭約な岬の村の子どもらは、こんなことで貯金をおろすことを思いつかなかつたのだ。正など、おろさなくてもよいといわれながら、どうしてもおろすのだといつて、竹一といっしょにわざわざ郵便局へいったりした。

男の子のほうがそうなると、女の子のほうもだまっていられない。いちばん心配のないミサ子は、富士子をさそつた。

二人の母親たちが仲がよかつたからだ。螺鈿の硯箱が富士子には知らせずにミサ子の家へゆき、それで富士子はゆけることになった。二人のことがわかれると、じつとしていられなくなつたのは小ツルである。彼女はさつそくさわぎだした。

「ミイさんも富士子さんも旅行にいくウ。うちも貧乏質において、やってくれエ」

小ツルはほんとうにそういつて、地だんだふんで泣いた。そのために彼女の細い目はよけい細く、はれぼつたくなつた。小ツルの母親は、小ツルとそっくりの目を糸のようにして笑いだし、むつかしい問題を出した。

「ミイさんとこは金もちじゃし、富士子さんとこはおまえ、なんといつたつて庄屋じゃもん。あんな旦那衆のまねはできん。じゃがな、もしもコトやんが行くんなら、小ツもやってやる。一ぺんコトやんと相談してこい」

とうていコトエはゆくまいと思つてそういつたのであろう。

ところが、走っていった小ツルはにこにこしてもどってきた。はあはあ肩かたでいきをしながら、

「コトやん、いくいうた」

「ほんまかいや」

「ほんま、ばあやんがおってそういうたもん」

あまりのかんたんさに小ツルの母親はうたがいをもち、ききにいった。出しゃばりの小ツルがそんなふうにもっていったのではないかと思ったのである。

「うちの小ツが、しゃしゃり出たこといいにきたんじやないかえ」

さぐるようにいうと、漁師なみに陽ひやけしたコトエの母は、まっ白くみえる歯を見せて笑い、

「一生に一ぺんのことじゃ、やってやりましょいな、こんなときこそ。いつも下子したこの子守りばかりさして、苦労さしとるもん」

「そりや、うちの小ツも同じこっちゃ。しかし、なに着せてやるんぞな？」

「うちじゃあ、思いきって、セーラー買ってやろうと思う」

「はした金じゃ、買えまいがの」

「ま、そんなこといわんと、買ってやんなされ、下子したこも着るがいの」

「ふーん」

「早苗さんも、そうすることにしたぞな。小ツやんにもひとつ、ふんぱつしてあげるんじやな」

「そうかいの。早苗さんも、のう。そうなると、小ツもじつとしておれんはずじゃ。やれやれ。そんならひとつ、貧乏質ひんぼうしち

におこうか」

こないいきさつがあったのだ。ところが、当日になると、早苗は、風邪かぜぎみでゆけないといった。しかし早苗はのどが痛いのも、鼻がつまっていたのでもない。痛かったり、つまったりしたのは、お母さんの財布さいふの口のほうで、早苗のために売りにいった珊瑚さんごの玉のついたかんざしは思う値ぬで売れず、洋服を買うことができなかったのだ。人の足もとをみてからにと、早苗の母は、その古手屋（古物商）のことをいつまでもおこりながら、早苗にはやさしく、

「着物きて、いくか」

早苗が泣きそうな顔を見ると、

「姉ねえやんの、きれいな着物こしに腰こしあげして着ていくか」

「……………」

「おまえだけ着物きていくのがいやなら、やめとけ。そのかわり、洋服を買おうや。どうする？」

「……………」

早苗はぼろっと涙なみだをこぼし、くいしばった口もとをこまかくふるわせていた。二つのうちどちらをとってよいか判断はんだんがつかなかったのだ。しかし母親のこまって泣きそうな顔に気づくと、きゆうに早苗の決心はついた。

「旅行、やめる」

こないいきさつがあったとは、だれもしらず、修学旅行は六十三人の一団で出発した。男と女の先生が二人ずつで、もちろん大石先生も加わっていた。午前四時にのりこんだ船の中ではだれも眠ねむろうとする者はなく、がやがやのさわぎの中で、「こんぴらふねふね」を歌うものもいた。



びいてきたのだった。思わずのぞくと、髪を桃われにゆったひとりの少女が、ビラビラかんざしといっしょに造花のもみじを頭にかざり、赤い前かけに両手をくるむようにして、無心な顔で往来のほうを向いて立っていた。それはどうしても、大石先生として見のがせぬ姿であった。立ちどまった先生たちを客と見たのか、少女はさつきと同じ声で叫んだ。

「いらっしやーい」

それはもう、じぶんの声にさえ、いささかも疑問をもたない叫びであった。日本髪に、ませたぬき衣紋の変わった姿とはいえ、長いまつ毛はもう疑う余地もなかった。

「松江さん、あんた、マツちゃんでしょ」

はいってきた客に、いきなり話しかけられ、桃われの少女はいきをのんで一足さがった。

「大阪へいったんじゃなかったの。マツちゃん、ずっとここにいたの？」

のぞきこまれて松江はやっと思ひだしてもしたように、しくしく泣きだした。思わずその肩をかかえるようにして縄のれんの外につれ出すと、奥からあわただしい下駄の音といっしょに、おかみさんもとびだしてきた。

「どなたですか、だまってつれ出されたら、こまりますが」

うさんくさそうにいうのへ、松江ははじめて口をきき、おかみさんのうたがいを打ち消すように小声でいった。

「大石先生やないか、お母はん」

うどんはどうとう食べるひまがなかった。

## 七 羽ばたき

修学旅行から大石先生の健康はつまずいたようだった。三学期にはいってまもなくのこと、二十日近く学校を休んでいる大石先生の枕もとへ、ある朝一通のはがきがとどいた。

拝啓、先生の御病気はいかがですか。私は毎日、朝礼の時間になると、心配になります。大石先生がいないとせえがないと、小ツルさんや富士子さんもいっています。男子もそういっています。先生、早くよくなつて、早くきてください。岬組はみんな心配しています。小夜奈良。

岬組の生徒たちの真情にふれた思いで、ふと涙ぐんだ先生も、最後の小夜奈良で、思わずふきだした。早苗からだった。

「さよならを、ほら、こんなあて字がはやつてるんよ、お母さん」

朝食をはこんできた母親に見せると、

「字もうまいでないか、六年生にしちゃあ」

「そう、一ばんよくできるの。師範へいくつもりのようにけど、少しおとなしすぎる。あれで先生つとまるかな」

口ではなかなか意志表示をしない早苗のことを心配しているうと、

「だけど、おまえ、久子だって六年生ぐらいまでは口数のすくない、愛嬌のない子だったよ。それがまあ、このせつはどうして、口まめらしいもの」

「そうかしら、わたし、そんなに口八丁くちはつちよう?」

「だって、教師が口が重たかったらこまるでないか」

「そうよ。だからわたし、この山石早苗という子が、教壇きょうだんに立ってものがいえるかしらと、心配なの」

「じぶんのこと忘れて。久子だって人の前じゃろくに唱歌しょうかもうたえなかったじゃないか。それでもちゃんと、一人前いちにんまえになったもの」

「ふーん。そうだったわ。いま唱歌すきななの、もしかしたら子どものときの反動かな」

「ひとりっ子のはにかみもあつたらうがね。そのはがきの子もひとりっ子かい」

「ううん。六人ぐらいのまん中よ。姉さんは赤十字の看護婦かんごふだそうよ。じぶんは先生になりたいって、それも綴方つづりかたに書いてあるの。きいたって口ではいわないくせに、綴方だと、すごいこと書くのよ。これからは女も職業をもたなくて、うちのお母さんのように、つらい目をする、なんて、よっぽどつらい目を見てるらしいの」

「おまえと同じじゃないか」

「でもわたしは、小さいときからちゃんと人にもいってたわ。先生になる、先生になるって。山石早苗ときたら、何にもいやしない。いつでもみんなのうしろにかくれているみたいなくせに、書かせるとちゃんとしてるの」

「いろいろ、たちがあるよ。こうしてはがきをよこしたりするところ、なかなかうしろにかくれちゃいないから」

「そうなの。そして、小夜奈良なんだもの、おもしろい」

はがき一枚につりこまれて思わずすすんだ朝食だった。そ

のあと、まるで鏡にでも見入るようにそのはがきを見つめ、やがては子どもたちのことがつきつきと浮かんできた。川本松江はどうしたであろうか。

——てんぷら一丁ッ!

かん高に叫んでいた桃われの娘。棧橋前せんばし「しまや」という看板をおぼえてかえり、手紙を出してみたが、返事はこなかった。小学校四年生しか修おそめていない子どもには手紙をかくすべもわからなかったのだろうか。それとも本人の手に渡ったかどうかもあやしい……。あの夜、うさんくさそうに出てきたおかみさんも、事情がわかるとさすがにあいそよく、

「まあ、それはそれは。ようきておくれましたな。さ、先生、どうぞおかけなさんせ」

中へ招じいれ、せまい畳たたみの縁台えんたいに小さな座ぶとんを出してすすめたりした。しかし話をするのはおかみさんばかりで、松江はだまってつつ立っていた。いつのまにか男の生徒が五、六人やってきて、縄なわのれんの向こうに顔をならべているのを見ると、大石先生は立ちあがらずにいられたかったのだ。

「じゃあまたね。もうすぐ船がくるでしょうから」

いとまをつげたが、べつに見送りにもこなかった。許されなかったのであろう。わざとふりむきもせず、さっさと歩きだすと、ぞろぞろついてきた生徒たちは思い思いのことをいった。

「先生、だれかな、あの子?」

「先生、あのうどんやと一家いっけ(親類)かな?」

本校にはたった一日しか顔を出さなかった松江を、だれも松江と気づいていないのは、その中に岬みさの子どもがまじって

いなかったからであろう。へたにさそい出したりしなかったことを、松江のためによるこびながら、今でも一種のもどかしさで思いだされる松江であった。同じ年に生まれ、同じ土地に育ち、同じ学校に入学した同い年の子どもが、こんなにせまい輪の中でさえ、もうその境遇は格段の差があるのだ。母に死なれたということ、はかりしれぬ境遇の中にほうり出された松江のゆくすえはどうなるのであろうか。彼女といっしょに巣立った早苗たちは、もう未来への羽ばたきを、それぞれの環境のなかで支度している。将来への希望について書かせたとき、早苗は教師と書いていた。子どもらしく先生と書かずに、教師と書いたところに早苗の精いっぱいさがあり、甘つちよろいあこがれなどではないものを感じさせた。六年生ともなれば、みんなはもうエンゼルのように小さな羽を背中につけて、力いっぱい羽ばたいているのだ。

変わっているのは、マスノの志望であった。学芸会に「荒城の月」を独唱して全校をうならせたマスノは、ひまさえあれば歌をうたい、ますますうまくなっていた。歌にむかうとき彼女の頭脳は特別のはたらきをみせ、楽譜をみてひとりで歌った。田舎の子どもとしては、それはじつに珍らしいことだった。彼女の夢のゆきつくところは音楽学校であり、そのため彼女が女学校へゆくといった。

女学校組はマスノのほかにもサ子がいた。あまりできのよくないミサ子は、受験のための居残り勉強にいんうつな顔をしていた。彼女の頭は算数の原理を理解する力も、うのみにする記憶力にもかけていた。しかもそれをじぶんでよく知っている、無試験の裁縫学校にゆきたがった。だが彼女の母は

それを承知せず、毎日、彼女にいんうつな顔をさせた。なんとかして県立高女に入りたい彼女の母は、熱心に学校へきていた。その熱意で娘の脳みその構造が変わりでもするように。それでもミサ子は平気だった。

「わたしな、数字みただけで頭が痛うなるんで。県立の試験やこい、だれがうけりゃ。その日になつたら、わたし、病気になるってやる」

彼女は算数のために落第することを見こしているのだ。そこへゆくと、コトエはまるで反対である。家でだれにみてもらうというでもないのに、数の感覚はマスノの楽譜と同じだった。いつもコトエは満点であった。その他の学課も早苗にいいでよくできた。彼女ならば女学校も難なく入れるであろうに、コトエは六年きりでやめるといふ。あきらめているのか、うらやましそうでもないコトエに、たずねたことがある。「どうしても六年でやめるの?」

彼女はこっくりをした。

「学校、すきでしょ」

またうなづく。

「そんなら、高等科へ一年でもきたら?」

だまってうつぶいしている。

「先生が、家の人にたのんであげようか?」

するとコトエははじめて口をひらき、

「でも、もう、きまっとるん。約束したん」

さびしそうな微笑を浮かべていう。

「どんな約束? だれとしたの?」

「お母さんと。六年でやめるから、修学旅行もやってくれた

ん」

「あら、こまったわね。先生がたのみにいっても、その約束、やぶれん」

コトエはうなずき、

「やぶれん」とつぶやいた。そして、前歯をみせて泣き笑いのような顔をし、

「こんどは敏江としえが本校にくるんです。わたしが高等科へきたら、晩ごはんたくもんがないから、こんどはわたしが飯たき番になるんです」

「まあ、そんなら今ごろは四年生の敏江さんがごはんたき？」

「はい」

「お母さん、やっぱり漁にいくの、まい日？」

「はい、大かた毎日」

いつかコトエは綴つづりかた方に書いていた。

私は女に生まれて残念です。私が男の子でないのです、お父さんはいつもくやみます。私が男の子でないのです、漁についていけませんから、お母さんがかわりにゆきます。だからお母さんは、私のかわりに冬の寒い日も、夏の暑い日も沖おきにはたらきにいきます。私は大きくなったらお母さんに孝行つくしたいと思っています。

これなのだと、大石先生はさっした。まるで女に生まれたことをじぶんの責任でもあるように考えているコトエ。それがコトエを、何ごとにもえんりよぶかくさせているのだ。

だれがそう思わせたのかといってみてもまにあわぬ。コトエ

はもう六年生でやめることを、わが身の運命のよううけいれているのだ。

「でもねコトエさん——」

それはまちがっているのだといおうとしてやめた。感心ね、といおうとしてそれもやめた。気のどくねというのも口を出なかった。

「残念ですね」

それはいかにも適切てきせつなことばであったが、コトエはそれになぐさめられ、気持が明かなくなったらしい。少し反そつ歯ばの大きな前歯をよけいむぎだして、

「そのかわり、えいこともあるん。さらい年敏江が六年を卒業したら、こんどはわたしをお針屋はりやへやってくるん。そして十八になったら大阪へ奉公ほうこうにいつて、月給みんな、じぶんの着物買うん。うちのお母さんもそうしたん」

「そしてお嫁よめにゆくのか？」

コトエは一種のはにかみをみせて、ふふつと笑った。それはもうわが手では動かすことのできぬ運命でもあるように、彼女はそれに服従ふくじゆうしようとしている。そこにはもう、与えられる運命をさらりとうけようとする女の姿があった。二十はたちにもなれば、彼女はある日ハキトクの偽電報にせでんほう一本で奉公先から呼びかえされ、危篤きとくのはずの母たちの膳立ぜんだたてのまま、よくはたらく百ひゃくしやう姓せいか漁師の妻になるかもしれぬ。

彼女の母もそうであった。そして六人の子を生んだ。五人まで女であったために、それがじぶんひとりの責任であるかのように夫の前で気がねしていた。その気がねがコトエにもうつって、彼女もえんりよぶかい女になっていた。夫にした

がって毎日沖に出ている漁師の妻は、女とは思えぬほど陽にやけた顔をし、潮風にさらされて髪の毛は赤茶けてぼうぼうとしていた。しかもそれで不平不満はなかったかのよう、じぶんの歩いた道をまた娘に歩かせようとし、娘もそれをあたりまえの女の道とこころえていて。そこにはよんだ水が流れの清冽さをしらないような、古さだけがあった。正直いわずな貧しい漁師の一家にとつては、それが円満具足のかぎりなのだろうか、ひとりもどかしがる大石先生だった。さりとてコトエを高等科に進学させることで、貧しい漁師一家の考えが一新されるものではないと思うと、空を眺めてためいきをするよりなかった。

教師と生徒の関係が、これでよいのかと疑問をもつと、ここに出てくる答は、『草の実』の稲川先生であった。国賊にされ、刑務所につなされた稲川先生は、ときどき獄中から、蟻のようにこまかい字の手紙を教え子によせるということだったが、なんの変わったこともないありきたりの手紙も、生徒には読んで聞かされないと噂だった。そんなものであるうか。教室の中で、国定教科書を通してしか結びつくことをゆるされないそらぞらしい教師と生徒の関係、たとえ生徒のほうでかかって関をのりこえてこようと、上手に肩すかしをくわさねば、思いがけない落とし穴があることを知らねばならなかった。みんなの耳と目が知らず知らず人の秘密をうかがいさぐるようになっていた。しかしまた時には、別のことで思いがけないいたずらに引きずりこまれたりもする。病気のためしばらく休むといったとき、小ツルなど、胸もとに手を入れるような無遠慮さで、ぬけぬけといった。

「先生の病気、つわりですか？」

思わず赤くなると、やんやとはやすものもいた。子どものくせに、と思ったが、肩をすかさずに答えた。

「そうなの。ごめんさい。ごはん食べられないから、こんなにやせたんだもん、少し元気になってからくるわ」

そのときからの欠勤だった。休むと宣言したとき、だれよりも心配そうな顔をしたのがやはり早苗だったことなど思いだし、六年前の写真をとりだしてみた。十三枚焼きましをしておきながら、なんとなく渡しそびれてそのままになっている写真は、袋のまま写真ブックのあいだにはさまっていた。

あどけない顔をならべている中で、小ツルはやはりいちばん大人っぽかった。このときからずぬけて背も高い小ツルは、今ではみんなより二つほど年上に見えた。おかつばか横分けにしている中で、彼女ひとは支那の少女のように前髪をさげて、ひとり大人ぶっているのだ。マスノが岬の道づれでなくなつてから、彼女はひとりいばっているふうであった。高等科をおえると産婆学校にゆくのが目的なのも、おませな彼女にわりの興味をもたせたのかもしれない。

岬の女子組では、あとに富士子が一人いるが、彼女の方向だけはきまっていなかった。いよいよ、こんどこそ家屋敷が人手に渡るといふ噂も、卒業のさしせまった富士子の動きをきめられなくしているのだらうと思うと、コトエと同様、あなたまかせの運命が彼女を待ちうけていそうであわれだった。やせて血のけのない、白く粉のふいたような顔をした富士子は、いつも袖口に手をひっこめて、ふるえているように見えた。陰にこもつたような冷たい一重まぶたの目と、無口さだ

けが、かろうじて彼女の体面を保つてでもいるようだ。

そこへゆくと、男の子はいかにもはつらつとしている。

「ぼくは、中学だ」

竹一が肩をはるようにしていうと、正もまげずに、

「ぼくは高等科で、卒業したら兵隊にいくまで漁師だ。兵隊にいったら、下士官になって、曹長ぐらいになるから、おぼえとけ」

「あら、下士官……」

不自然にことばを切ったが、先生の気持の動きにはだれも気がつかなかった。月夜の蟹とやみ夜の蟹をわざわざもってきたような正が下士官志望は思いがけなかったのだが、彼にとっては大いにわけがあった。徴兵の三年を朝鮮の兵営で過ごし、除隊にならずにそのまま満州事変に出征した彼の長兄が、最近伍長になって帰ったことが正をそそのかしたのだ。

「下士官を志望したらな、曹長までは平ちゃらでなられるいうもん。下士官は月給もらえらるんど」

そこに出世の道を正は見つけたらしい。すると竹一も、まげずに声をはげまして、

「ぼくは幹部候補生になるもん。タンコに負けるかい。すぐに少尉じゃど」

吉次や磯吉がうらやましげな顔をしていた。竹一や正のように、さしてその日の暮しにはこまらぬ家庭の息子とはちがう吉次や磯吉が、戦争について、家でどんなことばをかわしているか知るよしもないが、だまっけていても、やがては彼らも同じように兵隊にとられてゆくのだ。その春（昭和八年）日本が国際連盟を脱退して、世界の仲間はずれになったとい

うことにどんな意味があるか、近くの町の学校の先生が牢獄につながれたことと、それがどんなつながりをもっているのか、それらのいっさいのことを知る自由をうばわれ、そのうばわれている事実さえ知らずに、田舎の隅々までゆきわたった好戦的な空気に包まれて、少年たちは英雄の夢を見ていた。

「どうしてそんな、軍人になりたいの？」

正にきくと、彼はそつちよくに答えた。

「ぼく、あととりじゃないもん。それに漁師よりよっぽど下士官のほうがえいもん」

「ふーん。竹一さんは？」

「ぼくはあととりじゃけんど、ぼくじゃって軍人のほうが米屋よりえいもん」

「そうお、そうかな。ま、よく考えなさいね」

うかつにもものいえない窮屈さを感じ、あとはだまって男の子の顔を見つめていた。正が、なにか感じたらしく、

「先生、軍人すかんの？」ときいた。

「うん、漁師や米屋のほうがすき」

「へえーん。どうして？」

「死ぬの、おしいもん」

「よわむしじゃなあ」

「そう、よわむし」

そのときのことを思いだすと、今もむしゃくしゃしてきた。これだけの話をとりかわしたことで、もう教頭に注意されたのである。

「大石先生、あかじゃと評判になつとりますよ。気をつけん

と」

——ああ、あかとは、いったいどんなことであろうか。この、なんにも知らないじぶんがあかとは——

寢床ねどこの中でいろいろ考えつづけていた大石先生は、茶の間にむかって呼びかけた。

「おかあ、さん、ちょっと」

「はいよ」

立ったつてはこずに襖越ふすまこしの返事は、火鉢ひばちのわきにうつむいた声であつた。

「ちょっと相談。きてよ」

足音につづいて襖ふすまがあくと、指ぬきをはめた手を見ながら、「わたし、つくづく先生いやんなつた。三月でやめよかしら」

「やめる？　なんでまた」

「やめて一文菓子屋いちもんかしやでもするほうがましよ。まい日まい日忠君愛国……」

「これッ」

「なんでお母さんは、わたしを教師なんぞにならしたの、ほんとに」

「ま、ひとのことにして、おまえだつてすすんでなつたじゃないか。お母さんの二の舞まいいふみたくないつて。まったく老眼鏡ろうがんきょうかけてまで、ひとさまの裁縫さいほうはしたくないよ」

「そのほうがまだましよ。一年から六年まで、わたしはわたしなりに一生けんめいやつたつもりよ。ところがどうでしょう。男の子おとこつたら半分以上軍人志望なんだもの、いやんなつた」

「とき世時よじせつ節せつじゃないか。お前が一文菓子屋になつて、戦争

が終るならよからうがなあ」

「よけい、いやだわたし。しかも、お母さんにこりもせず、船乗ふなのりのお婿むこさんもらつたりして、損こした。このごろみたいに防空演習ぼうくうえんしゅうばかりあると、船乗りの嫁よめさん、いのちぢぢめるわ。あらしでもないのに、どかーんとやられて未亡人みぼうじんなんて、ごめんだ。そいつて、今のうちに船乗りやめてもらおかしら。二人で百ひゃく姓しやうでもなんでもしてみせる。せつかく子どもが生まれるのに、わたしはわたしの子こにわたしの二の舞いふませたくないもん。やめてもいいわね」

早口はやぐちにならべたてるのを、にこにこ笑いながらお母さんは聞いていたが、やがて、幼わかい子どもでもたしなめるようになった。

「まるで、なんもかもひとのせいのようにいう子だよ、おまえは。すきできてもらった婿むこどのでないか。お母さんこそ、文句ぶんぐいいたかつたのに、あのとき。わたしの二の舞いふんだらどうしようと思つて。でも、久子が気に入りの人なら仕方がないとあきらめた。それを、なんじゃ、今さら」

「すきと船乗りはべつよ。とにかくわたし、先生はもういやですからね」

「ま、すきにしなされ。今は気が立たつてるんだから」

「気きなんか立たつていないわ」  
学校がっこうでとはだいぶちがう先生である。しかしそのわがままないいかたのなかには、人の命をいとおしむ気持があふれていた。

やがておちついてふたたび学校へかようようにはなつたが、新学しんがく期のふたをあけると大石先生はもう送りだされる人であ

った。惜しんだりうらやましがると同僚もいたが、とくに引きとめようとするのは、大石先生のことになんとなく目立ち、問題になってもいたからだ。それなら、どこに問題があるかときかれたら、だれひとりはずきりいえはしなかった。大石先生自身はもちろん知らなかった。しいていえば、生徒がよくなつくというようなことにあつたかもしれぬ。

その朝七百人の全校生徒の前に立った大石先生は、しばらくだまってみんなの顔を見まわした。だんだんぼやけてくる目に、新しい六年生の一ばんうしろに立つて、一心にこちらを見ている、背の高い仁太の顔がそれとわかると、思わず涙があふれ、用意していた別れのあいさつが出てこなかった。まるで仁太が総代でもあるように、仁太の顔にむかつておじぎをしたようなかたちで、壇をおりた。高等科の列の中から正や吉次や、小ツルや早苗のうるんだまなざしが一心にこちらをみつめているのを知つたのは、壇をおりてからだつた。お昼の休みに別棟にある早苗たちの教室のほうへゆくと、いち早く小ツルが見つつけて走ってきた。

「せんせ、どうしてやめたん？」

めずらしく泣きそうにいう小ツルのうしろから、早苗の目がぬれて立っていた。あんなに女学校女学校と、まっさきになつてさわいでいたマスノが、結局は高等科へ残つたというのに、その姿が見えないことについて、小ツルは例によつて尾ひれをつけていった。

「マアちゃんな先生、おばあさんとお父さんが反対して女学校いくの、やめたん。料理屋の娘が三味線というならきこえる（わかる）が、学校の歌うたいになつてもはじまらないわ

れて。マアちゃんやけおこして、ごはんも食わずに泣きよる。

——それから先生、ミサ子さんの学校は女学校とちがうんで。学園で。ミドリ学園ゆうたら、生徒は三十人ぐらいで、仕立屋に毛がはえたような学校じゃと。そんなら高等科のほうがよかつたのにな、先生」

思わず笑わせられた先生は、笑つたあとでたしなめた。

「そんなふうにもんじやないわ、小ツやん。それより、マアちゃんどうしたの？」

「ぶがわるいゆうて、休んどん」

「ふなんかわるないいうて、なぐさめてあげなさい、小ツやんも早苗さんも。それより、富士子さんどうした？」

「あ、それがなア、先生、びっくりぎょうてん、たぬきのちようちんじや」

小ツルは声を大きくし、見ひらいても大きくなりつこのない細い目を、無理にひらこうとして眉をつりあげ、

「兵庫へ行ったんで。試験休みのとき、うちの船で荷物といつしよに親子五人つんでいったん。ふとんと、あとは鍋や釜やばっかりの荷物。たんすも大昔のぬりのはげたん一つだけで、あとは行李じゃつた。富士子さんとこの人、みんな荒働きしたことないさかい、いまに乞食にでもならにやよかるがつて、みな心配しよつた。いんま、富士子さんらも芸者ぐらいに売られにやよかるがつて——」

じぶんとこの運賃、半分は売れのこりの道具ではらつたことまでしゃべりつづける小ツルの肩をかるくたいたいて、

「小ツルさん、あんたはね、いらんことを、すこし、しゃべりすぎない？ あんた産婆さんになるんでしょ。いい産婆さ

んは、あんまり人のことをいわないほうが、いいことよ、きつと。これね、先生のせんべつのことば。いい産婆さんになつてね」

さすがに小ツルはちよこんと肩をすくめ、

「はい、わかりました」

三日月の目で笑った。

「早苗さんも、いい先生になつてね。早苗さんはもっと、おしゃべりのほうがいいな。これも先生のおせんべつ」

肩をたたくと、早苗はこっくりしてだまって笑った。

「コトやんにあつたら、よろしくいってね。からだ大事にして、いい嫁さんになりなさいって。これおせんべつだつて」

小ツルはすかさず、

「先生も、よいお母さんになりますように、これおせんべつです」

ふざけて先生の肩をたたいた。小ツルはもうほとんど先生と同じ背の高さになつていた。

「はい、ありがとう」

思いきり声をあげて笑った。

高等科になつて、はじめて男女別組になつた教室には、正たちはいかなかった。男の子のほうへいって、とくべつに岬みさきの生徒だけに別れのあいさつをするのも気がすすまず、帰ることにした。

「タンコさんソソキさん、キッチンくんらに、よろしくね。

気がむいたら、遊びにきなさいっていってね」

「先生、わたしらは？」

小ツルはすぐあげ足をとる。

「もちろん、きてちようだい。こいっていわなくても、昔からあんたたちくるでしょう。あ、そうそう」

写真を出して一枚ずつ渡すと、小ツルはきやつきやつとひびきわたる声で笑い、とびとびしてよろこんだ。

その翌日、解ときはなたれたよろこびよりも、大事なものをぬきとられたようなさびしきにがっかりして、昼寝ひるねをしているところへ、思いがけず竹たけいちと磯吉いそきちがつれだつてやってきた。あまりに早いことづけの効目ききめにおどろきながら、みだれた髪かみを結むかいもせず迎えた。

「ま、よくきてくれたわね。さ、おあがんなさい」

二人は顔を見あわせ、やがて竹一がいった。

「つぎのバスで帰るんです。あと十分か十五分ぐらいだから、あがられんのです」

「あらそう。そのつぎにしたら？」

「そしたら、岬みさきへつぐのが暗くろくなる」

磯吉がきっぱりいった。どうやら道々さういう相談をしたらしい。

「あ、そうか。じゃあまつてて。先生おくつていくから、歩あきながら話わしましょう」

いそいで髪をなおしながら、

「竹一さん、中学いつから？」

「あさつてです」

その態度はもう、中学生だぞといわんばかりで、手には新しい帽子ぼうしをもつていた。磯吉のほうも見なれぬ鳥打帽とりうちぼうしを右手にもち、手織ており縞じまの着物ぎよの膝ひざのところを行儀ぎよよくおさえていた。

「磯吉さん、きのう学校休んだの？」

「いいえ、ぼくもう、学校へいかんです」

そして磯吉はきゆうにしゃちこばり、

「先生、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゅ」

膝をまげておじぎをした。

「あら、まだよ。いまいっしょにいきますよ」

泣き笑いしそうになるのをこらえながら、つれだつて出かけた。バスの乗場までは六分かかる。まん中になって歩きだすと、磯吉はすっぽりと頭を包んだ大きな鳥打帽の下から小さな顔をあおのけ、

「先生、ぼく、あしたの晩、大阪へ奉公にいきます。学校は主人が夜学へやつてくれます」

「あらま、ちっとも知らなかった。きゆうにきまったの？」

「はい」

「何屋さん？」

「質屋です」

「おやまあ、あんた質屋さんになるの？」

「いえ、質屋の番頭です。兵隊までつとめたら、番頭になれるといいました」

さつきから磯吉はずっと、よそゆきのことばで固くなっている。それをほぐすように、

「いい番頭さんになりなさいね。ときどき先生にお手紙くださいね。きのう、小ツやんに写真ことづけたでしょ。あのこときのこと思ひだして」

竹一も磯吉も笑った。

「これ、おせんべつ、はがきと切手なの」

もらいものの切手帖とはがきを新らしいタオルにそえて包んだのを磯吉に渡し、竹一にはノート二冊と鉛筆一ダースを祝った。

「藪入りなんかでもどつたときには、きつといらっしゃいね。

先生、みんなの大きくなるのが見たいんだから。なんしろ、あんたたちは先生の教えはじめの、そして教えじまいの生徒だもん。仲よくしましうね」

「はい」

磯吉だけが返事をした。

「竹一さんもよ」

「はい」

村のはずれの曲がり角にバスの姿が見えると、磯吉はもういちど帽子をとっていった。

「せんせ、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゅ」

いかにも、それは鸚鵡のようなきごちなさだった。いいおわるとすぐ帽子をかぶった。大人ものらしい鳥打帽は漫画のこどものようではあったが、似合っていた。新しい学生帽と二つならんで、バスのうしろの窓から手をふっていた二人を、見えなくなるまでおくと、ゆっくりと海べにおりてみた。静かな内海をへだてて、細長い岬の村はいつものとおり横たわっている。そこに人の子は育ち、羽ばたいている。

——ながながお世話になりました。そんならごきげんよろしゅ……

岬にむかつてつぶやいてみた。それはおかしさとかなしさ

と、あたたかさが同時にこみあげてくるような、そしてもっと含蓄のあることばであった。

## 八 七重八重

春とはいえ、寒さはまだ朝の空気の中に、鎌いたちのようなするどさでひそんでいて、日かげにいと足もとからふるえあがってくる。

K町のバスの停留所には、この早いのもう用たしをすましてきた客が二人、下りバスをまつていた。六十を二つ三つすぎたらしく見えるおじいさんと、三十前後の女客と。

「ううっ、さぶい！」

思わず出たうめき声のようにつぶやくおじいさんに、

「ほんとに」

と、女客は話しかけられもしないのに同意した。寒さは人間の心を寄りあわせるらしく、どちらからとなく親しさをみせあった。

「ほんとに、いつまでも寒いことですか」

「そうです。もう彼岸じゃというのに」

話しかけた若い女は、四角い包みを胸にかかえこむようにしながら、おじいさんの、むき出しのまま片腕にひっかけている粗末なランドセルに、親しいまなざしをおくり、

「お孫さんのですか？」

「はいな」

「わたしも、息子のを買ってきました」

胸の包みを見やりながら、

「今日売りだすというのを聞いて一番のバスで出かけたんですけど、昔のような品はもう一つもありませなんだ。こんな紙のじゃあ、一年こっきりでしょう」

おたがいの品物をなげくようにいうと、そうだというようにおじいさんは首をふり、

「ヤミなら、なんぼでもあるといな」

そして、はっはっと笑った。奥歯のないらしい口の中がまっくらに見えた。女は目をそらしながら、

「きょう日のように、なんでもかでもヤミヤミと、学校のカバンまでヤミじゃあ、こまりますな」

「銭さえありやあなんでもかでもあるそうな。甘いせんざいでも、ようかんでも、あるとこにや山のようにあるそうな」

そういつて歯のない口もとから、ほんとによだれをこぼしかけたところは、甘党らしい。口もとを手のひらでなでながら、

「ねえさん、あっちで待とうじゃないか。日向だけは夕ダじや」

そういつてさっさと反対側乗場の方へ道を横ぎった。ねえさんと呼ばれて思わずにやりとしながら、女客もあとを追った。——ねえさん、か。と、女客は心の中でいつてみて、背の高いおじいさんをふりあおぎ、笑いながらたずねた。

「おじいさん、どちらですか」

「わしか。わしや岩が鼻でさ」

「そうですか。わたしは一本松」

「ああ一本松なあ。あっこにや、わしの船乗り朋輩があつてな。もうとうの昔に死んだけど、大石嘉吉という名前じゃ

が、あんたらもう、知るまい」

それをきいたとたん、女客はとびあがるほどおどろいて、「あら、それ、わたしの父ですが」

こんどは、おじいさんが、ひらきなおるようなかつこうで、「ほう、こいつはめずらしい。そうかいな。今ごろ嘉吉つあん娘さんにあうとはなあ。そういや似たところがある」

「そうですか。父はわたしが三つのとき死にましたから、なんにもおぼえとりませんけど、小父さん、いつごろ父といっしよでしたの」

おじいさんを小父さんとあらためて呼んだのも、生きていれば父もこのぐらいの年配かと思っただからだ。

いうまでもなく、大石先生の、あれから八年目の姿である。船乗りの妻としてすごした八年間には、腹をたてて教職をひいたあの時とはくらべることもできないほど、世の中はいっそうはげしく変わっていた。日華事変がおこり、日独伊防共協定がむすばれ、国民精神総動員という名でおこなわれた運動は、寝言にも国の政治に口を出してはならぬことを感じさせた。戦争だけを見つめ、戦争だけを信じ、身も心も戦争の中へ投げこめと教えた。そしてそのように従わされた。不平や不満は腹の底へかくして、そしらぬ顔をしていないかぎり、世渡りはできなかつた。そんななかで大石先生は三人の子の母となっていた。長男の大吉、二男の並木、末っ子の八津。すっかり世の常の母親になっている証拠に、ねえさんとよばれた。だがよく見ると、目のかがやきの奥に、ただのねえさんでないものがかくれている。

「小父さん、もしよろしかったら、お茶でものみませんか」

停留所のわきの茶店をさしていった。この年よりから、父親をかぎだそうとしたのである。しかし年よりは、がんこに首をふり、

「いや、もうすぐにバスがきまつそ。ここでもろしいわい」年よりのほうもなんとなく、あらたまつた態度を見せていた。

「それで、嘉吉つあんの嫁さんは、おたっしやかな」

「はあ、おかげさまで」

と、いったが、年とつた母が、嫁さんと呼ばれたことと思わず笑顔になった。帰ればまずそれを母にいおうと思つた。

ちょうど上りバスが警笛とともに近づいてきた。上り客でないことをしめすように、急いで標識からはなれたが、バスは止まった。茶店の軒下に立って、おりる客の顔を、見るともななく見ていた。バスはすし詰めの満員で、おりてくるのは若い男ばかりだった。ほとんどみな、ここでおりるかと思うばかり、つぎからつぎへと出口にあらわれる若い顔をみているうち、ふと思いだしたのは、今日この町の公会堂で徴兵検査がとりおこなわれることだった。ああ、それかと思いいながら、若さにみちた個々の顔につきからつぎへと目をうつしていた。

「あつ、小石先生！」

思わずとびあがるほどの大声だった。ほとんど同時に先生も叫んだ。さそわれるような大声で、

「あらつ、仁太さん！」

そして、あとからあとからとつづいて出てくる顔に向かつて、

「あら あら あら みんないるの、まあ」

仁太につづいて磯吉、竹一、正、吉次と、かつての岬の少年たちはみんなそろった。

「先生、しばらくです」

東京の大学をあと一年という竹一は、細長くなった顔を、いかにも都会の風に吹かれてきたというようなようすで、まっさきにあいさつした。つづいて神戸の造船所ではたらいっている正が、これはいかにも労働者らしく鍛えられた面魂ながら、人のよい笑顔で頭をさげ、きまりわるげに耳のうしろをかいた。まっていたように磯吉が前に出てきて、

「先生、ごぶさたいたしまして」

少し心配なほど青白い顔に、じよさいない笑いを浮かべた。どこへもゆかず岬の村で山伐りや漁師をしている吉次は、あいかわらず借り猫のようなおとなしさで、みんなのうしろに控え、水ばなをすすりあげながらだまって頭をさげた。仁太ばかりはれいのおりの無遠慮さで、あいさつぬきだった。彼は父親を手つだつて石けん製造をしているという。経済的には一ばんゆとりがあるらしい仁太は、新調の国民服をきていた。

「先生、こないだ富士子に会った、富士子に」

じまんらしく富士子をかさねていう。しかし先生はわざとそれに乗らず、とりかこまれた青年の姿をおおぐようにして眺めまわした。八年の歳月は、小さな少年を見あげるばかりのたくましさで育てている。

「そう、検査だったの。もうね」

涙のしぜんとにじみだす目に五人の姿はぼやけた。いつまでそうもしておられぬと気づくと、きゆうに昔の先生ぶりに

もどり、

「さ、いってらっしゃい。そのうち、みんなで一度、先生とこへきてくれない」

それでいかにも男の子らしくあっさりと離れてゆくうしろ姿を、さまざまの思いで見おくりながら、久しぶりにじぶんの口で「先生」といったのが、なんとなく新鮮な感じで、うれしかった。

ふりかえると、年よりは茶店の横の日だまりに塵をよけてまっていた。日あたりのよい生垣の一角所に蕾をつけた山吹がむらがり、細い枝は蕾の重さでしなっている。その一枝を無造作に折りとり、年よりもまた若者たちを見おくりながら、小さい声で、

「えらいこっちゃ。あやつてにこにこしよる若いもんを、わざわざ鉄砲の玉の的にするんじゃないやあ」

「ほんとに」

「こんなこと、大きい声じゃいうこともできん。ゆうたらこれじゃ」

ランドセルをもったまま両手をうしろにまわし、さらに小声で、

「ほれ、治安維持法じゃ、ぶちこまれる」

歯のない口いきゆうに奥歯がはえたような気がするほど若がえった口調だった。治安維持法というものを、彼女はよく知らない。ただ『草の実』の稲川先生が、その治安維持法という法律に違反した行動のために、牢獄につながれ、まもなく出てきてからも復職はおろか、正当なあつかいもしていないということだけが、その法律とつないで考えられた。稲

川先生の母親は、まるで気がいのように息子をかばい、今では彼が前非を悔いあらためていると、会う人ごとに吹聴してまわるのにいそがしいという噂を聞いた。どこまでがほんとうなのか、ただ稲川先生はひとり養鶏をしながら世間はなれの生活をしていた。彼が世間をはなれたのではなく、世間が彼をよせつけけないのだ。彼の卵は、毒でもはいっているかのようにきらわれ、ひところは買手もなかった。時代は人を三匹の猿にならえと強いるのだ。口をふさぎ、目をつむり、耳をおさえていればよいというのだ。ところが今、目の前にいる年よりは目や耳をふたした猿の手をはぎとるようなことをいう。朋輩の娘だとはいえ、はじめて会った女に、なぜ心の奥を見せるようなことをいうのだろうか。

半分は警戒心もおきて、彼女は、それとなく話題をそらせた。

「ところで小父さん、わたしの父とは、いつごろの朋輩でしたの？」

にこっと笑った年よりはまた奥歯のないもとの表情にもどり、

「そうよなあ、十八か、九かな。二人とも大望をもってな。

あわよくば外国船に乗りこんで、メリケンへ渡ろうというんじや。シアトルにでも行ったとき、海にとびこんで泳ぎ渡ろうという算段よ」

「まあ。でも、昔はよくあったそうですね」

「あったとも。メリケンで一もうけしてというんじやが、じつをいうと、徴兵がいやでなあ。——今ならこれじや」

また手をうしろにまわして笑った。

「とうとう目的成就しなかったわけですか？」

「そういうわけじや。もつともそのころは、船に乗ったりさえしたら兵隊には行かないでもすんだからな。そのうち二人とも船乗りがすきになってな。同じ船乗りなら免状もちになろうというんで、これでも勉強したもんじや。学校へ行ったらんもんで、わしらは五年がかりでやっと乙一の運転手になったあ。嘉吉つあんのほうが、一年はよう試験に通ってな、わしも、なにくそと思うて、あくる年にとつたのに——」

そのとき朋輩は難船して行方不明となり、ついによるこんでもらえなかったというのだ。父の妻としての母からきくとはちがった父の姿、涙どころか微笑さえ浮かんで想像される若い日の父の姿、語る人の親愛感からであろうか、父ははつらつとした好ましい青年であったと知った。その父が徴兵をきらったということは初耳である。それについて一言もしない母は、父からそれをきかなかつたのであろうか。それとも例の猿になっていたのか、「嫁さん」と呼ばれたことととも母にきいてみようと考えながら、話はずきなかった。

「そして小父さん、いつごろまで船に乗っておいでたん？」

——息子は学校へやって苦労させずに船乗りにしてやろうと思うたら、船乗りはいやじやときやがる。商業学校にやって、銀行の支店に出とつたけれど、とられて、死んだ」

「とられてって、戦争ですか？」

「そういな」

「まあ」

「ノモハンさあ。これは、そいつのせがれので」

ランドセルは年よりの手で強くふられ、中のボール紙がかさこそと音をたてた。

——おたがいに、せがれをもつのは心配の種ですな。とおうとしてのみこんだ。

バスでは客がたてこんでいて並ぶことはできなかった。うしろの正面に席をとった大石先生は、じつと目をつぶっていた。思いだすのは、いまのさつき別れた教え子のうしろ姿である。けもののように素っ裸にされて検査官の前に立つ若者たち。兵隊墓に白木の墓標がふえるばかりのこのごろ、若者たちはそれを、じじやばばの墓よりも関心をもってはならない。いや、そうではない。大きな関心をよせてほめたたえ、そこへつづくことを名譽とせねばならないのだ。なんのために竹一は勉強し、だれのために磯吉は商人になろうとしていくのか。子どものころ下士官を志望した正は、軍艦と墓場をむすびつけて考えているだろうか。にこやかな表情の裏がわを見せてはならぬ心ゆるせぬ時世を、仁太ばかりはのんきそうに大声をあげていたが、仁太だとて、その心の奥に何もなはいとはいえない。

あんな小さな岬の村から出た今年徴兵適齢の五人の男子、おそらくみんな兵隊となつてどこかの果てへやられることだけはまちがいないのだ。無事帰ってくるものは幾人あるだろう。——もう一人人的資源をつくってこい……：：：そういつて一週間の休暇を出す軍隊というところ。生まされる女も、子どもの将来が、たとえ白木の墓標につづこうとも、あんじてはならないのだ。男も女もナムアミダブツで暮せということだろうか。どうしてものがれることのできない男のたどる

道。そして女はどうなるのか。あの組の七人の女の子の中で、ミサ子ひとりには苦勞をしていなかった。ミドリ学園から東京の花嫁学校にはいり、在学中に養子をむかえてすぐ子どもをうんだ。苦勞の多い時代に、これは別格である。風の強い冬の日に、ひとり日光室で日向ぼっこをしているような存在である。

そこへゆくと歌のすきなマスノは、きりきり舞いをするような苦勞をした。ただ歌いたいために有頂天になり、親にそむいて幾度か家出をした。無断で応じた地方新聞のコンクールに一等入選し、それが新聞に出たときが家出のはじめだった。そのたびにさがしだされ、連れもどされては、また出る。いつも歌がもとだった。歌をうたいたい歌のじょうずな娘が、なぜ歌をうたつてはいけないのだろう。三度目の家出のとき、彼女は芸者になつて出ようとしていたという。つれにいった母親に彼女は泣いてしがみつぎ、

「三味線なら、きこえるというたじやないかあ」

彼女の音楽へのはけ口はいつのまにか三味線のほうへ流れていったのだ。しかし、彼女の親たちは、そのよしあしはともかくとして、わが身は料理屋で芸者と近づきながら、娘を芸者にするわけにはゆかなかつた。マスノは今、その家出中に知りあつた年とつた男と結婚し、ようやく落ちつきをみせていた。今ではもう、年とつた母にかわつて、料理屋をきりもりしているという。たまに道で出あうと、なつかしがつてとびついてき、

「せんせ、わたし、いつも先生のこと、あいたくてエ」

涙までためてよろこぶ子どもっぽいしぐさなのに、じみ作

りな彼女は二十歳やそこらとは見えなかった。

高等科へもすすめず、嫁にもらわれることを将来の目的として女中奉公に出たコトエはどうなったであろうか。彼女は嫁にもらい手がつくまえに、病気になって帰ってきた。肺病であった。骨と皮にやせて、ただひとり物置きに寝ていると聞いてから、だいぶたつ。

高等科に進めなかったもうひとりの富士子については、いやな噂がたっていた。仁太が、富士子に会った、というのは、遊び女としての富士子との出あいにながなかった。仁太の顔にあらわれたものでそうとさとして、わざとときかえさなかったが、噂はとうの昔に小ツルから聞いていた。富士子は親に売られたというのだ。家具や衣類と同じように、今日の一家のいのちをつなぐために、富士子は売りはられたのだ。はたらくということを知らずに育った彼女が、たとえいやしい商売女にしろ、売られてそこではじめて人生というものを知ったとしたら、それは富士子のためによろこばねばなるまい。しかし人は富士子をさげすみ、おもしろおかしく噂をした。

今ではもう人の記憶から消えさったかに見える松江といい、今また富士子といい、どうして彼女たちがわらわれねばならないのか。しかし、大石先生の心の中だけでは、彼女たちも昔どおりいたわれ、あたためられていた。

——マツちゃんどうしてる？ 富士さんどうしてる？ ほんとにどうしてる？……

ときどき先生は呼びかけていた。

まっとうな道とはどうしても思えぬ富士子たちにくらべる

と、小ツルや早苗は健康そのものにみえた。優秀な成績で師範を出た早苗は、母校にのこる榮譽を得てその瞳はますますかがやき、大阪の産婆学校を、これも優等で卒業した小ツルとは、大石先生をまん中にして仲よしになっていた。実地の勉強をかさねたうえで、小ツルは郷里に帰るのが目的であった。わざとかうっかりか、手紙の宛名を大石小石先生と書いてきたりするのだが、人間の成長の過程のおもしろさは、母の予言どおりおしゃべりの小ツルを幾分控え目に、無口な早苗をときばき屋に育てていた。

二人はすくなくも年に二度、さそいあっておとずれてくる。たいてい夏の休暇と正月で、もってくる土産も同じだった。二人とも同じものというのではない。大阪の小ツルは粟おこしだし、早苗は高松で瓦せんべいときまっていた。年ごろで、ますます太る一方の小ツルの目は、全く糸のように細くなっていた。どちらかといえばきつい彼女の性格は、この目でやわらげられ、えへ、と笑うと、こちらもしょに声をあげて笑いたくなった。えへ、というとき、あとへドサン（土産）といって土産をおくのが小ツルのくせであった。

あるとき小ツルはいった。

「いつも同じドサンで芸がなさすぎると思うことありますけどね、じぶんの子どものときのことを思うと、このドサンでとびとびするほどうれしかったから」

早苗も同じように瓦せんべいの包みをさし出し、「阿呆の一つおぼえということがありますからね」

大吉は、ドサンの姉ちゃんと言んで歓迎し、その日は、一日笑いくらして別れるのがおきまりになっていた。それらの

ドサンも戦争がながびくにつれ、手に入りにくくなったらしく、昨今は商売物らしいガ―ゼをくれたり、早苗のほうはノ―トや鉛筆を、まだ学校でもない大吉のためにもってきたりするようになった。ようやく学齡がくれいにたつした大吉のためにランドセルを買いにいったの帰り、はからずも出あった教え子に刺激しげきされてか、もろもろの思い出は胸にあふれた。

一本松でございます。お降りのかたは……。

車掌しやうしょうの声に思わず立ちあがり、あわてて車内を走った。例の年よりに会釈えいせきもそこそこ、ステップに足をおろすと、いきなり大吉の声だった。

「母ちゃん」

濁りにごにそまぬかん高いその声は、すべての雑念をかなたに押しやっ飛ばさうとする。

「母ちゃん、ぼくもう、さつきからむかえにきとつたん」

いつもならば、ひとりでに笑えてくる、きれいにすんだその声が、今日は少しかなしかった。笑ってみせると大吉はすぐ甘えあまかかり、

「母ちゃん、なかなか、もどらんさかい、ぼく泣きそうになつた」

「そうかい」

「もう泣くかと思つたら、ブブーって鳴って、みたら母ちゃんが見えたん。手えふつたのに、母ちゃんこっち見ないんだもん」

「そうかい。ごめん。母ちゃんうっかりしとつた。大方おおかた、一本松忘れて、つつ走るとこじやつた」

「ふーん。なにうっかりしとつたん？」

それには答えず包みを渡すと、それが目的だといわぬばかりに、

「わあ、これ、ランドセルウ？　ちっちゃいな」

「ちっちゃくないよ。しよってごらん」

ちよとよかった。むしろ大きいぐらいだった。大吉はひとりでかけた。

「おばあ、ちやーん、ランドセルウ」

すつとんでゆきながら足もとのもどかしさを口に助けてもらうかのように、ゆく手のわが家へむかつて叫んだ。

肩かたをふって走ってゆくそのうしろ姿には、無心に明日へのびようとするけんめいさが感じられる。その可憐かれんなうしろ姿の行く手にまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろう。砲弾にうたれ、裂けてくだけて散る人の命というものを、惜おしみ悲しみ止どめることが、どうして、してはならないことなのだろう。治安ちあんを維持いじするとは、人の命を惜しみまもることではなく、人間の精神の自由をさえ、しばるといふのか……。

走り去る大吉のうしろ姿は、竹一や仁太や、正や吉次や、そしてあのととき同じバスをおりて公会堂へと歩いていった大ぜいの若者たちのうしろ姿にかさなりひろがってゆくように思えて、めいだった。今年小学校にあがるばかりの子の母でさえそれなのと思うと、何十万何百万の日本の母たちの心というものが、どこかのはきだめに、ちりあくたのように捨てられ、マッチ一本で灰にされているような思いがした。

お馬にのったへいたいさん  
てっぼうかついであるいてる  
トットコ トットコあるいてる  
へいたいさんは 大すぎだ

気ばりすぎて調子っぱずれになった歌が家の中から聞こえてくる。敷居をまたぐと、ランドセルの大吉を先頭に、並木と八津がしたがって、家の中をぐるぐるまわっていた。孫のそんな姿を、ただうれしそうに見ている母に、なんとなくあてつけがましく、大石先生はふきげんにいった。

「ああ、ああ、みんな兵隊すきなんだね。ほんとに。おばあちゃんにはわからんのかしら。男の子がないから。——でもそんなこつちやないと思う……」

そして

「大吉イ！」と、きつい声で呼んだ。口の中をかわかしたような顔をして大吉は突っ立ち、きよとんとしている。ハタキと羽子板を鉄砲にしている並木と八津がやめずに歌いつづけ、走りまわっているなかで、大吉のふしんがっている気持をしずめてやるように、いきなり背中の手をまわすと、ランドセルはロボットのような感触で、しかし急激なよろこびで動いた。長男のゆえにめったにうけることのない母の愛撫は、満六歳の男の子を勝利感に酔わせた。にこっと笑って何かいおうとすると、並木と八津に見つかった。

「わあっ」

押しよせてくるのを、同じようにわあっと叫びかえしながら、ひっくるめてかかえこみ、

「こんな、かわいい やつどもを、どうして ころして よいものか わあっ わあっ」

調子をとってゆさぶると、三つの口は同じようにして、わあっ わああ と合わせた。そこにどんな気持がひそんでいるかを知るにはあまりに幼い子どもたちだった。

春の徴兵適齢者たちは、報告書と照らしあわされて、品評会の菜っ葉や大根のようにその場で兵種がきめられ、やがて年の瀬がせまるころ、カンコの声におくられて入営するのが古いころからの慣わしであった。しかし、日ごとに広がってゆく戦線の逼迫は、そのわずかな時間的ゆとりさえもなくなり、入営はすぐに戦線につながっていた。船着き場の棧橋に建てられたアーチは、歓送迎門の額をかかげたまま、緑の杉の葉は焦茶色に変わってしまった。歓送歓迎のどよめきは年中たえまなく、そのすきまを声なき「凱旋兵士」の四角な、白い姿もまた潮風とともにこのアーチをくぐってもどつてきた。

日本じゅう、いたるところに建てられたこの緑の門を、数えきれぬほどたくさんの若者たちがぐりつづけて、やむことを知らぬような昭和十六年、戦線が太平洋にひろがったことで、カンコの声はいっそうはげしくなるばかりだった。天皇の名によって宣戦布告された十二月八日のそのずっとまえに、その年の入営者である仁太や吉次や磯吉たちは、もうすでに村にはいなかった。出発の日、いくばくかの饞別にそえて大石先生は、かつての日の写真をハガキ大に再製してもらっておくった。もう原板はなくなっていた。竹一のほかほ

ななくしていたので、よろこばれた。

「からだを、大事にしてね」

そして、いちだんと声をひそめ、

「名譽めいよの戦死など、しなさんな。生きてもどつてくるのよ」  
すると、聞いたものはまるで写真の昔にもどつたような素直さになり、磯吉などひそかに涙なみだぐんでいた。竹一はそつと横を向いて頭をさげた。吉次はだまっつてうつつむいた。正はかげのある笑顔をみせてうなずいた。仁太がひとり声に出して、  
「先生だいじょうぶ、勝つてもどつてくる」

それとて、仁太としてはひそめた声で「もどつてくる」というのをあたりをはばかりようにいった。もどるなどということは、もう考えてはならなくなつていたのだ。仁太はしかし、ほんとにそう思つていたのだろうか。まっ正直な彼には、おていさいや、ことばのふくみは通用しなかつたからだ。仁太だとて命の惜おしさについては、人後におちるはずがない。それを仁太ほど正直にいったものは、なかつたかもしれぬ。彼はかつての日、徴兵検査ちようへいけんさの係官かかりかんの前で、甲種合格！と宣言されたせつな、思わず叫さけんだという。

「しもたア！」

みんなが吹きだし、噂うわさはその日のうちにひろまつた。しかし仁太は、ふしぎとビンタもくわなかつたという。仁太のその間髪かんはつをいれぬことばは、あまりにも非常識ひじょうしきだったために、係官に正当に聞こえなかつたとしたら、思つたことをそのとおりいった仁太はよほどの果報者かほうものだ。みんなにわかつて溜飲りゆういんをさげたようなこの事件は、近ごろの珍談ちんだんとして大石先生の耳にもはいった。

その仁太は、ほんとうに勝つてもどれると思つたのだろうか。

ともあれ、出ていったまま一本のたよりもなく、その翌年も半ばすぎた。ミッドウエーの海戦は、海ぞいの村の人たちをことばのない不安とあきらめのうちに追いこんで、ひそかに「お百度」をふむ母などを出した。仁太や正は海軍に配置はいちされていた。平時へいじならば微笑びしょうでしか思いだせない仁太の水兵も、いったまま便りたよりがなかつた。

仁太はいま、どこであの愛すべき大声をあげているだろうか――。

ひとりを思うとき、かならずつづいて思いたすのは、いつもあのK町のバスの停留所で見た若者たちである。笑うと口の奥おくがくらく見えた年よりのことである。春寒はるむむの道ばたに、ただの日光をうけた蕾つぼみをふくらませていた山吹である。そうして、さらにさらに大きなかげで包つつんでしまふのは、いつのまにか軍用船となつて、どここの海を走っているかさえ分からぬ大吉たちの父親のことである。その不安を語りあうさえゆるされぬ軍国の妻や母たち、じぶんだけではないということ、人間の生活はこわされてもよいというのだろうか。じぶんだけではないことで、発言権を投げすてさせられているたぐさんの人たちが、もしも声をそろえたら。ああ、そんなことができるものか。たったひとりで口に出しても、あの奥歯のない年よりがいったように、うしろに手がまわる。

ただの日光をうけて、春寒はるむむの道ばたにふくらむ山吹は、それでも、花だけは咲かせたろうに。……

## 九 泣きみそ先生

海も空も地の上も戦火から解放された終戦翌年の四月四日、この日朝はやく、一本松の村をこぎだした一隻の伝馬船は、紺がすりのモンペ姿のひとりのやせて年とった小さな女を乗せて、岬みさきの村の方へ進んでいった。静かな海に靄もやはふかくたちこめていて、岬の村は夢のなかに浮かんているようにみえたが、やがてのぼりはじめた太陽に醒さまされるように、その細長い姿を、しだいにくつきりと、あらわしはじめた。

「あ、ようやくと晴れだした」

まだ十二、三と見える船頭せんとうは、小さなからだ全体を動かして櫓ろを押おしすすめながら、まだ遠い岬の村に眺ながめいった。目ばかりかがやいているようなその男の子に、同じように岬の村に目を見はっていた女は、いとおしむような声で話しかけた。

「岬、はじめてかい、大吉？」

みかけによらず、若い声である。

「うん、岬みさきなんぞ、用がなかったもん」

ふりかえりもせずに答えた。

「そうじゃな。お母さんでさえ、ずっとくることなかったもんなあ。岬というところは、そんなとこじゃ。あれから十八年！ ほう、ふた昔になる。お母さんも年よせたはずかいな」

なんとそれは、大石先生の、ひさしぶりの声と姿である。

今日、彼女は十三年ぶりの教職きょうしつにかえり、しかも今、ふたたび岬の村へ赴任ふにんするところなのだ。まえには自転車に乗っ

てさっそうとかよっていた先生も、今ではそんな若さがなくなったのであろうか。ところが、そうばかりではなかったのだ。戦争は自転車までも国民の生活からうばいさって、敗戦後半年のいま、自転車は買うに買えなかった。岬へ赴任ふにんときまったとき、はたと当惑とうわくしたのはそれだった。途中とちゆうまであったバスさえも、戦争中になくなったまま、いまだに開通してない。昔でさえも、自転車でかよった八キロの道は、歩いてかようしかなかった。とうてい、からだのつづくはずがないと考えて、母子三人岬へ移ろうかといいだしたとき、一言で反対したのが大吉だった。船でおくり迎えをするというのだ。船だとして借りるとすれば、相当の礼もしなければならぬ。

「雨がふったら、どうする？」

「そしたら、お父さんの合羽かっぱきる」

「風の強い日は、こまるでないか」

「……………」

「あ、心配しなさんな。風の日は歩いていくよ」

返事につまった大吉を、いそいで助けたものだ。あしたはあしたの風がふく。あしたのことまで考えてはいられなかった永ながい年月は、雨や風ぐらいでへこたれぬことだけは、教えてくれた。戦争は六人の家族を三人にしてしまったけれど、だからなお、残った三人はどうでも生きねばならないのだ。

大吉は六年生になっている。並木は四年だった。出がけに渚なみぎに立って母の初出勤はつしゅつぎんを見おくってくれた並木も、もうそろそろ学校へ出かける時分だと思っ一本松をふりかえった。久しぶりに沖おきからながめる一本松も、昔のままに見える。なん

の変化も見られぬその村にさえ、大きな変化をきたした戦争の果ての敗戦。

「大吉、つかれないかい。手に豆ができるかもしれんな」

「豆ができたって、すぐにかたまらア ぼく、平気だ」

「ありがたいな。でも、明日からもっと早目に出かけようか」「どうして?」

「先生の息子が、毎日ちこくじゃあ、なにがなんでもふがわるい。そのうちお母さんも、また自転車を手に入れる算段するけども」

「へっちらだあ。ちゃんと理由があると、叱られんもん。船で、おくったげる」

ゆっくりと、櫓についてからだを前後に動かしながら、得意の顔で笑った。

「うまいな、櫓押すの。やっぱり海べの子じゃな。いつのまにおぼえたん」

「ひとりで、おぼえるもん。六年生なら、だれじゃって押せる」

「そうかね。お母さんもおぼえよかな」

「そんなこと、ぼくがおくってあげる」

「そうそう、森岡正という子がいてな、一年生なのに、お母さんを舟でおくってあげるっていったことがあった。昔——。もう戦死したけんど」

「ふーん。教え子?」

「そう」

ふっと涙が出た。生きていれば、もうよい若者になったろうと、五年前、棧橋で別れたきりの正を思いだし、それが幼

い日のおもかげとかさなって浮かんできた。あれきりついに会うことのなかった正。そしてもう永久に会うことのできなくなつた教え子たち。はげしい戦いにたおれた今、幾人がふたたび故郷の土をふみ、ふたたび会えるかと思うと、心は暗くしずむ。

悪夢のように過ぎたここ五年間は、大石先生をも人なみのいたでと苦痛のすえに、小さな息子にいたわられながら、このへんぴな村へ赴任してこなければならぬ境遇に追いこんでいた。わが身に職のあることを、はじめて彼女は身にしみてありがたがった。教え子の早苗にすすめられて願書は出してみたものの、着てゆく着物さえもないほど、生活は窮迫の底をついていた。不如意な日々の暮しは人を老いさせ、彼女もまた四十という年よりも七八つもふけている。五十といつても、だれが疑がおう。

いっさいの人間らしさを犠牲にして人びとは生き、そして死んでいった。おどろきに見はつた目はなかなか閉じられず、閉じればまなじりを流れてやまぬ涙をかくして、何ものかに追いまわされているような毎日だった。しかも人間はそのことにさえいつしか慣れてしまつて、立ちどまり、ふりかえることを忘れ、心の奥までざらざらに荒らされたのだ。荒れまいとすれば、それは生きることをこぼむことにさえなつた。そのあわただしさは、戦いの終つた今日からまだ明日へもつづいていることを思わせた。戦争はけつして終つたとは思えぬことが多かった。

原爆の残虐さが、そのことばとしての意味だけで伝えられてはいたが、まだほんとうの惨状を知らされていなかつたあ

の年の八月十五日、ラジオの放送を聞くために学校へ召集された国民学校五年生の大吉は、敗戦の責任を小さなじぶんの肩にしよわされでもしたように、しよげかえって、うつむきがちに帰ってきた。

あれからたった半年、今日の前に櫓をこぐ可憐な姿は、深い感慨をそそるものがある。時代に順応する子どもというものを。半年前の彼のことを、いえば今は恥ずかしがる大吉なのを知っている。口には出さず、ひとり思いだすだけである。あの日、しよげている大吉の心を引いたててやるように笑顔で肩をだいてやり、

「なにをしよげてるんだよ。これからこそ子どもは子どもらしく勉強できるんじゃないか。さ、ごはんにしよ」

だが、いつもなら大さわぎの食事を見向きせず大吉はいつたのだ。

「お母さん、戦争、まけたんで。ラジオ聞かなんだん？」

彼は声まで悲壮にくもらしていった。

「聞いたよ。でも、とにかく戦争がすんでよかったじゃないの」

「まけても」

「うん、まけても。もうこれからは戦死する人はないもの。

生きてる人はもどってくる」

「一億玉砕でなかった！」

「そう。なかって、よかったな」

「お母さん、泣かんの、まけても？」

「うん」

「お母さんはうれしいん？」

なじるようにいった。

「バカいわんと！ 大吉はどうなんじゃい。うちのお父さんは戦死したんじゃないか。もうもどってこんのよ、大吉」

そのはげしい声にとびあがり、はじめて気がついたように大吉はまともに母を見つめた。しかし彼の心の目もそれだめたわけではなかった。彼としては、この一大事のときに、なおかつ、ごはんを食べようといった母をなじりたかったのだ。平和の日を知らぬ大吉、生まれたその夜も防空演習でまっくらだったと聞いている。燈火管制のなかで育ち、サイレンの音になれて育ち、真夏に綿入れの頭巾をもって通学した彼には、母がどうしてこうまで戦争を憎まねばならないのか、よくのみこめていなかった。どこの家にも、だれかが戦争にいつていて、若い者という若い者はほとんどいない村、それをあたりまえのことと考えていたのだ。学徒は動員され、女の子も勤労奉仕に出る。あらゆる神社の境内は枯葉一枚ものこさず清掃されていた。それが国民生活だと大吉たちは信じた。しかし、山へどんぐりを拾いにゆき、にがいパンを食べたことだけは、いやだった。小さな大吉の村からも幾人かの少年航空兵が出た。

——航空兵になったら、ぜんざいが腹いっぱい食える。

かわいそうに、年端もいかぬ少年の心を、腹いっぱいいげんざいでとらえ、航空兵をこころざした貧しい家の少年もいた。しかもそれで少年はもう英雄なのだ。貧しかりうと、そうでなかりうと、そこへ心を傾けないものは非国民でさえあった時世の動きは、親に無断で学徒兵をこころざせば、そしてそれがひとり息子であったりすれば英雄の価値はいっそう

高くなった。町の中学では、たくさんの少年志願兵のなかに親に無断のひとり息子が三人も出て、それが学校の榮譽となり、親たちの心を寒がらせた。そのとき、小さかった大吉は、じぶんの年の幼なさをなげくように、

「ああ、早くぼく、中学生になりたいな」

そして歌った。

ナーナツ ボータンハ サクラニイカーリ……

人のいのちを花になぞらえて、散ることだけが若人の究極の目的であり、つきぬ名誉であると教えられ、信じさせられていた子どもたちである。日本じゅうの男の子を、すくなくもその考えに近づけ、信じさせようと方向づけられた教育であった。校庭の隅で本を読む二宮金次郎までが、カンコの声でおくりだされてしまった。何百年来、朝夕を知らせ、非常を告げたお寺の鐘さえ鐘楼からおろされて戦争にいった。大吉たちがやたら悲壮がり、いのちを惜しまなくなったこともやむをえなかったのかもしれない。しかし大吉の母は、一度もそれにさんせいしなかった。

「なあああ大吉、お母さんはやっぱり大吉をただの人間になつてもらいたいと思うな。名誉の戦死なんて、一軒にひとりでたくさんじゃないか。死んだら、もとも子もありやしないもん。お母さんが一生けんめいに育ててきたのに、大吉アそない戦死したいの。お母さんが毎日なきの涙でくらししてもえいの？」

のぼせた顔にぬれ手ぬぐいをあててもやるようにいったが、熱のはげしさはぬれ手ぬぐいではききめがなかった。かえって大吉は母をさとしでもするように、

「そしたらお母さん、靖国の母になれんじゃないか」

これこそ君に忠であり親には孝だと信じているのだ。それでは話にならなかった。

「あああ、このうえまだ靖国の母にしたいの、このお母さんを。『靖国』は妻だけでたくさんでないか」

しかし大吉は、そういう母をひそかに恥じてさえたのだ。軍国の少年には面子があった。彼は、母のことを極力世間にかくした。大吉にすれば、母の言動はなんとなく気になった。ずっとまえにもこんなことがあった。病気休暇でかえっていた父に、ふたたび乗船命令が出たとき、大吉がまっさきにいきおいづいて、並木たちとさわぎたてると、母は眉根をよせて、おさえた声でいった。

「なんでしよう、この子。馬鹿かしら、ひとの気もしらずに」  
そういつて額をつんと指さきで押した。ひよろひよると倒れかかった大吉は、腹を立ててむしゃぶりついてきた。しかし、母の目に涙がこぼれそうなのを見ると、さすがにしゅんとしてしまった。父は笑って大吉をなぐさめた。

「いいよ、なあああ大吉。まだ八つや九つのおまえらまでがめそめそしたら、お父さんも助からんよ。さわげさわげ」

しかしそういわれるともう騒げなかった。すると、父は三人の子どもをいっしょくたに抱えて、

「みんな元気で、大きくなれよ。大吉も並木も八津も、大きくなって、おばあさんやお母さんを大事にしてあげるんだよ。それまでには戦争もすむだろうさ」

「えっ、戦争すむの。どうして？」

「こんな、病人まで引っぱりださにゃならんところみると——」

だが、大吉たちにはその意味はわからなかった。ただ、じぶんの家でも父が戦争にゆくということとで肩身がひろかったのだ。一家そろっているということが、子どもに肩身のせまい思いをさせるほど、どこの家庭も破壊されていたわけである。

戦死の公報がはいったのは、サイパンを失う少しまえだった。さすがの大吉もそのときは泣いた。肘を胸のほうにまげて、手首のところで涙をふいている大吉の肩を、母は抱きよせるようにして、

「しっかりしようね大吉、ほんとにしっかりしてよ大吉」

じぶんをもはげますようにいい、そのあと、小さな声で、どんなに父が家にいたがったかを語った。

「行ったら最後もう帰れないこと、分かってたんだもん。それなのに大吉たち、大さわぎしたろう。気のどくで、つらくてお母さん……」

しかし大吉はそのときでさえ、なぜ母はそんなことをいうのだらうと思った。父はよろこび勇んで出ていったのだといってもらいたかった。戦死は悲しいけれど、それだとて、父のない子はじぶんだけではないのにと、そのことのほうをあたりまえに考えていた。となり村のある家などでは、四人あった息子が四人とも戦死して、四つの名誉のしるしはその家の門にずらりとならんでいた。大吉たちは、どんなにか尊敬の目でそれをあおぎ見たことだらう。それは一種の羨望でさえあった。

その「戦死」の二字を浮かした細長く小さな門標は、やがて大吉の家へもどけられてきた。小さな二本の釘といっし

よに状袋に入れてあるのを手のひらにあけて、しばらくながめていた母は、そのまま状袋にもどして、火鉢の引出しにしまった。

「こんなもの、門にぶちつけて、なんのまじないになる。あほらしい」

怒ったような顔をしてつぶやき、しよきしよきと米を搗きはじめた。米はビール瓶の中で搗くのである。病気で寝ていたおばあさんのおかゆのためで、大吉たちの口には入らなかった。防空演習でころんで、それが病みつきになったおばあさんは、もうどうていなおる見こみもなく、寝ているだけだった。ころんだのがもとで病みついたのではなく、病みついていいたからころんだのだらう、と医者はいった。八十すぎて、髪もひげもまっ白となり村の医者は、なおる見こみのない病人のところへは、なかなかきてくれなかった。ほかにたのむ医者はなく、せめてうまいものでもと心がけたが、なかなか手にはいらなかった。海べにいて、魚さえ手に入らないのだ。魚はありませんか、卵はありませんか、一ぴきのめばる、一つの卵に三度も五度も頭をさげねば手に入らなかった。そのため母がひとりでかまわった。

そしてある日、名誉の門標はいつのまにか火鉢の引出しから、門の鴨居の正面に移っていた。母の留子に大吉がそこへ打ちつけたのである。小さな「名誉の門標」は、しかるべき位置に光っていた。「門標」の妻は、しばし立ちどまってそれを眺めた。ひとりの男の命とすりかえられた小さな「名誉」を。その名誉はこの家の門口をもちがざって、恥をしらぬようにふえていった。それをもっともほしがっていたのは、幼

い子どもだったのであろうか。

そうして、ついに迎えた八月十五日である。濁流が、どんな田舎の隅すみまでも押しよせたような騒ぎの中で、大吉たちの目がようやくやくさめかけたとしても、どうしてそれを笑うことができよう。笑われる毛ほどの原因も子どもにはない。

戦争の残飯をあさる人たちも多いなかへ、生きのこった兵隊が毎日のようにもどってきた。生きてはいてももどれぬ兵隊、永久に戻ることのない父や夫や息子や兄弟たちの、かつての名誉の門標は家々の門から、いつせいに姿を消し、ふたたび行方不明になった。それで戦争の責任をのがれでもしたかのように。

同じようにそれのなくなった家で、思いがけなく大吉は、妹の八津のとつぜん死をむかえねばならなかった。お婆さんがなくなつてから一年目のことである。わずか一年そこそこのうちに、三人の死を迎えたわけだった。父のように大海の泡沫のなかに消えて姿を見せない死、お婆あさんのように病みほうけて枯木のようになってたおれた生涯、昨日まで元気だったのが一夜のうちに夢のように消えてしまった、はかない八津の死。そのなかで八津の死はいちばんみんなを悲しませた。急性腸カタルだった。家のものにだまって、八津は青い柿の実をたべたのである。もうひと月もすればうれるのに、渋くはないということ、八津はそれを食べたのである。いっしょに食べた子もあるのに、八津だけが命をうばわれた。戦争はすんでいるけれど、八津はやっぱり戦争で殺されたのだ。――

母がそういったとき、大吉はきゆうには意味がのみこめな

かったが、だんだんわかってきた。近年、村の柿の木も、栗の木も、熟れるまで実がなっていたことがなかった。みんな待ちきれなかったのだ。

子どもらはいつも野に出て、茅花をたべ、いたどりをたべ、すいばをかじった。土のついたさつまをなまで食べた。みんな回虫がいるらしく、顔色がわるかった。そんななかで病気になるっても村に医者はいなかった。よくきく薬もなかった。医者も薬も戦争にいつていたのだ。お婆あさんの亡くなったときには、村の善法寺さんまでが出征して留守だった。近村の寺の坊さんは、戦死者でいそがしかった。終戦のちよつとまえに帰った善法寺さんは、帰るとすぐ供養にきてくれたが、今また、つづけて八津のためにお経をあげてもらうことになするなど、どうして考えられたろう。

お婆あさんは死ぬまえ、菩提寺にお坊さんもないことをくやんだが、小さな八津は坊さんのことなど考えたこともなかったろうと思うと、大吉は、声はりあげて経をよむ坊さんまでがうらめしかった。お母さんの話では、八津が生まれたときにお父さんはもう、からだのぐあいが少し悪くなりかけていて、船をおりて養生するつもりだったという。永年、世界の七つの海を渡りあるいたお父さんは、今はもう家に帰って休みたいといい、八つ目の港をわが家にたとえて、そのとき生まれた女の子に八津という名をつけた。しかし、病氣のお父さんもわが家の港に病氣をやしなうことができず、希望をかけた八津もまた死んでしまった。……

ものがとぼしく、八津のなきがらをおさめる箱も、材料をもってゆかねば作れないといわれ、少しこわれかけていた昔

のたんすでつくることにした。花までが人間の生活のなかから追いだされていた。大吉は並木と二人で墓場へゆき、ジャノメ草やおしろい花をとってきて八津をまつた。もとは花もたくさん作っていたという庭は、大吉たちの記憶のかぎり、大根やかぼちゃ畑で、せまい軒先にまでかぼちゃは植えられて、屋根にはわけていた。八津がなくなるとお母さんは、泣きながら軒のかぼちゃをひきちぎるようにしてぬきとった。うらなりの実が三つ四つ、長い蔓に引きずられて落ちてきた。そのなかの丸いのを盆にのせて仏壇に供えたのだったが、疫痢という噂が立って、だれもきてくれぬ通夜の枕もとにすわって、いつもの停電がすんだあと、お母さんはふと気がついたように、枕刀にした小さなゾーリンゲンの庖丁をとりあげ、いきなり、ぐさりとかぼちゃの横腹につき立てて、大吉たちをおどろかした。ゾーリンゲンはお父さんが買ってきたものだった。もしも、お母さんが笑っていなかったなら、日ごろ、こわいと教えられているゾーリンゲンである。大吉たちは悲鳴をあげたかもしれない。しかしお母さんは笑っていたのだ。泣きはらした顔の笑顔は、ちがった人のように見えただが、なんでもない、なんでもないという目の色は大吉たちを瞬間で安心させた。

「いいもの、八津にこしらえてやろう。こんなこと、お前たち、知らないだろ。八津はどうとう知らずじまいじゃ。かぼちゃはうらなりでも食べるものと、大吉ら、そう思ってるだろう。お母さんらの子どもときは、かぼちゃのうらなりは、子どものおもちゃ。ほら、これが窓——」

かぼちゃの横腹は四角にきりぬかれた。

「こつちは、丸窓といたしましょう。少々むつかしいな。手塩皿もってきて大吉、型をとるから。それとお盆もな。わた出すから」

大吉と並木は目を丸くしてみていた。できたのは提灯だった。窓に紙をはり、底に釘をさすとうそくの座もできた。配給のろうそくをとすど、いかにもそれは、八津のよろこびそうな提灯であった。悲しみを忘れて大吉はいった。

「お母さん、工作、満点じゃ」

小さな棺ができてくると、提灯は八津の顔のそばに入れてやった。八津がもって遊んでいた貝がらや紙人形もそばにおいて泣いた。おんおん泣きながら大吉は、八津がいつもほしの不親切をじぶんでせめながら、いままらためて、それを八津にやろうと思った。胸に組みあわせた手にもたせようとしたが、冷たい手はもうそれをうけとってはくれず、チエノワはすべって棺の底に落ちた。並木も泣きながら、彼もまた八津の目にふれぬようにしまいこんであつた大事な色紙をもつてきて、鶴や奴や風船を折って入れた。そんなものをもって、八津は死出の旅路についていたのである。

こういうことがあって、大石先生はきゆうにふけたのである。白髪さえもふえた。小さなからだはやせるとよけい小さくなり、腰でもまげると、おばあさんそっくりになった。小さいながらも大吉はどきんとし、こんどはお母さんが、どうかなるかとおんじた。人のいのちの尊さを、しみじみと味わえる年になってきた。

お母さんを大事にしてあげるんだぞ——

お父さんのことばが生きてきた。

「お母さん、薪はぼくがとってくる」

そういつて並木といっしょに山へゆく。

「お母さん、配給は、ぼく、学校の帰りにとってくるから」

遠い配給所へゆくのも彼の役になった。並木もまけてはいられなかった。

「お母さん、水やこい、みんなぼくがくんであげる」

涙もろくなつたお母さんは、

「きゆうにまあ、二人とも親孝行になつたなあ」

これほどよわり、いたわられている彼女が、ふたたび教職にもどれたのは、かげに早苗の尽力があつたのだ。早苗はいま、岬の本村の母校にいた。

「四十じゃあね。現職にいても老朽でやめてもらうところじやないか」

首をかしげる校長へ、再三頼んで、ようやく、岬ならばということで話がきまつた。しかもそれは大石先生のもつている教員としての資格ではなく、校長いちぞんで採決できる助教であつた。臨時教師なのだ。かわりがあれば、いつやめさせられるかもしれないのだ。早苗は、気のどくさにしおれて、それを報告した。大石先生の目は、異様にかがやいたのである。

「岬なら、願つたり、かなつたりよ。まえの借りがあるから」

条件の悪さなど気にもかけず、心の底からつきあげてくるような笑顔をした。そのとき大石先生の心には、忘れていた記憶が、いまひらく花のような新鮮さでよみがえっていたのだ。

だ。

せんせえ またおいでエ……

足がなかつたら またおいでエ……

やくそく したぞオ……

あのとき、じぶんのあとへ赴任していった老朽の後藤先生と同じように、じぶんもまた人にあわれまれているとも知らず、いや、大石先生がそれを知らぬはずはなかった。しかし幼い二人の子をかかえた未亡人の彼女もまた、やはり後藤先生と同じく、よろこんで岬へゆかねばならなかったのだ。しかし彼女はいま、近づいてくる岬の村の山々の、夜気に洗われた緑のつややかさを見ると、じぶんもまた若がえってくるような気がした。昔、洋服も自転車も人にさきがけた彼女も、今では白髪まじりの髪の毛を無造作にひつつめ、夫の着物の紺がすりで作ったモンペをつけ、小さな息子に舟でおくられている。昔のおもかげを強いてさがせば、きゆうにかがやきだした瞳の色と、若々しい声であるかもしれぬ。なまいきといわれてけなされた彼女の洋服や自転車は、それがきっかけになつてはやりだし、いまでは村に自転車に乗れぬ女はないほどだ。だが二十年近い歳月は、もうだれも若い日の彼女をおぼえてはいまい。

陸地がすうつとすべるように近づいたと思うと、船はもう渚ちかく寄っていた。ふなれな手つきで水棹を押す大吉と、見なれぬ大石先生に、昔どおり村の子どもはぞろぞろ集まつてきた。しかし、そのどの顔にもおぼえはなかった。永い年月の衣料の不足は、質素な岬の子どものうえにいっそう哀れにあらわれていて、若布のようにさけたパンツをはき、そ

のすきまから皮膚の見える男の子もいた。笑いかけるとおびえたような目をしたたり、無感動な表情のまま深い関心を見せて道をひらいた。珍らしげにじろじろ見るのは昔のままであった。その好奇の目にとりかこまれながら、大石先生ははずみをつけてとびおりた。石ころ一つにさえ昔のおもかげが残っているようなつかしき。少し船に酔ったらしく、頭がふらついた。ゆっくり歩いてみると、うしろにささやく声があった。

「たいがい、せんせど、あれ」

「ほんな、おじぎしてみるか、そしたらわかる」

思わずにととした顔の前へ、ばたばたと三、四人の小さな子どもが立ちふさがり、びよこんと頭をさげた。新学期に近づいて新入生におじぎがとり入れられたのをしおに、まだ学校ではないらしい小さな子らも、まねているのであろう。会釈をかえしながら、大石先生は涙ぐんでいた。まず、幼い子らに歓迎されたような気がしてうれしかったのだ。そっと目がしらを押しさえ、笑顔を見せた。あらためて見たが、すぐに思いたす顔はなかった。道ゆく人もそうだった。昔ながらの村の道を、なんと変わった人の姿であろう。とはいえ、そのなかでもっとも変わっているのがじぶんだとは、気がつかなかった。その大石先生を追いぬき追いぬき、三々五々と走ってゆく生徒たちもたえなかった。ちらりちらりと、こちらをぬすみ見しては走りさってゆく。それらの姿から、わざと目をそらしたのは、見られたくないものが光ってこぼれそうだったからだ。

ひとり帰ってゆく大吉のほうへ手をふってみせてから校門

をくぐった。古びてしまった枚舎の、八分どおりこわれたガラス窓をみたとき、瞬間、絶望的なものが満ち潮のように押しよせてきたが、昔のままの教室に、昔どおりに机と椅子を窓べりにおき、外を見ているうちに、背骨はしゃんとしてきた。なにもかも古いこの学校へ、新しいものがやってきはじめたからだ。古い帯芯らしい白い布で作った新しいかばん。まん中に一本縫い目のあるらしい銘仙のふろしき、そのなかには、新聞紙を折りたたんだだけのような、表紙のないそまつな教科書がはいっているだけでも、子どもたちは希望にもえる顔をしていた。昔どおりの岬の子の表情である。十八年という歳月を昨日のこのように思い、昨日につづく今日のような錯覚にさえとらわれた。大げさな始業式もなく教室にはいると、さすがにかあつと顔に血がのぼるのを感じた。それでも、なれた態度で出席をとった。若く、はりのある声で、「名前をよべば、大きな声でハイと返事をするのよ」と前おきをして、

「川崎覚さん」

「ハイ」

「加部芳男さん」

「ハイ」

「元気ね。みんな、はっきりお返事ができそうですね。加部芳男さんは、加部小ツルさんのきょうだい？」

いま、返事をほめたばかりなのに、もう加部芳男はだまってかぶりをふる。名前をよばれたときでなければ、ハイといえないもののように。しかし先生は笑顔をくずさずに、

「岡田文吉さん」

それは明らかに磯吉の兄の子どもとさっしられたが、盲目になつて除隊された磯吉につらい兄であると聞いて、ふれずにつきに移つた。

「山本克彦さん」

「ハイ」

「森岡五郎さん」

「ハイ」

正の顔が大きく浮かんで消えた。

「片桐マコトさん」

「ハイ」

「あんた、コトエさんの家の子」

マコトはぼかんとしていた。彼女は小さいときなくなつた姉のことなどおぼえていなかったのだ。それでもう、古いことはきくのはやめた。西口ミサ子の娘は、勝子といった。そのほか三人の女の子のなかに、赤い新しい洋服をきた川本千里という子どもがいた。がまんできず、休み時間のとき、それとなくきいてみた。

「ちさとさんのお父さん、大工さんね」

すると千里は、松江そっくりの黒い目を見はつて、

「ううん、大工さんは、おじいさん」

「あら、そうだったの」

しかし彼女の学籍簿には、彼女の父は大工とあつた。

「松江さんて、だあれ、姉さん？」

「ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくつてくれたん」

どきんとした。そして、この組に仁太やマスノがいらないことにほつとし、またそれで、さびしくもなつた。仁太がいれ

ば今ごろはもう、十人の新入生の家庭事情はさらけだされ、めいめいのよび名やあだ名までがわかつているだろう。その仁太や竹一や正は、そして、磯吉や松江や富士子は、と思うと、彼らのときと同様、いちずな信頼をみせて今日新しい門をくぐつてきた十人の一年生の顔が、一本松の下に集まつたことのある十二人の子どもの姿にかわつた。思わず窓の外を見ると、一本松は、昔のままの姿で立っている。そのそばに、二人の男の子が、じつと岬を見ているかもしれぬ、そんなことも知らぬげな姿である。

大石先生はそつと運動場の隅にゆき、ひそかに顔をとのえねばならなかつた。そういう彼女に、早くもあだ名ができていたのを、彼女はまだ知らずにいた。岬の村に仁太はやっぱりいたのである。だれが先生の指一本の動きから目をはなそう。

彼女のあだ名は、泣きみそ先生であつた。

## 十 ある晴れた日に

四月とはいってもまだ寒さの名残りは午後の浜べにみちていた。砂の上に足をなげだしていた大石先生は、思わず立ちあがって、はたはたとモンペのひざをはたいた。そのうしろ姿へ呼びかける者があつた。

「先生、そんなところで、なにしておいでますか？」

西口ミサ子であつた。

「まあ、ミサ子さん」

はでな花模様の銘仙の袷にきちんと帯つきで、ミサ子はこ

れからどこかへ出かけそうなかっこうに見えた。あらたまつたあいさつのあと、きゆうに親しさをみせて、

「先生にお目にかかりたくて、いま、学校へゆくところでしたの」

そういつてから、もう一度あらためて腰をこごめ、

「先生、このたびはまた、ふしぎな御縁で勝子がお世話になることになりました、どうぞよろしくお願ひもうします」

そのゆっくりとしたものいいぶりや、ていねいなものごしは、二十年前の彼女の母親にそっくりであった。しかしミサ子のほうは、さすがにあっさりとし地をみせ、なつかしそうにいった。

「先生がまた岬へおいでるといふのを聞いて、わたし、うれしくて涙が出ましたの。母子二代ですもの。こんなこと、めずらしいですわ、ほんとに。でも先生、お達者で、よろしかつたこと」

「おかげさまで。でも、みんな、いろんな苦勞をくぐりましたね」

それには答えず、あたりを見まわしながら、ミサ子は、  
「先生が怪我をしたところ、ここらへんでしたかしらん？」

なつかしそうな目をしていった。

「そう、でしたね。よく思いだしてくれました」

「そりやあ忘れませんわ。ときどき思いだしては早苗さんと話していたんですもの。わたしらのクラスは、岬に学校がひらかれていらいの変わりものの寄り集まりらしいって。ほら、あのとき、先生とこまで歩いていったりして」

そういいながら、はるかな一本松に目をやり、ちようど近

づいてきた大吉の舟を、げんな顔でながめた。舟はもう目の前にその姿を見せていたのだ。そのほうを、顔をふつてしめしながら、大石先生は笑顔でいった。

「ミサ子さん、あれ、わたしの息子ですよ。ああして毎日、わたしを迎えにきてくれますの」

それを聞くとミサ子は驚きを声に出し、

「まあ、そうですの。それで先生、浜においてたんですか」

もう三日つづいてる大吉の出迎えを、ミサ子はまだしらなかつたのだろうか。昔からあまり人とまじわらない家風をミサ子もうけついでいるようにみえた。しかし時代の風はミサ子の家の高い土塀をも忘れずにのりこえて、彼女の夫をもさらつていったまま、まだ帰らぬ兵隊のひとりに加えていた。

だが目の前に見るミサ子は、くつたくのない娘のように大らかに、昔ながらの人のよい顔つきでにこにこしていた。そまつなモンペから足をぬくことができないうる村人のなかで、彼女ひとりは大衆の若奥さまなのだ。永い年月の昨日から今日につづくさまざまな苦勞を、どのようにしてミサ子はくぐつてきたのであろうか。終戦のときには、西口家の倉庫にも、軍の物資が天井まで積みあげてあるという噂もあつたが、ほんとうかうそかさえも分からずすぎている。その物資でミサ子の家はふとついているという噂も聞いたが、ミサ子の顔つきには、そんな悪のかげりはみえなかつた。

今も彼女は大石先生と肩をならべ、大吉の舟のひとゆれごとに本気な心配をみせた。

「この風では、子どもには少し無理ですわ、先生。あ、あぶない！」

大吉の小さなからだは櫓といっしょに、海にのめりこみそうに見えたりする。そのけんめいさは、小舟とともに大吉の小さなからだにあふれていて、見ているこちらもしげんに力んできた。おかでは寒くさえあるのに、大吉は汗みずくにかがいがなかった。

「自転車は、もうお乗りにならないんですか、先生」

ミサ子から声をかけられてもそれに耳をかすゆとりもなく、大石先生は、波にもまれる大吉を小舟もろともたぐりよせたい気持で見えていた。ミサ子はかさねて、

「雨や風の日には、舟はむりでしょう。自転車のほうが、かえって早いでしょう」

「ええ、でもねミサ子さん、自転車なんて、きょう日は、買うに買えないでしょ。もしも買えるとしても、ふところが承知しない」

舟から目をはずさずにいいながら、以前でさえも月賦で買ったことを思い出した。それをしてくれた富子という自転車の娘は、そのあと結婚して東京でくらしていたのだが、はがきさえも品切れがちの戦争中に消息もたえ、そのままになっている。東京の本所で、やはり自転車をしていた彼女一家が、今どこにどうしているか、おそらくは三月九日の空襲で一家全滅したのではなからうかと考えだしたのは、戦争も終るころだった。わが身のあわただしい転変に心をうばわれ、人のことどころではなかったのだ。

K町の富子の父たちの住んでいた家はいまも自転車であるが、どんないきさつからか戦争中に店主がかわって、今では、いつ見ても貧相な感じの年とった男が一人、きたない古

自転車をいじくっているだけだった。そこでも、あととり息子が戦死したのだ。新しい自転車など、どこにあるのだろう。だのにミサ子は、しごくかんたんにいった。

「先生、もしも自転車をお買いになるんですたら、ご相談にのりますから」

それがどういう意味なのか問いかえすひまもなく、大吉の舟はきゆうに速力をまして近よってきた。陸地のかげにはいつて、風がなくなつたのである。大吉は母親にだけにとつと笑って、そつぽをむいてすましていた。水棹を押していつもするように舳を砂浜によせ、母親の乗りこむのをまっただき大吉の横顔に、いつもとちがったことばがいち早くとんできた。

「さ、坊ちゃん、つかまえてますから、あがってらっしゃい」  
おどろいてふりかえる大吉に、こんどは大石先生が笑いかけ、

「大吉、ひと休みしたら？」

だまってかぶりをふる大吉へ、かさねて、

「ちよっとお母さん、この方に、お話があるの。だから、そのあいだけ待って」

大吉はおこつたような顔をして、だまって浜にとびおりた。大きな石にも綱をとるのをまっただ、

「大吉も、ここへおいで」

大吉もいる前で、ミサ子に自転車の話をききたいと考えたのだが、もうそのことは忘れたような顔をしているミサ子と、大人っぽく膝をだいて沖を見ている大吉とはさまれて坐ると、どうしたのか自転車のことは口に出したくなくなった。

どんな方法がミサ子にあるというのか。いずれは、おたがいの心をよこすほかに道がないことがわかるように思えたからだ。重くるしくだまっっていると、それをほこすように、ミサ子は氣がるに話した。

「早苗さんと、こないだ話したんですけど、わたしらのクラスだけで、先生の歓迎会をしようかって」

「まあうれしいこと。でも、歓迎していただくほど、わたしは役立ちますかどうか。ここへくるまでは、昔のまま元気なつもりでしたのね、きてみると泣けて泣けて。泣けることばかりが思いだされましてね……」

そういつてもう涙ぐんでいる先生だった。それをいそいでぬぐい、思いさだめたようすを声のひびきにこめて、

「しかしまあ、うれしいことですわ。クラスの人、何人いますの」

「男が二人、女が三人。でも女のほうは小ツルさんやマツちゃんも呼ぼうと、いつてますの」

「マツちゃんて、川本松ちゃん？」

「え、ながいこと、どこにいたやらわからなかったのが、競争中にひよっこり、もどって来たんですの。ほんのちよっと居ただけで、またどこかへ出てゆきましたけど、マスノさんが所を知ってるそうです。マツちゃん、きれいになって先生、みちがえそうでしたわ」

そういいながら、ミサ子の顔に異様な表情が走ったのを、わざと気づかぬ顔で大石先生は、おとこの教室を思いだしていた。

——ちさとさんは、お父さんもおじいさんも大工さん？

——ううん、大工さんは、おじいさん。

——松江さんて、お姉さんでしょ？

——ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくってくれたん。

松江そっくりの黒い目をかがやかせた川本千里であった。それについて、ミサ子に聞く気はおこらなかつた。しかし、別のことできかずにいられないことがあつた。

「それよりか、富士子さんはどうしてるか、わかんないの？」

ミサ子は松江のときの表情をいつそう強めていった。

「あの人こそ先生、かいてもく行方不明ですわ。なんでも戦時中、成金さんにうけだされて出世したという噂もありましたけど、どうせ軍需会社でしょうから、今はどうなりましたか……」

知らず知らず顔色に出たミサ子の優越感にも、人生の裏道を歩いていられるらしい松江や富士子のことにも、わざと目をそらすかのように大石先生はうつぶむいて、じぶんにでもいつて聞かせるように小声でつぶやいた。

「生きていれば、また会うこともあるけれど、死んでしまっちゃあね」

ミサ子もしんみりと声をおとし、

「ほんとですわ。死んで花実が咲くものか……。コトやんが死んだのは、ごぞんじですか？」

だまっとうなずく先生に、ミサ子は立てつづけて、

「ソんキさんのことは？」

おなじようにうなずく先生の目に、またも涙はあふれていた。磯吉が失明して除隊になったと早苗から聞かされたとき、

早苗といっしょに声をあげて泣いた先生であったが、あのときの悲しみは今も心の底に沈もっている。早苗が見舞いにゆくと、磯吉は眼帯をした顔を膝につくほどうつむきこんで、いっそ死んだほうがよかったとしゃべっていたという。質屋の番頭をこころざしていた彼が、貧しい実家にかえっての立場を思うと死にたかった磯吉の気持もさっしられて、泣いたのだが、今はもうちがってきている。その後の磯吉が、町のおんまの弟子入りをしたと聞いて、彼のそのおそがけの出生にほっとしていたからだ。たった一つの生きる道、その暗黒の世界を磯吉はどのように生きぬくであろうか。しかしミサ子は、じぶんの心の貧しさをさらけ出すようなことをいった。

「生きてもどつても、めくらではこまりますわ。いっそ死ねばよかったのに」

だれが磯吉をめくらにしたか、そんなことはちつとも考えてはいないようなミサ子のことばに、もう逃げてはいられないとばかりに、大石先生はいった。

「そんなこと、ミサ子さん、そんなことどうしていえるの。せっかく立ちあがろうとしているのに。ことにあなたは同級生よ」

叱られた生徒のようにミサ子はあわてて、

「でも、でも、ソソキさんは、人にあうと死んだほうが、まじじゃ、まじじゃというふうですもの」

じぶんの考えの浅さに目がさめたように、あかい顔をしてミサ子はいった。

「それを、気のどくだと思わないの。死にたいということとは、

生きる道がほかにないということよ。かわいそうに。そう思わないの」

「そりゃ、思いますとも。かわいそうですわ。なんといいつつて同級生ですもの。でも、だいたい、わたしたちの組はふしあわせものが多いですね、先生。五人の男子のうち三人も戦死なんて、あるでしょうか」

ならんでいる大吉に肘をつつかれて、大石先生はきゆうに気がついてふりかえった。六、七人の子どもが、三人のすぐうしろを、みだれた半円形にとりまき、珍らしそうにながめていた。きゆうにふりむかれて子どもらは、飛びたつ鳥のようになりしたが、走りながら叫んだ。

泣きみそ せんせ

泣きみそ せんせ

すぐうしろの丘の共同墓地のほうへ逃げてゆくを見ると、「ちよつと、お墓へまいりましょうか、ミサ子さん」

「え、水もらっていきましよう」

ミサ子はすばやく立って小走りに、道ばたの家へはいっていった。まもなく手桶をもって出てくるのを見ると、大石先生はあごをしゃくって墓地のほうをしめしながら、

「すぐそこ、ほんの十分かそくらだから、まってね。お母さんの教え子の墓まいりなんだから。いっしょに、きてもいいけど」

なんとなく不服らしい大吉を残して、二人はならんで歩きだした。

「まあ、ノッポになったことミサ子さん。あんた一ばんちっちゃかったでしょう」

「いいえ、コトヤんです。そのつぎがわたしでしたわ。……先生、コトヤんの墓」

道ばたから二足三足はいったところに、そのコトエの墓はあった。雨風にさらされ、黒くなった小さな板屋根の下に、やはり黒っぽくよごれた小さな位牌いはいが一つ、まるで横になって寝ているように倒たおれていた。生前のコトエが使っていたのであるうか、浅い茶碗ちやわんに茶色の水が半ば干ひからびていた。それになみなみと水をそそぐそのわきで、大石先生は位牌いはいをとって胸にだいた。これだけが、かつてのコトエの存在を証明するものなのだ。俗名コトエ 行年二十二歳さい ああ、ここにこうして消えたいのちもある。医者も薬も、肉親にくしんのみとりさえもあきらめきって、たったひとり物置きすみの隅すみで、いつのまにか死んでいたというコトエ。——もしもわたしが男の子だったら役にたつのにというて、お父さんがくやむんです。わたしは男の子でなかったから、お母さんは苦労するん……

男に生まれなかったことをまるでじぶんや母親の責任であるかのようにいった六年生のコトエの顔が浮うかんでくる。希望どおり彼女が男に生まれていたとしても、今ごろは兵隊墓へいたいぼにいるかもしれないこの若いいのちを、遠慮えんりょもなく奪うばったのはだれた。また涙である。

「去いに。めずらしげにつきまわらんと」

そういったミサ子の叱しかり声で、子どもたちに見られていることに気がついた。

「ほんとに、いよいよ泣きみそ先生と、思うでしょう」

そういつて笑うと、ミサ子もいっしょに笑いながら、うながすように柄杓ひしゃくをさしだし、

「先生、さ、お水」

いつのまにまつつたのか、摘つみみ花のマユミの葉が茶碗ちやわんに青くもりあがっていた。兵隊墓は丘のてっぺんにあった。日清にっしん 日露にちろ 日華にっか と順じゆんをおって古びた石碑せきひにつづいて、新らしいのはほとんど白木しろきのままの朽くちたり、倒たおれているのもあった。そのなかで仁太や竹一や正のはまだ新らしくならんではない。混乱こんらんした世相はここにもあらわれて、罪つみもなく若い生命いのちをうばわれた彼らの墓前ぼぜんに、花をまつるさえ忘れていることがわかった。花立ての椿つばきはがらがらに枯かれて午後の陽ひをうけている。きちんと区画くわくした墓地ぼひに、墓標ぼひょうだけがならんでいる。新らしい兵隊墓。人びとの暮ぼしはそこへ石の墓を作って、せめてものなぐさめとする力も今はなくなっていることを、墓地は語っていた。

それは大石先生の心にもひびくことであった。同じような夫おつとの墓を思いながら、あちこちと春草の萌もえだした中からタンポポやスマレをつんで供そなえると、二人はだまって墓地を出た。もう泣いてはいなかったが、うしろからぞろぞろついてくる子どもたちは、あいかわらずよびかけた。

「泣きみそ せんせえ」

すると、うてばひびくように、大石先生はふりかえりざま答えた。

「はアイイ」

おどろいたのはミサ子だけではなかった。子どもたちのやんやと笑う声をうしろに、先生も笑いながら、まだ知らぬらしいミサ子にいった。

「どうも、へんなあだ名よ。こんどは泣きみそ先生らしい」

若葉の匂うような五月はじめのある朝、大石先生は校門をくぐるなり、一年生の西村勝子の待ちかまえていたらしい姿に出あった。

「せんせ、ゆうびん」

ほこらしげに勝子は、一通の手紙をつきだした。

——たまの日曜日、先生も御用の多いこととおさっしいたしますが、どうぞどうぞお出かけくださいませ。一度御相談してからと思つていますうちに、だんだん麦も色づきだしましたし、麦刈りが近づくにつれ、しだいにむつかしくなりそうでしたので、大いそぎ私たちでとりきめました。この日ですと、たいていの顔がそろうはずですから、どうぞお出かけくださいませよう……

例の歓迎会の案内である。ミサ子やマスノの名も書いてあったが、早苗の字なのは、はじめからわかつていた。読みおわつた先生は、勝子にむかつて、

「お母さんに、先生が、ハイっていつてたといつてね。わかつた。ただね、ハイっていえばいいの」

だが、ひとりじぶんの机の前に腰かけると、さて困つた、とつぶやいた。というのは、ちょうどその日にあたるあさつての日曜日には、少し早い八津の年忌をしようと、昨夜大吉たちと約束をしたばかりなのであつた。いなりずしでも作ろうというと、

「わあっ！」

と、並木はからだごと歓声をあげ、大吉は大吉で兄らしい思慮をめぐらしていたのである。

「お母さんお母さん。八津の墓にもいなりずしもつてやろう。ぼく、明日学校の帰りにK町のやみ市であぶらげ買ってきとく。お母さんお母さん、あぶらげ何枚たのむん？ お母さんお母さん、やみ市でも大豆持っていくん？ 何合もつていくん？ お母さんお母さん、ぼくたち、今日から瓶で米つこうか——」

こんなときやたらお母さんお母さんとかさねていうのが大吉のくせであつた。よほどうれしかったのだ。それをのばすといつたら、どんなにかがっかりするだろう。年忌とはいつても、時節がら客をまねいたり、坊さんをよんだりするのはない。いわば、いつも留守番をしたり、送り迎えをしてくれる二人の息子をなぐさめるための計画であり、久しぶりに月給をもらったひそかな心祝いでもあつた。それを八津に結びつけたのは、八津と同一年の一年生を見るにつけ、八津が思いだされたのもあつたし、ミサ子といつしよに仁太や竹一たちの墓へまいったりしたことからの思いつきでもあつたろう。

その日先生は家へ帰ってから、二人の子どもの前で話した。

「なあ、君たち、こまつたことができたんだけど、あさつての日曜日、お母さん用事ができたの。八津の年忌、一週間のばそうよ」

「いやっ」

「いやだっ」

二人はま正面から反対した。

「そう。こまったな。お母さんの昔の教え子がね、歓迎会をしてくれるというのよ。歓迎会って、よろこんでむかえてくれる会よ。それをことわるわけには、いかならう」

「いやっ。やくそくしたもん」

いつも留守番の時間の多い並木はひるまずそうだったが、大吉はさすがにだまっていた。しかしその顔には、失望の色がはつきりあらわれていた。

「そうよ。おまえたちと約束したから、お母さんこまったのよ。いっしょに考えてよ、並木も大吉も。お母さん、歓迎会にいかないで、家にいたほうがいい？」

そして、手紙をよんで聞かせた。二人ともだまりこんで、顔を見あわしていたが、やがて並木は、ぶつぶつとつぶやいた。

「やくそくしたもん。ぼくらのやくそくのほうが、さきだもん。民主主義だもん」

民主主義に思わずふきだしたお母さんは、それと同時に一つの考えがうかんだ。

「じゃあね、これはどう。八津の年忌はのばすのよ。そして、あさっては本村へピクニックとしようや。お母さんの会は水月楼よ。ほら、香川マスノって生徒のやってる料理屋。そこで、歓迎会がすむまで、おまえたち、本村の八幡さまや観音さんで遊ぶといい。お弁当は、波止場ででも食べなさいよ。そうだ、釣竿もってって波止場で釣りましたっておもしろいよ。どう？」

「わあっ、うまい、うまい」

並木がまたさきに歓声をあげ、大吉もさんせいらしい笑顔でうなずいた。

日曜日は朝から曇っていた。ふりさえしなければ、一本松から一里の道を歩くにはかえって都合がよかった。歓迎会は一時からというので、十二時にはもう家を出た。以前ならば十五分ほどバスにのればゆけた道を母子はてくてくと歩きだした。珍しいことなので、出あう人がきいた。

「おそろいで、どちらへ？」

返事をするのは並木ときまっていた。並木は少しふざけて、「びくにいくんだよ」

それはピクニックというのをわざとそういっただのであるが、だれにも通じなかった。ききかえすものもなかった。それがまた、二人にはおもしろくてたまらなかった。向こうから知った人の姿があらわれるたびに、

おそろいでどちらへ、

と二人は、母子三人だけに聞こえる声でいう。すると、かならずそれはあたった。

「おそろいでどちらへ？」

「びくにいくんです」

並木はすぐく早口でいって、とつとゆきすぎた。大吉がおっかけていって、二人はしゃがみこんで笑う。こんなことは生まれてはじめてなので、二人はうきうきしていた。何度も同じことをくりかえしているうち、もうたずねる人もなくなったところには、隣りの村にさしかかっていた。本村にさしかかり、お母さんと別れねばならぬ場所が近づくと、さすがのきょうだいも少し不安になったらしく、かわるがわるきい

た。

「お母さん、ぼくらのピクニックのほうが早くすんだらどうしよう」

「そしたら水月の下の浜で、石でも投げてあそんどればいい」

「本村の子が、いじめにきたら」

「ふん、並木もいじめかえしてやりやあいい」

「ぼくらより強かったら」

「かいしょうのない、大きな声でわあわあ泣くといい」

「笑われらア」

「そうだ、笑われらア。泣き声がきこえたら、お母さんも水月の二階から手たたいて笑ってやらア」

「お母さんの歓迎会、浜の見える部屋？」

「たぶんそうだろう？」

「そんなるときどき顔出して見てなあ」

「よしよし、見て、手をふってあげる」

「そしたら、大石先生とこの子じゃと想着て、いじめんかもしれん」

並木に大石先生といわれたことで、大石先生は思わずにやりとなり、

「へえ、大石先生か、このお母さんが……」

岬<sup>みさき</sup>では泣きみそ先生といわれているとおうとしてやめた。別れ道へきていた。そこから二人は八幡山へ登るのだった。十間<sup>じゅうけん</sup>ほどもいってから、大吉<sup>きち</sup>が叫んだ。

「お母さん、もしも、雨降ってきたら、どうしようか？」

「あんぽんたん。二人で考えなさい」

水月まではもうあと十分たらずだった。まっすぐに歩いて

ゆくと、向こうから早苗とミサ子が子どものように走ってきた。

「せんせえ」

ろくにあいさつもしないで、両側からとびついてきた。

「先生、めずらしい顔、だれだと思えます？」

早苗がいった。

「めずらしい顔？」

「一ぺんにあてたら、先生を信用するわ。な、ミサ子さん」

二人はいたずらっぽくうなずきあつて笑った。

「ああこわい。信用されるかされないか、二つに一つのわかれ道ね。さてと、めずらしいといわれると、さしずめ、ああ、ふたりでしょう、富士子さんに松ちゃん？」

「わあ、どうしよう！」

早苗は子どものように大声をあげた。

「あたったの？ 二人ともきたの？」

「いいえ、ひとりです。ひとり。あてて？ わあ、もうわかったわ。いるんだもん」

三人はもう水月の前にきていた。見ていたのか玄関<sup>げんかん</sup>には小ツルやマスノをまん中にして、ずらりとならんでいたのだ。

黒めがねの磯吉にどきんとしている大石先生の肩<sup>かた</sup>へ、いきなりしがみついて泣きだしたのは、マスノの横に立っていた、どことなくいきなつくりの着物をきた女だった。

「せんせ、わたし、松江です」

名のられるまえに、先生もすぐ気がついた。

「まあ、ほんとに珍<sup>めず</sup>らしい顔。よくきたわねマツちゃん、ほんとに、よく。ありがとうマツちゃん」

松江はしゃくりあげながら、

「マスノさんから手紙もらいましてな、こんなときをはずしたら、もう一生仲間はずれじゃと思うて、恥も外聞もかなくりすてとんできました。先生、かんにんしてください」

それこそ恥も外聞もなく泣きだすのを見ると、マスノはわざと衿がみをつかんでひきもどしながら、

「これ、マツちゃんひとりの先生じゃありませんぞ。さ、い

いかげんで、上へ行こう、行こう」

「ソソキさん、こんにはは」

先生は磯吉の手をとって、いっしょに階段をあがろうとした。

「あ、先生、しばらくでした」

「七年ぶりよ」

「そうですね。こんなざまになりましたな」

磯吉は、ちょっと立ちどまってうつむいたが、ひかれるままに先生とならんで階段をあがった。曇っていた空は少しずつ晴れまを見せ、ま昼の太陽は海の上にぎらぎらしていた。

二階はまぶしいほどのあかるさなのに、山に面した北窓のほうは今にも降ってきそうな、奇妙な空模様である。しかし、

八畳を二つぶつとおした部屋に、さわやかな風はみちわたり、肌はだにこころよくしみとおるようだった。

「ああら、眺めのいいこと、ちよつとオ……」

てすりのそばからだれにもなくふりかえった小ツルは、きゆうに口をおさえてあとをいわなかった。磯吉を見たからだ。そのまの悪さをすぐに、ふつ消すように、マスノはれい

のゆたかな声で、

「さ、先生はここ。ソソキさんとならんでください。こっちがわがマツちゃん。ふたりで先生をはさんで、堪能するだけしゃべりなさい。あとはめいめい勝手にすわって」

投げだすようにいってはいるが、それはじつに思いやりのあるマスノのはからいであることを、先生はひそかに感じた。

「先生を、一年生みんなでおむかえしたつもりですの。ですから……」

ちらりと磯吉を見て、マスノもやはりあとをいわずに床の間を指した。そこにはハガキ型の小さな額縁にいられた一本松の下の写真が、木彫の牛の置物にもたせかけてあった。早苗がkantandではあるが、あらたまつた挨拶をすますと、マスノはまたまを置かずに行った。

「さ、あとは無礼講でいきましようや。昔の一年生になったつもりで、なあ、ソソキ」

きちんとかしこまった磯吉はにこしながら膝をさすつた。さつきから、きつかけをつかもうとあせていた松江は、先生にすりよっていって、その顔をのぞきこむようにしながら、

「せんせ、千里がお世話になりました。それ聞いたときわたし、うれしいてうれしいて。わたしはもう先生の前に出られるような人間ではありませんけど、でも、たとえどんなにけいべつされても、わたしは先生のこと忘れませんでしたの。

あの弁当箱、今だって持ってますから、大事に」

そういって、ハンカチーフを目にあてるのを見ると、マスノはまぜかえすような調子で、

「なーにをマツちゃんがまた、酒ものまんうちひとりでくだまいてるの。やめた、やめたそんなぐち。先生の前でいうこっちゃないわ。昔にかえって！」

ぽんと松江の肩をたたくと、松江はむきになり、しかし陽気さをくわえていった。

「だから昔話してんのに。なあ先生、わたし、あの弁当箱、戦争中は防空壕にまで入れて守ったんですよ。あの弁当箱だけは、娘にもやりたくないんです。わたしの宝でしたの。今日もお米入れて持ってきたんですよ、先生」

それを聞くと吉次が、あ、そうじゃ、といいながら、国民服の脇ポケットから小さな布袋をとりだし、

「はい、うら（私）の食いぶに」

と、マスノのほうへさしだした。

「ええじゃないかキッチン、おまえ、魚もってきてくれたもんな」

どうやら今日の会はもちよりであるらしいと思いながら、大石先生はしきりに松江の話の聞こうとした。松江のいう弁当箱とはいったいなんだろうと思ったからだ。防空壕にまで入れた宝の弁当箱とは。

先生はあの百合の花の弁当箱のことをすっかり忘れていたのだった。

「マツちゃん、弁当箱って、なあに？」

小声できくと、松江はとんきような声を出し、

「あら、先生、忘れたんですか。そんならもってくる」

とんとん音立てて階段を走りおりにいったと思うと、やがてまたとんとんかけあがってきた松江は、みんなの前に、か

らの弁当箱を、赤ん坊のするあるまいあるまいでしてみせ、「どうぞすこれ、わたしが五年生になったとき先生にもらったんですよ皆さん。どうです、どうです」

わあと歓声があがり、

「先生、見そこないました。先生がマツちゃんだけにそんなひいきをしたの、知らなんだ、しらなんだ」

マスノの抗議にまた笑声があがった。しかし、先生は涙ぐんでそれを見ていた。

見せられて思いだしたその弁当箱に、いちども弁当をつめて学校へはこなかつた松江のことが、修学旅行のとき、棧橋前の小料理屋で、てんぷらうどん一丁と叫んでいた松江の姿が、久しぶりに生きて動いて、いま目の前にいる松江とむすびつこうとしている。かわいそうだった松江、そのかわいそうさをくぐってきたことをじぶんの恥のように卑下しているような松江……。

ぼつぼつ料理が運ばれ出すと、松江はいち早く立ちあがった。ビールとサイダーを両手にもって、なれた手つきでついでまわる。それを見さだめてからマスノがいった。

「さ、先生のために、乾杯！」

マスノはまっさきにコップを干した。松江がつぐのをつけて干してから、大きなためいきをし、

「ああ、ここに仁太やタンコがおったらなあ。そしたらもういうことないですな先生。ソankyにタンコにキッチンに仁太と、人の好いのがそろったのに。竹一じゃとて、上の学校へいきだしてからは少しすましとったけど、人間はよかった。わたしらの組、お人好しばかりじゃないですか。それが、

男はみんなろくでもない目にあい、女は海千山千になってしまった。小ツやんや早苗さんじゃとて、やっぱり海千山千よ。ただその筆頭が、わたしとマツちゃんかな。でもやっぱり、人はわるうないですよ。苦労しただけ、もの分かりもええつもりです。ミイさんのような賢夫人や、小ツやんや早苗さんのオールド・ミスのおえら方にはできませんことも、わたしはするもん。なあマツちゃん、大いにやろう」

そういつて松江のコップにビールをついだ。ビールをのんでいるのは二人だけなのだ。小ツルははじめから磯吉のそばにすわりこんで、いちいち食べるものの世話役をしているし、松江は松江で、ここがじぶんの持場だというように、小まめに立ったりすわったりして料理をはこんでいた。昔ながらのおとなしきで、だまってるんだら食ったりしている吉次とやらんで、早苗はふきだしながら、先生のほうを見、

「な先生、そう思いませんか。こういうところに出ると一ばん役に立たんのは学校の先生だと」

肩をすくめて笑うと、

「わたしこそ」

と、ミサ子もじもじしたので、そこで笑いが渦まいた。だいぶ酔って来たマスノは、磯吉のそばによってきて、コップを手ににぎらせ、

「さあ、ソソキ、あんまになるおまえのために、も一ぱいいこう」

気がつくくと、磯吉ははじめから膝もくずさず、きちょうめんにかしこまっていた。

「ソソキさん、みんな行儀わるいのよ。あんたももっとらく

にすわったら」

大石先生にそういわれると、磯吉は少しななめにまげた首のうしろに手をやり、

「いやあ先生、このほうがじつは、らくなんです」

質屋の番頭が目的だった彼の十代の日の膝の苦行はもう身につけてしまっているというのだ。彼はいま、三十に近くなつて、こんどは腕をかためねばならないのだ。もうすでにかたまつた彼の腕がどこまで、あんまとして成就できるか。しかもそれよりほかに生きる道はないのである。あんまの師匠は、そういう弟子をとりたがらないのだが、マスノの骨折りで、彼のばあいは首尾よく住みこめたという。その磯吉に、マスノはまるで弟あつかいの口をきき、

「おまえがめくらになんぞなつて、もどつてくるから、みんなが哀れがつて、見えないおまえの目に気がねしとるんだぞ、ソソキ。そんなことにおまえ、まけたらいかんぞ、ソソキ。めくらめくらといわれても、平氣の平ざでおられるようになれよ、ソソキ」

ビールは磯吉の膝にこぼれた。それを手早く磯吉はのみほし、マスノにかえしながら、

「マアちゃんよ、そないめくらめくらいうないや。うらア、ちゃんと知つとるで。みな気がねせんと、写真の話でもめくらのことでも、大っぴらにしておくれ」

思わず一座は目を見あわせて、そして笑った。ソソキにそういわれると、今さら写真にふれぬわけにもゆかなくなつたように、写真ははじめて手から手へ渡つていった。ひとりひとりめいめいに批評しながら小ツルの手に渡つたあと、小

ツルは迷うことなくそれを磯吉にまわした。

「はい、一本松の写真!」

酔いも手つだつてか、いかにも見えそうなかっこうで写真に顔を向けている磯吉の姿に、となりの吉次は新しい発見でもしたような驚ろきでいった。

「ちつとは見えるんかいや、ソンキ」

磯吉は笑いだし、

「目玉がないんじゃで、キッチン。それでもな、この写真は見えるんじや。な、ほら、まん中のこれが先生じやろ。その前にうらと竹一と仁太が並んどる。先生の右のこれがマアちゃんで、こつちが富士子じや。マツちゃんが左の小指を一本にぎり残して、手をくんどる。それから——」

磯吉は確信をもって、そのならんでいる級友のひとりひとり、人さし指でおさえてみせるのだったが、少しずつそれは、ずれたところをさしていた。相槌あいづちのうてない吉次にかわって大石先生は答えた。

「そう、そう、そうだわ、そうだ」

あかるい声でいきをあわせている先生の頬ほおを、涙なみだの筋すじが走った。みんなしんとしたなかで、早苗はつと立ち上った。酔よったマスノはひとり手すりによりかかって歌っていた。

はるこうろうのはなのえん  
めぐるさかずきかげさして

じぶんの美声に聞きほれているかのようにマスノは目をつぶって歌った。それは、六年生のときの学芸会に、最後の番

組として彼女が独唱し、それによって彼女の人気をあげた唱歌だった。早苗はいきなり、マスノの背せにしがみついてむせび泣いた。